

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

平成 26（2014）年度
「国際共生社会論実習」
「国際共生社会論フィールド実習」
スタディツアー
（バングラデシュ、ネパール）
実施報告書

2014 年 12 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

はじめに

グローバル協力センターが平成 23（2011）年度に開始した学生による国際調査（スタディーツアー）は、学年や専攻の異なる学生がグローバルな視点から「共に生きる」社会について学び、実践し、発信する活動の一環として、過去 3 年間に、東ティモール、ベトナム、フィリピン、バングラデシュで実施しました。この調査は、訪問国の社会や人々の生活状況の観察と、現地の教育者、若者、NGO の方々や国際協力に従事する日本人専門家やスタッフへのインタビューや意見交換を中心に構成され、参加者は講義や文献だけでは得ることのできない貴重な体験を通じて「平和」、「開発」、「国際協力」について考察を深めました。

3 年目となる平成 25（2013）年度からは、正規科目「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」の一環として現地調査を実施しています。学内公募で選抜された調査参加者は、事前学習において当該国の政治・社会・経済状況を概観するとともに、国連、国際協力機構（JICA）、NGO で様々な形態の国際協力に従事する方々から協力の仕組みや現地での活動に関するお話を伺いました。また、参加者それぞれが関心分野やテーマについて文献による調査を行い、事前勉強会で発表・意見交換を行い現地調査に備えました。

約 1 週間の現地調査では、ネパール・チームは医療・社会福祉施設の見学とインタビューを行い、バングラデシュ・チームは国際 NGO の BRAC と JICA のプログラムと日系縫製工場を訪問し、関係者の方々にお話を伺いました。帰国後は、現地で収集した情報を分析し、学内報告会を開催するとともに、学園祭で研究発表・展示を行いました。

本報告書は、スタディーツアー参加者による現地調査報告と展示の内容をまとめたものです。現地調査と事前・事後学習を経て、各参加学生の訪問国や社会への理解の深化と、更なる学習・研究や国際協力の実践への第一歩としてご一読いただき、忌憚のないご意見を賜れば幸いです。

最後に、事前学習で講義をしていただいた諸先生、現地での見学・インタビューに他大なご協力・ご支援をいただきナラヤン・バスネット教授、JICA バングラデシュ事務所、BRAC、マツオカコーポレーションの皆様にご深くお礼申し上げます。

2014 年 12 月

お茶の水女子大学グローバル協力センター長
北林春美

目次

はじめに

I 「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」スタディツアー概要	1
--	---

II 学生報告書

1. バングラデシュスタディツアー

バングラデシュ人民共和国基礎情報	9
1-1 現地調査日程	10
1-2 参加者名簿	11
1-3 調査報告書	12
1-4 訪問記録	40
1-5 写真	63

2. ネパールスタディツアー

ネパール連邦民主共和国基礎情報	67
2-1 現地調査日程	68
2-2 参加者名簿	68
2-3 調査報告書	69
2-4 訪問記録	99
2-5 写真	123

III 事後学習成果（微音祭パネル）

1. バングラデシュスタディツアー	127
2. ネパールスタディツアー	130

IV 資料

①科目概要	135
②全体スケジュール	136
③公開講座概要	138

I. 「国際共生社会論実習」
「国際共生社会論フィールド実習」
スタディツアー概要

【目的】

専攻・学年を問わず開発途上国の社会・経済・政治にかかわる問題や国際協力に関心を有する学生（学部・大学院博士課程）が、開発途上国における研究・実践の実績を有する教員の指導の下で事前学習と現地調査（約 1 週間）を実施し、その成果をレポートにまとめて学内で発表することにより、文献を通じた学習とは異なる密度の濃い学習を行う。2 単位の正規科目として実施している。

【事前学習】

説明会実施後、事前学習を通じ訪問国の社会経済や参加者の関心分野について学習した。また渡航前安全講習を一回実施した。

【現地実習】

1. バングラデシュスタディツアー（8 月 30 日から 9 月 6 日まで 8 日間）

1-1 参加学生 8 名 引率者 2 名

学年	文教育学部	理学部	生活科学部	計
1	2	0	2	4
2	0	0	1	1
3	2	0	0	2
4	1	0	0	1
博士前期	0	0	0	0

引率者： 北林春美准教授、福井美穂講師

1-2 プログラム

見学実習先は 3 つのアクターで構成されており、世界最大級の国際 NGO である BRAC（前バングラデシュ農村向上委員会：Bangladesh Rural Advancement Committee）、日系縫製工場、そして JICA（国際協力機構）である。第一に BRAC 本部での概要講義の後、ノンフォーマル教育事業、貧困対策を目的とするマイクロファイナンス事業、コミュニティ能力強化事業、生計向上事業の見学を行った。第二に日系縫製工場では、ジェンダーと労働環境を中心に概要説明、製造ライン見学、バングラデシュ人従業員のインタビューを行った。第三に JICA バングラデシュ事務所において政治、経済状況と、政府開発援助 (ODA) 等について講義を受け、ごみ処理システム、障がい者教育支援の現場を青年海外協力隊員による案内で見学を行い、交流を行った。

2.ネパールスタディツアー（8月30日から9月6日まで8日間）

2-1 参加学生 7名 引率者 2名

学年	文教育学部	理学部	生活科学部	計
1	0	0	0	0
2	2	1	2	5
3	2	0	0	2
4	0	0	0	0
博士前期	0	0	0	0

引率者： 榊原洋一教授、駒田千晶 AA

2-2 プログラム

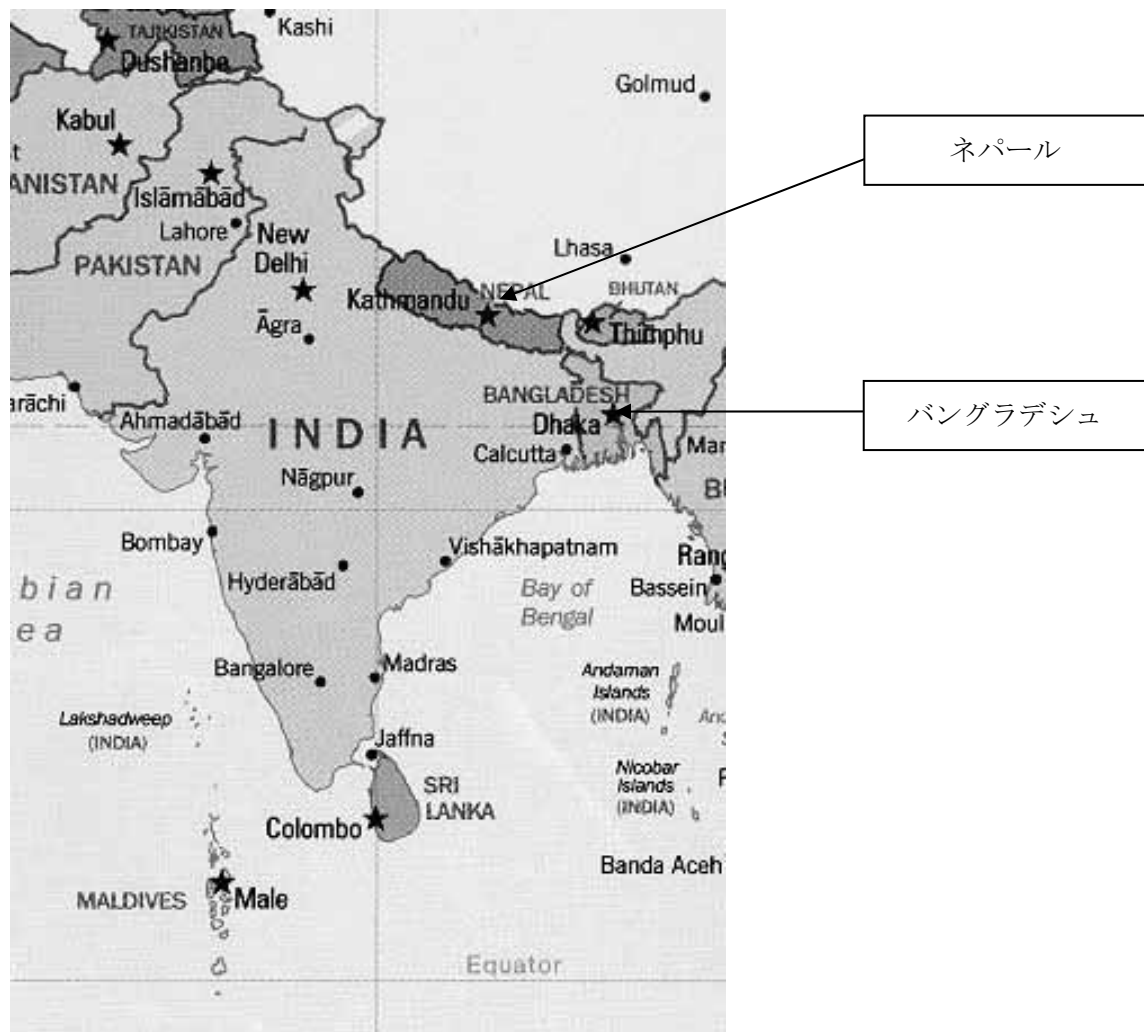
カトマンズ市の PHC(Primary Health Center)、CMDC(Children's Medical Diagnosis Center)といった医療施設では、公衆衛生サービスについて概要説明、見学、インタビューを行った。また現地女性が立ち上げたローカル NGO である、SERC(Special Education and Rehabilitation Center for Disabled Children)、WEPCO(Women Environment Preservation Committee)Nepal、Maiti Nepal、ECDC(Early Childhood Development Center)を訪問し、概要説明、見学、インタビューを通じ、障がい者教育支援、環境活動、性被害に遭った女性支援活動、また服役中の受刑者の子ども支援活動からネパールの抱える様々な問題やニーズへの理解を深めた。SERC では実際にクラスで子どもたちとの交流を行い、活動内容やスタッフの抱える課題など体感することが出来た。特に PHC、Maiti Nepal、ECDC では、少人数（3名、4名）での訪問見学であったため、きめ細かにインタビューする機会を得た。これらの交流を通じ、ネパールにおける女性リーダーの理念や生き方に刺激を受ける機会ともなった。

【事後学習】

スタディツアー参加者各自が提出した報告書をもとに、10月15日（16：40-18：10）に帰国報告会を開催し、調査の結果得られた学びを学内で共有するとともに、11月8日から9日まで開催された微音祭におけるポスター展示と発表を行った。

【その他】

実習実施にあたり、参加学生に対して、今年度は本学からの支援に加えて日本学生支援機構（JASSO）海外留学支援制度（短期派遣）による支援を活用した。



出典: Southern Asia, The University Of Texas At Austin, Perry-Castaneda Library Map Collection, Asia Maps. URL:
http://www.lib.utexas.edu/maps/middle_east_and_asia/asia_southern_pol_1994.jpg
(2014.11.19 にアクセス)

Ⅱ．学生報告

1. バングラデシュスタディツアー

バングラデシュ人民共和国基礎情報

政体	共和制
面積	14 万 4 千平方キロメートル（日本の約 4 割）
人口	1 億 5,250 万人（2013 年 3 月、バングラデシュ統計局）、年平均人口増加率：1.37%（2011 年 3 月、バングラデシュ統計局）
首都	ダッカ
民族	ベンガル人が大部分を占める。ミャンマーとの国境沿いのチッタゴン丘陵地帯には、チャクマ族等を中心とした仏教徒系少数民族が居住。
言語	ベンガル語（国語）、成人（15 歳以上）識字率：56.8%（Human Development Report 2011 年）
宗教	イスラム教徒 89.7%、ヒンズー教徒 9.2%、仏教徒 0.7%、キリスト教徒 0.3%（2001 年国勢調査）
主要産業	衣料品・縫製品産業、農業
実質 GDP 一人当たり GDP	1,156 億ドル（2013 年、バングラデシュ中央銀行） 960 ドル（2013 年度、バングラデシュ統計局）
経済成長率（GDP）	6.18%（2013 年度、バングラデシュ統計局）
消費者物価指数上昇率	7.97%（2012 年度、バングラデシュ中央銀行）
労働人口市場（2010 年、バングラデシュ財務省）	5,370 万人 農業（48.1%）、サービス業（37.4%）、鉱工業（14.6%）
GDP 内訳（2012 年度暫定値、バングラデシュ中央銀行）	サービス業（49.5%）、工業・建設業（31.3%）、農林水産業（19.3%）

略史

年月	略史
1947 年 8 月 14 日	パキスタン（東パキスタン）として独立
1971 年 12 月 16 日	バングラデシュとして独立

※参考 URL：外務省ホームページ

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bangladesh/data.html> (2014 年 11 月 10 日にアクセス)

1. バングラデシュスタディツアー

1-1 現地調査日程

8月30日(土)	羽田空港発-バンコク着 TG661 バンコク発-ダッカ着(シャージャラル国際空港) TG321
8月31日(日)	【BRAC 事業見学一日目】 BRAC 本部集合 Korail 地区ノンフォーマル教育プログラム(小学校) 見学 BRAC 本部「BRAC 事業概要」講義 【国会議事堂見学】
9月1日(月)	【BRAC 事業見学二日目】 BRAC マニクガンジ事務所到着 マイクロファイナンス (Dabi)プログラム組合集会見学 コミュニティ・エンパワーメント・プログラム集会見学 BRAC マニクガンジ職員との懇談(昼食) アイーシャ・アベッド財団見学 【独立記念公園見学】
9月2日(火)	【日系縫製工場見学】 日系縫製工場概要説明 工員の方のインタビュー 工場内製造ライン見学 【アーロンショップ見学】
9月3日(水)	【JICA 事業見学一日目】 JICA 事務所にて青年海外協力隊員と顔合わせ ごみ処理事業概要説明 ボナニ市場見学→リサイクル業者訪問→ナトゥンバザール収集現場 見学 青年海外協力隊員(環境教育)との懇談(昼食) アミンバザール最終処分場見学
9月4日(木)	【JICA 事業見学二日目】 JICA 事務所 「バングラデシュの開発と日本の ODA」講義 「JICA の障害者支援協力と BMIS 概要」講義 BMIS (Baptist Mission Integrated School) にて昼食(盲学校給食) 盲学校見学・生徒との交流 【グラミンユニクロショップ見学】
9月5日(金)	ホテル発 ダッカ発-バンコク着 TG322 バンコク発 TG682
9月6日(土)	羽田着

1-2 参加者名簿

氏名	学年	学科・専攻
伊藤 詩織	1	文教育学部人間社会科学科
高嶋 早紀	1	文教育学部言語文化学科
大西 明里	1	生活科学部人間生活学科
松田 季咲良	1	生活科学部人間生活学科
石川 文絵	2	生活科学部人間生活学科
小山 奈月	3	文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環
坂上 璃紗	3	文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環
佐藤 貴恵	4	文教育学部言語文化学科グローバル文化学環
北林 春美	准教授	グローバル協力センター
福井 美穂	講師	グローバル協力センター

1-3 調査報告書

バングラデシュにおける教育支援

伊藤詩織 文教育学部人間社会科学科 1 年

1. 調査テーマ

バングラデシュは、国民所得に対する教育費の支出がパキスタン、サハラ以南アフリカの国と並び最低国の 1 つであり、また初等教育修了率も国際的に見て非常に低く、教育水準がとても低く、この分野における課題は多い。JICA による日本の ODA の無償資金協力の大きな相手国であるが、その大部分が教育や人材育成に充てられている。政府は、EFA（Education for All）政策の採択以降、初等教育を義務化してその完全普及を目指し、純就学率は飛躍的に向上した。女性のエンパワーメントプログラムとして再教育の場を設けるなど、生涯教育も行われつつある。しかし、普及が進む中、新たな問題も生まれており、バングラデシュでは世界最大の NGO といわれる BRAC が様々な活動を行っている。今回は残念ながら、ハルタルと呼ばれるゼネストの影響によりスケジュールの都合上、当初の予定にあった女性のための法律・人権教育クラスを見学することができなかったが、BRAC が支援・活動を行っているノンフォーマル小学校を見学することで、先進国による途上国に対する教育支援が活発になされる中、現場はどのようなになっているのか、支援活動はどのように行われているのかを学び、またそれを通して現地のニーズに合わせた支援やそれに向けた課題、今後の教育支援分野全体に共通する問題を調査したいと考えた。また、JICA による支援活動や、ODA の実態や内容、またそれによる変化も調査する。

2. 調査設問

ノンフォーマル小学校とは正規の小学校を何らかの理由によりドロップアウトした子供たちに教育を提供する小学校のことである。教育現場、支援実態を知るため、

- ①生徒の性別、年齢、生まれ、住まい、家庭（家族構成など）、ドロップアウトした理由
- ②児童たちの進路
- ③ノンフォーマル小学校に通うことをどう感じているか、身の回りに変化はあったか
- ④教育・学習環境
- ⑤教員養成システム

これらについて尋ねるほか、関心事項として、ノンフォーマル小学校で指導することをどう感じているか、など教師側からの声も聴いてみたいと考えた。これらを通して、BRAC の教育支援の特徴、長所・短所、課題、またひいては NGO の存在の意義、発展途上国全体における教育支援システムについても学び、考察する。

3. 調査結果

今回のスタディツアーではバングラデシュ最大のスラム街の Korail 地区にある North 4 Primary School を見学した。

男子 14 人、女子 16 人の計 30 人の児童が通っていた。BRAC が運営するノンフォーマル・プレプライマリーに通っていた子供は少ないという。8 歳から 12 歳までの年齢の児童がおり、小学校の近くにみな住んでいる。



ノンフォーマル小学校では、通常バングラデシュでは 5 年制である初等教育を 4 年で終わらせ、児童たちは小学校の卒業試験を受けほぼ 100% の児童が進学する。この卒業試験は落ちる人はいない。3 年生までは BRAC のシステムで学ぶが、4 年生からは政府のシステムのもと学習を行う。また BRAC の職員は、ノンフォーマル小学校を卒業した子供たちがきちんと学校に通っているか、勉強しているかなども一人ひとり調べる。

言葉の壁もあり子供たちから直接聞くことはできなかったが、一人ひとりが笑顔で楽しそうだったのがとても印象的だった。また教師の話ではみなとても真面目に学校に通っているということだった。

教育・学習環境は、日本とはさまざまな面で非常に異なっておりとても衝撃的だった。行き着くまでは、ぬかるみ凸凹のある非常に状況が悪い道で、リキシャや牛や羊、犬など



が道路を自由に行きかい、店や住宅が立ち並ぶ、いわゆる市民の生活の場である街をずっと入り込んだところにあった。学校は家々の並びにあり、学校という感じはまるでしないところだった。狭い入口には扉も靴箱もなく、窓にはガラスもなかった。学校といっても、校舎にはその入り口のある狭い教室が 1 つだけで、そこには机も椅子もなかった。教室では児童たちが車

座になって座り、一人ひとりの前に文具、教科書等が置いてあったが、これらは BRAC が無償で支給している。長期休暇はなく週に 6 日授業が行われる。児童数が多いため授業は、午前 8 時から正午までと、午後 1 時から午後 5 時まで、というように 2 つに分けて行っており、先生は 1 人で朝から夕方まで授業を受け持つ。数学、環境、英語、ベンガル語の 4 科目の授業が行われている。見学した際、毎日行っている「1 日のいいこと」についての唱和をしてくれた。内容は「年上を尊敬する」「毎日学校に来る」「宿題を毎日する」「週に 1 回爪を切る」「学校の規則を守る」というようなもので、5 人に 1 人リーダーを決めてこれをみんなが守るようにする仕組みがあるのだという。古典的ではあるが、きちんと秩序を守ろうと努力がなされていた。



ノンフォーマル小学校の教員養成システムは、ユニークなものだった。見学した小学校の先生は、20代後半の若い女性で、地元のコミュニティから採用され、訓練を受けてから教師として指導に当たる。ノンフォーマル小学校では同じ教師が卒業するまで同じ児童たちを受け持ち、その児童が卒業したのち新たな児童が入ってくるため、仲もよく、児童のことをよく理解し、適切な指導を行うことができるメリットがある。採用される教師は25歳から45歳まで、98%が女性である。ノンフォーマル小学校は近年ますます拡大しているが、この採用システムをとることで特別に教師を他の地域から連れてくる必要もなく、地元の人間を採用することで児童たちの身近なことが分かり、理解力やカバー力を備えていることが強みだといえるだろう。教師にとっても、大変そうではあったが待遇もそれなりによく、自らも勉強をすることができて満足していると話していた。

4. 考察

これまで見てきたノンフォーマル小学校の事業は NGO の BRAC が主体となっていて行っているもので、外国からの ODA などの支援は入っていない。世界最大の NGO といわれるだけあって事業も手広く、市民の力で国をより豊かにするため、教育分野の支援を拡充させるために活動している BRAC のその形態は、国際的に見てもとても珍しいし、理想的な姿なのではないか、と今回の見学を通して感じた。もちろん先進国が途上国にてこ入れしていかなければならない分野や技術面での困難もあるだろうが、やはり同じ国民である限り、文化や言葉、慣習など分かり合い進めやすい部分が多々あると思う。それに加え、BRAC は地元のコミュニティから教員を採用する、地区の小学校に通っていない子供たちを調べその子たちを学校に通わせる、卒業した後もきちんと学校に通い勉強しているか聞き取りを行うなど、根気のいる地道な活動を行っている。もちろん団体の規模の大きさあつてのものだが、そのような地元と連携したり、きりがいいかもしれない作業を行うことが重要なのだと感じた。支援というと、上からものを与える形で、細部の配慮までは気が回らず、提供するという行為だけで終わってしまうことが多いが、BRAC は地道に市民と同じ目線に立ってニーズに沿った活動を行っている。これは、今後どの分野においても、国際協力という場において大切になってくる要素なのではないか、と考えさせられた。お互いがお互いを認め、大掛かりなプロジェクトを実行することに満足するだけでなく、その後も根気強く地道な活動をしていくことが大切なのだと感じた。

5. 調査に参加した感想

初めてのアジア地域、そしてイスラム圏への渡航だったが、本当にカルチャーショック

の連続だった。停電、サービスの行き違い、道路事情の悪さ、文化・宗教の違い、 Bangladesh のあらゆる場面で遭遇した衝撃は忘れられないものになったと同時に、日本での自分の生活に関しても改めて考えなおすきっかけになった。また「アジア最貧国」といわれる Bangladesh だが、食糧に困っている様子はまるでなく、ご飯もおいしいし、人々も明るく陽気でやさしく、自分の前イメージがどれだけ偏っていたか、私たちはどれだけ日頃固定観念にとらわれているかを感じるとともに、自分で実際に足を運んで、五感で体感することがとても重要であることを実感した。言葉では言い表せないほどの素晴らしい経験を積むことができ、自分の視野やものの見方を広げる機会を与えてくれ、このスタディツアーに参加できたことを心から嬉しく思っている。

ジェンダーと労働環境

高嶋早紀 文教育学部言語文化学科 1 年

1. 調査のテーマ

今回の調査は「ジェンダー」をテーマとし、特に現在急速に経済成長を果たしているバングラデシュの主要輸出部門である縫製産業で働く女性作業員たちの労働状況に焦点を当てた。

2. 調査設問

主な設問は以下の 4 つである。

①女性作業員の労働状況

②2013 年の縫製工場崩壊事故からの工場側の対策

③パルダ（女性を外部から隔離する習慣）に対する考え

④2010 年から始まる政策「ビジョン 2021」（「ジェンダーバランスの推進」を内容の一つに挙げている）は工場経営、労働環境にどのような影響を与えているか

3. 調査結果

調査のために訪れたのはアシュリア地区にある MK APPARELS LTD. である。広島県に本社を構えるこの日系縫製工場は 2007 年に設立されて以来、主にズボンを生産し、AEON や UNIQLO といった日本企業その他、イギリス、アメリカ、スペイン、そしてオーストラリアに向けて製品を輸出している。従業員数は 1,400 名で、そのうち 70% を女性が占め、彼女たちのほとんどが縫い子として働いている。

対応してくださったのは、社長の申泳均氏（韓国人）と(株)マツオカコーポレーション営業本部営業 1 部 3 課の山見浩允氏、同社より出向している生産部の鈴木智弥氏、そして工場で働く男性 1 名と女性 3 名である。山見氏、鈴木氏からの工場概要説明と質疑応答の後、労働者の方々（女性のうち一人は人事担当者）へのインタビュー、申氏による工場施設内の案内があった。

まず、労働時間は一日 8 時間労働（8:00～17:00）で 1 時間の昼休みがあり、イスラーム教国ということで礼拝室と礼拝時間が確保されている。人材の割り振り、所属決定は現地のマネージャー（男性）が行う。女性の地位が低い国であるため、女性の問題を聞き、ケアをするマネージャーを配置しているが、そのマネージャーは全員男性で占められているということだった。また、労賃に関しては昨年政府が衣料部門従業員の最低賃金をそれまでの月額 3,000 タカから 77% 高い 5,300 タカに引き上げており、それを順守した賃金を月に一回、現金で支払っている。製品審査基準が高い日本からのオーダーが多いこともあり、他の工場に比べ女工たちへの給料は高く、給料も熟練度によって分けられた工員のレベルによって異なっている。（工員は全て A,B,C のレベルに分けられており、A レベルが熟練度、

給料共に最も高い。) 女性にとって重要な産前産後休暇は有給休暇 4 か月となっているが、三人目の子供からは取得できないことになっている。(2006 年から施行されたバングラデシュ労働法では、産前産後休暇は 16 週間で、且つ二人以上の子供を育てているものは三人目からの産前産後休暇が使用不可になる代わりに療養などの休暇が使用可能と定められている。MK APPARELS LTD.の工場の規程はこの法律を基にしていると考えられる。) 労働組合は組織自由とのこと。

次に、2013 年に起こった同アシュリア地区の縫製工場ラナプラザ崩壊事故後の経営者側の状況と対策を伺った事故後は政府の建築基準の検査が厳しくなり、政府機関が国中の縫製工場を一つ一つ、建築基準をクリアしているかどうか調査した。(後日訪れた JICA バングラデシュ事務所の富田氏によると、政府の調査で当時稼働していた縫製工場の約 70%がラナプラザと同じ構造だったということだ。) バイヤーも企業の社会的責任の視点から独自の検査機関スタッフを派遣した。MK APPARELS LTD.の工場は政府・バイヤー両方の建築基準審査に合格し、一週間の操業停止の後再稼働。それと共に、今まで避難訓練を実施していなかったことを見直し、防災訓練を始めるに至った。

パルダに関しては、ダッカのような都市に住む女性たちはあまり意識しておらず、男女ともに女性が工場で働くことは珍しいことではないと考えているようだった。ただ、地方の農村などではまだパルダが残っている場合もあるのでは、という回答だった。また、政策「ビジョン 2021」については、山見氏、鈴木氏とも把握していないようだった。

この他、労働者の方々へのインタビューで目立ったのは、「日系であるこの縫製工場は作業員に対する手当が厚い」という声だった。実際、インタビューに答えて頂いた男性作業員の方は、全て自己責任といって何も負担してくれなかった以前の会社を辞めて MATSUOKA の工場に來たと仰っていた。また、工場に対し、職場の雰囲気がいよ、法律を順守する、5 S (整理、整頓、清掃、清潔、しつけ) のシステムが好き、といった高評価な意見が多かった。

4. 考察

はじめに、労働状況についてだが、最低労賃等の法律を順守し、作業中の事故に対し手当が出ることや、工員も熟練度別に給料を変える等、「日系」縫製工場ということもあってか、訪問以前の事前学習から想像していた労働状況よりも工員への待遇が良いことに驚いた。但し、女性のケアを男性マネージャーが務めることには限界があると感じるし、有給の産前産後休暇も取れるが、子供一人当たり休暇期間 4 か月でしかも 3 人目の子供からは休暇が取れないというのは、例えそれが現地の法律に沿ったものであっても、まだまだ女性の出産に対する工場側の対応が不十分と言えるのではないだろうか。実際、インタビューに答えて頂いた女性作業員の一人は、以前働いていた縫製工場から MATSUOKA の工場に職場を変えた理由として、「MATSUOKA の工場が家から近いのですぐに帰って赤ん坊の面倒をすることが出来るから」と仰っていた。この女性は偶然、家からすぐ近く of 場所

に次の職場があったため育児と仕事を両立出来ているが、バングラデシュの全ての女性たちが彼女のように幸運な状況にあるとは言えない。特に、国営や現地の民間企業の工場は、訪問した MK APPARELS LTD.の工場よりも工員への待遇が悪いと考えられる。現地の法律順守に加えて、出産による女性の活動範囲の縮小を最小限に止め、長期にわたり勤務出来る環境を更に独自に整えていくことが工場側に求められている。また、イスラーム教徒の工員に配慮して、礼拝の時間・場所を設けることは、これから大量に外国人出稼ぎ労働者を受け入れようとしている国内の日本企業にも必要となってくるだろう。

次に、パルダについて都市の人々が男性・女性に関わらず、あまり意識していないことは、女性が外で働く機会が増加した結果、男女ともに女性が積極的に外で働くことに抵抗を持たなくなったからだと考えられる。女性が外で働く機会が増加した原因としては、急激な経済成長に伴い、国の主導のもと女性を安価な労働力として生産ラインに投入してきたこと、また、物価高が進む中、男性の失業率の高さも加わって、生活の必要上、女性が一家を経済面で支えざるを得ない状況に陥ったことが挙げられる。いずれの原因も本質的男女の平等を達成するという立場から始まったものではないが、女性の物理的な行動範囲を広げることに一躍買い、ジェンダー格差を少しでも解消したことに違いはない。

5. 調査に参加した感想

今回調査に参加して、日本での事前学習内容を実際に現地に行き確認することが出来たのは非常によい経験だった。工員の方々が働いている様子、その環境、彼らの声を肌で感じて、資料だけで学ぶことの限界を知ると同時に、もっと途上国のジェンダーについて調べてみたいという思いが強まった。ただ、「ビジョン 2021」について工場側からの意見を調査出来なかったことは非常に残念だった。この政策が女性の社会的地位向上にどのような影響を及ぼすのか、これからも追って調べていきたい。また、今回学んだ紡績工場の労働状況は、その工場の製品を購入している私たち日本人に深く関係している。私たちが普段何気なく着ている衣服、その「安さ」の裏には何があるのかを、日本の中で発信していき、一消費者として労働者たちの状況改善のために何が出来るのかをこれからも絶えず考えていきたい。

6. 参考文献

FaisalhrGuy, Maternity Benefits under the Bangladesh Labour Law 2006 ‘An analysis - with focus on the RMG Industry’ URL :
<http://faisalhrGuy.wordpress.com/2013/07/12/maternity-benefits-under-the-bangladesh-labour-law-2006-an-analysis-with-focus-on-the-rmg-industry1/> (2014/09/11 にアクセス)

バングラデシュの縫製産業と女性の労働環境

大西明里 生活科学部人間生活学科 1 年

1. 調査のテーマ

近年バングラデシュにおいて存在感を増している縫製産業の現状を把握するとともに、そこで働く女性労働者について考える。

2. 調査設問

- ・バングラデシュの縫製産業の現状はどうなっているのか
- ・工場で働く女性はどのような環境で、何を思っているのか

3. 調査結果

①バングラデシュの縫製産業

今回、私たちは縫製工場の見学として MK APPARELS LTD.を訪問した。その時のインタビューや見学させてもらったことから現在のバングラデシュの縫製工場を考えてみたい。MK APPARELS LTD.ではレディース・メンズを問わず主にパンツを製作している。95%は日本からのオーダーであり、ユニクロ、トップバリュ、イトーヨーカドーなどの商品の一部となる。ここで働くのは1,400人であり、生産ラインは13存在する。見学させていたいただいた時も、そのすべてのラインで人々が忙しく働いていた。

工場内見学の後、申社長にインタビューをさせていただいたが、その話によれば現在のバングラデシュの縫製産業は厳しい状況にあるという。2013年にダッカで起きた縫製工場の崩落事故の影響が大きいらしく、欧米各社は以前よりもバングラデシュに発注しなくなったのだそうだ。また、ストライキの影響もあり、2013年度のバングラデシュの経済が最も悪い時期だったらしく、GDPもかなり落ちたとのことだ。現在は選挙が終わり、比較的落ち着いているという。

また、EPZ (Export Processing Zone、輸出加工区) についても伺ったのだが、現在 KEPZ (韓国企業が設置・運営する輸出加工区) は存在するが日本のものはまだないとのことで、かつ EPZ は土地を借りることしかできないかもしれないとの不安があるようだった。しかし、EPZ にはセキュリティの問題などのメリットもあるため、JEPZ 設定の動きも望んでいるようであった。

②女性労働者の現状

MK APPARELS LTD.、また、アイーシャ・アベッド財団では多くの女性が働いていた。MK APPARELS LTD.では女性社員が全体の70%にも上り、女性の労働が工場経営に大きく関わっていることは明らかである。ここで、MK APPARELS LTD.とアイーシャ・アベッド財団のそれぞれの女性労働者の環境について比較してみたい。

MK APPARELS LTD.では、女性は主に縫製、検品作業を担当し、アイロンなどの危険

を伴う作業は男性が担当していた。また、製品のサンプルを作る仕事は熟練の工員の仕事であるが、そこに配属されているのは大半が男性であった。産前産後休暇は国の法に則り 4 ヶ月の有給休暇で、1、2 人目は取れるが 3 人目からは不可である。他の工場では保育士を雇っているところもあるというが、この工場にはいないそうである。結婚、出産で退職する人は少ないとのことであった。

人事部の方 (Ismat Jahan Rupa さん) に話を伺うことができたが、彼女の話では、上層部には男性が多いとのことだった。彼女自身は子供を二人持つ 4 人家族であり、IT 関連企業に勤める夫との共働きだそうである。他の方へのインタビューなどでわかったことであるが、バングラデシュでは、男女を問わず夫婦のどちらかが家計の担い手になることが多いようで、Ismat さんのような共働きのケースは珍しいと考えられる。結婚・妊娠による退職の少なさもこれが理由であると考えられ、ここから日本に比べると生涯を通して働き続ける女性は多いのではないかと考えられる。

また、彼女は国立大学で政治学を学んだとのことである。MK APPARELS LTD.でも、文字が読めない、書けないという人は大半らしく、また、技術がなければできる仕事は糸を切るくらいだそうである。彼女が女性でありながら男性が大半の上層部で働いているのは、このような読み書き能力を持つことや、高学歴であるためであろう。

一方、アイーシャ・アベッド財団も、働いている人の大半は女性である。ここではダッカのアーロンショップや海外で売られる手工芸品を製作しており、技術がなくとも一から教育を受けることができる。職員が自由に使える託児所や、産前産後休暇は 6 ヶ月の有給休暇、週 2 回訪れる医師の診療を無料で受けられるなど、女性の労働環境としてはかなりいいものであると考えられる。

4. 考察

MK APPARELS LTD.、アイーシャ・アベッド財団の両者とも女性の多い職場である。両者ともに女性がいなければ成り立たない仕事である故か、育児関連の保障や、マネージャーの存在など、日々のケアは怠っていないように思われた。MK APPARELS LTD.に関しては、実際の工員にインタビューしても、日系企業という理由もあるのかもしれないが、前の職場よりも働きやすい、と述べていた。

だが、両者ともに読み書きのできない者が多いのが問題であろう。読み書きができないというハンデを抱えていれば、いくら労働条件がよくとも単純労働にしか従事できない。元々バングラデシュはイスラム圏の国であり、男性に比べて女性は何かと制限されるところも多い。JICA の隊員の方も「現地の人々にも、女性は男性より劣っているものだ、という意識がある」とおっしゃっていた。イスラム圏で女性がしっかりと働いていくためには、このような意識とも戦わねばならないのである。

このような状況の改善はやはり教育の充実が不可欠なのだろうし、Ismat さんの例からも、この教育の有無はバングラデシュの女性労働者の選択肢を大きく変えることになるだろう

と感じた。

5. 調査に参加した感想

今回、調査に参加して実感したのは、バングラデシュの新興国としての勢いである。実際に訪れるまでは、数値的データでしか知り得なかった国であり、「最貧国」としてのイメージが先行していたバングラデシュだが、現地に着くとそのようなマイナスのイメージは払拭された。街や人々に溢れる活気は、日本では決して味わうことのできないものであった。一週間という短い期間ではあったが、この国について詳しく知る機会を持つことができてよかったと思う。

しかし、このようなプラスな面に気づかされると同時に、スラムやごみ処理場の見学から見てきた社会の格差、また日々の生活や移動の際に実感したインフラ面の問題など、考えさせられることも多かった。現在バングラデシュの人口は世界 10 位以内に入り、爆発的な成長をしていると言っても過言ではないだろう。その中で、現在のまま格差を引きずっていくとしたら、それは国の発展の大きな阻害要因になることは明らかである。MK APPARELS LTD.の申社長もおっしゃっていたことだが、道路などのインフラ整備だけで変わることは多々ある。これらの問題の早期解決を望むとともに、これからのバングラデシュの発展を注視していきたい。

6. 参考文献

- ・大橋正明、村山真弓編著（2005）『バングラデシュを知るための 60 章』明石書店
- ・池田洋一郎（2013）『バングラデシュ国づくり奮闘記 アジア「新・新興国」から日本へのメッセージ』英治出版
- ・渡辺利夫（2002）『成長のアジア 停滞のアジア』講談社
- ・ブリギッテ・エルラー著、伊藤明子訳（1987）『死を招く援助 バングラデシュ開発援助紀行』亜紀書房
- ・松井範惇、池本幸生編著（2006）『アジアの開発と貧困：可視力、女性のエンパワーメントと QOL』明石書店

バングラデシュのインフラと経済と工業の関係

松田季咲良 生活科学部人間生活学科 1 年

1. 調査のテーマ

バングラデシュのインフラが経済や工業にどのように影響しているのかを、現地で伺った話やバングラデシュの街の様子から考察する。

2. 調査設問

調査のテーマを考察するにあたって、次の 3 つの設問を立てた。1 つ目は、バングラデシュのインフラの現状と問題点・今後の展望が何かである。2 つ目は、バングラデシュの近年の経済状況と今後どう推移していくのかである。3 つ目は、バングラデシュの工業の現状と今後の動向だ。

3. 調査結果

①インフラ

首都ダッカでは通勤時間の交通渋滞が深刻な問題となっている。これにはいくつかの原因がある。1 つ目は、ダッカに極度に人口が集中していることだ。JETRO によると、2011 年時点でダッカの人口は 1,188 万人にのぼるといふ。この人口に対して道路や公共交通機関が圧倒的に不足しているのが現状である。また、富裕層が家族で一台ではなく一人一台車を使用していることが渋滞をさらに悪化させている。この状況を打開するために立ち上がったのが、ダッカ都市交通整備事業だ。これは、JICA の支援のもとバングラデシュ初の高架都市交通 (MRT) を 2021 年までに全線 (20.1 キロメートル) 開通させることを目標としたプロジェクトである。MRT が開通すると、ダッカ南北の移動が 120 分から 36 分へ大幅に短縮され、50 万人の通勤の足となる。この他にも、ダッカ・チッタゴン間国道 1 号線の重要な 3 橋の第 2 橋新設計画が進められている。さらに、ナラヤンガンジやガジプールといった郊外都市の開発構想も持ち上がっており、ダッカからの都市機能の分散が期待されている。

一方で、電気は水力・火力で発電されているが、全国消費量を完全には賄えておらず、停電はしばしば起こるのが現状だ。そこで現在、マタバリに臨界圧石炭火力発電所を建設する事業が計画されている。発電所が稼働すれば現電力供給容量の 18%を賄えるという。

②経済

バングラデシュはここ十年で平均 6%の経済成長を遂げている新興国だ。その成長の速さから、BRICs の次に経済大国になることが見込まれる「NEXT11」の一国として期待されている。1 人あたり国民総所得も 2013 年時点で 900 ドルを突破し、インフレ率も 7%程度に安定しているため、まもなく世界最貧国を脱却すると言われている。また、チッタゴン

に経済特区を設ける構想も持ち上がっているため、外資系企業の流入により経済成長がさらに加速する可能性もある。しかし富の分配が適切になされていないのも事実だ。JICA バングラデシュ事務所の富田次長によると、2008 年から 13 年の間で政治家の資産が 300 倍から 4,000 倍にも増加した一方、国民の中には 1 日 1.25 ドル以下で暮らす貧困層もいる。今後、富を均等に分配できるのかが国民の生活向上の鍵となるだろう。

③工業

バングラデシュでは軽工業が盛んであり、輸出額の 80%を軽工業が占めている。特に縫製に関しては受注先からも定評があり、同経済水準のミャンマーと比較しても品質が勝っているのが特徴だ。しかし、2013 年に発生したラナプラザ崩落事故などの度重なる工場での事故やストライキにより、近年欧米からの受注が減少しており、労働時間を短縮する措置を取る企業も現れている。そのような中で、スーツなど高級衣類の生産に着手できるか否かが今後の軽工業の展望を左右することになるだろう。

一方、重工業はまだ発展途上であり、自動車や電気機器は輸入に依存している。しかし、2006 年から Walton というバングラデシュ企業が電気機器の国内生産を開始し、着実に生産量を増やしている。2011 年からは海外への輸出も始まり、2012 年現在で 16 か国へ輸出されている。バングラデシュが工業国になる日はそう遠くないのかもしれない。

4. 考察

以上の調査結果を踏まえて、ここからはインフラが経済や工業に及ぼしている影響について考察していきたい。まず、インフラが経済に及ぼす影響であるが、交通渋滞により年 2,500 億円もの損失が出ている。もしダッカ都市交通整備事業が成功した場合、この損失を緩和することができる。次にインフラが工業に及ぼす影響であるが、縫製工場の場合、渋滞で燃料を必要以上に消費するだけでなく、納期に遅れてしまうこともある。停電になった場合、ジェネレーターがない工場は生産ラインが停止してしまうし、ジェネレーターがあっても燃料費が高価であるため、経営を圧迫することになる。交通・電力事情が改善されれば、生産・出荷の効率化が進みコストを削減できる上、軽工業では欧米からの受注が再び増加し、重工業も本格始動する可能性がある。

このように、インフラの動向がバングラデシュの発展に大いに関わることが分かった。JICA でも MRT (Mass Rapid Transit : 都市高速鉄道) を初めとして様々なインフラ整備の援助 (円借款や技術援助) を進めている。今後の動向に期待したい。

5. 調査に参加した感想

調査に参加する以前は、GDP などからバングラデシュは世界最貧国であり、食べるものにも苦勞している国という印象を持っていた。しかし、実際に現地に行ってみると、ダッカ市街には高層ビルが立ち並んでいたり、食文化が豊かであったりと、自分の思い描いて

いたものとは大きく異なることに気がついた。また、バングラデシュの交通渋滞も文献で読んで知識としてはあったが、実際に渋滞を体験してはじめてバングラデシュの交通事情の深刻さが分かった。さらに、縫製工場で働く現地の方々や JICA の方から話を聞くという貴重な機会も得ることができた。このように、現地に行かないと体感できないことを体験できたことは自分にとって大いにプラスになるだろう。

また、事前学習の段階ではインフラを中心に調査を進めていたが、現地の様子を見て経済や工業など多面的にバングラデシュを調査する必要性を感じ、本テーマを設定した。そして、バングラデシュと日本の文化の差についても学ぶことができた。このように、調査を通して複合的な視野も身に着けることができた。

以上のことから、調査に参加したことで非常に有意義な時間を送れたと言える。大学卒業後には、バングラデシュの発展を支援できるようなボランティアに参加したいと思っている。

6. 参考文献

- ・ JICA 「ODA が見える。わかる。～協力プロジェクトの現場を紹介“ODA 見える化サイト”」 <http://urx.nu/cjD3> (2014.9.23 にアクセス)
- ・ JETRO 「バングラデシュ企業」 <http://urx.nu/cjE7> (2014.9.23 にアクセス)

バングラデシュにおける人口問題とジェンダー

石川文絵 生活科学部人間生活学科生活社会科学講座 2 年

1. 調査のテーマ

バングラデシュにおける人口問題とジェンダーについての現状と、BRAC による取り組みを調査する。

2. 調査設問

- ①バングラデシュにおける人口問題とジェンダーの現状
- ②BRAC による人口問題とジェンダーに関する取り組み
- ③フィールドワークより

3. 調査結果

- ①バングラデシュにおける人口問題とジェンダーの現状

Demographic and Health Survey の 2011 年のバングラデシュの報告書の第 4 章「Marriage and Sexual Activity」によると、同国において結婚は一般的であり、90%以上の女性が 30 歳以前に、同じく 90%以上の男性が 35 歳以前に結婚していることが調査よりわかる。また、バングラデシュはイスラーム国ではあるが、二人以上の妻がいる夫の割合は全夫婦に対して 1 %に満たず、一夫多妻制は一般的ではない。結婚持参金制度である「ダウリ」も地方やダッカの一部では依然として残っている。また女性への行動規制である「パルダ」も農村部の中流階層女性の間で見られる。

都市に住む女性の平均初婚年齢が 16.2 歳であるのに対し、地方に住む女性は 15.3 歳であり、初婚年齢には地域差があることがわかる。近年は女性の初婚年齢が上昇傾向にある。15 歳までに結婚する女性の割合が、45 歳から 49 歳の層では 52%であったのが、15 歳から 19 歳の層では 17%と児童婚の減少がわかる。また、約半分の女性が 18 歳までに、70%が 20 歳までに出産を経験する。2011 年のバングラデシュにおける合計特殊出生率は 2.3 であり、2007 年の 2.7 に比較し 15%近く減少している。

また、女子教育は初婚年齢と強い関連を持つ。中等・高等教育を終えた女子は、教育を受けていない女子と比較し、初婚年齢が 5 年遅い。世界銀行の発表によると識字率と避妊実行率（Contraceptive prevalence rate: CPR）は強い関連性があるといわれているが、同報告書の第 7 章「Fertility Regulation」では、教育を受けていない女性の避妊実行率が 61%、中等または高等教育を終えた女性の避妊実行率が 63%と大きな差は見られず、すべての教育レベルの女性においてピルが最も使用されている。しかしながら教育を受けていない女性は教育を受けた女性に比較すると、不妊手術を受ける女性の割合が高いとされている。

- ②BRAC による人口問題とジェンダーに関する取り組み

BRAC は 1972 年にスラ郡で保健の取り組みを開始した。1975 年にはスラは国内で避妊

実行率が最も高い地域となった。また普及率増加を阻む要因は女性の地位、所得の欠如、識字率の低さにあることがわかった。同年に女性による村落保健ワーカー（シャスティオ・シェビカ）の仕組みを導入し、日常的な病気の治療や村の女性への栄養管理、家族計画に関する取り組みを始めた。

BRAC の保健マネージャーはプライマリ・ヘルスケア、栄養、家族計画が女性にとって重要であると捉え、また BRAC のフィールドワーカーは村では男性グループより女性グループを優先的に組織化するように努めた。このことから、識字プログラム、保健プログラム、教育プログラムなどにおいて女性は平等または優先的に処遇されることが原則となった。

1986 年には「子どもの生存プログラム」の下位プロジェクトとして「プライマリ・ヘルスケア・プロジェクト」が開始され、予防接種やビタミン A カプセルの配布に加え、伝統的な出産介添人の訓練や家族計画が重点項目として盛り込まれた。出産介添人の在職訓練によって、各村に少なくとも一人の訓練を受けた介添人が存在することになり、妊娠中のケアや新生児ケア、家族計画に貢献した。

BRAC の 2013 年度版活動報告書によると、現代家族計画を利用適用した夫婦は 970 万組に達し、2013 年には約 100 万の女性と子どもが、BRAC によるリファラルシステムによって正式な健康管理の施設に紹介された。

また、BRAC は学校プログラムを終了した村にはリーディングセンターを設立し、女性の権利や性と生殖に関する情報などの提供を行った。

③フィールドワークより

BRAC によるコミュニティ・エンパワメント・プログラムでは政府職員の Female Welfare Assistant が母子保健や家族計画に関するゲストスピーカーとして招かれ、コミュニティの女性の啓発強化を行っていた。また、具体的な避妊方法に関する情報提供もおこなっており、イスラーム国ではありながらも家族計画に関して率直な話し合いがされていた。

また、BRAC によるマイクロファイナンス（Dabi）プログラムでも、家族計画に関する取り決めが見てとれた。メンバーの貯蓄融資ノートの後ろには 18 か条の社会的態度に関する決まりが掲載されており、そのうち第 4 条が家族計画に関わっており「我々は家族計画を実践し、家族のサイズを大きくしない」という内容であった。メンバーはいかなるミーティングであっても話し合いに入る前に全員で 18 項目を復唱するとのことだった。

4. 考察

バングラデシュにおける人口問題は、教育や貧困、保健、ジェンダー、宗教的価値観など様々な要因が複合的に絡み合った問題である。強固な家父長制と女子の純潔を重視するイスラーム教が支配的な社会のもと、バングラデシュの女性は早婚・皆婚が一般的であるが、近年は女子教育の拡充に伴って晩婚化傾向が見られる。バングラデシュは国の発展に NGO が大きく貢献しているユニークな開発モデルであるといえる。

今後の経済発展が見込まれるバングラデシュにおいてますます貧富の差が拡大していくと考えられるが、女子教育と保健医療における男女平等が重要になるだろう。女性への教育は、結婚、出産や子どもの健康に対する意識や行動に大きな影響を与えており、機能的教育の重要性を見てとれる。また、保健医療分野において、政府の政策を国家レベルから貧困者レベル向けのものへ移行し、男女双方の医療アクセスを可能にすることが必須である。

5. 調査に参加した感想

アジア最貧国と言われるバングラデシュには、肥沃な大地、世界最大の NGO、そしてたくましく生きる人々の姿があった。現地の方が「バングラデシュは貧しい国だが飢餓は少ない」と教えてくれたが、市場には色とりどりの作物が売られており、豊かな土壌がもたらす恵みを直に感じる事ができた。またその土壌は同時に洪水をもたらし、病原菌の温床になったり、人々の住みかを奪ったりするという痛々しい側面を持つことも知った。

また、街中を歩く若者がスマートフォンを所持していたり、外資系企業がどんどん参入していたりと、国が新たなフェーズへ向かっていることを実感するとともに、未発達のインフラなど、ハードがソフトに追いついていないという現状が、頻発するハルタルなどの政情不安と相まって国の経済発展を鈍化させる恐れがあることを知った。

一週間という短い期間ではあったが、人々の積極的な参加態度に市民社会やコミュニティの持つ強さを感じ、機能的教育が貧困の連鎖を断ち切る鍵として大いなる可能性を持つことを学び、文献やデータでは知ることのできないバングラデシュのイメージを実感としてつかむことができた。この経験から、日本で大学生としての利点を最大限に生かし、更なる学び・行動へと繋げ、共生社会の一員として社会への貢献のあり方について模索していきたい。

6. 参考文献

- ・イアン・スマイリー (2010) 『貧困からの自由』 明石書店
- ・キャサリン・H・ラヴェル (2001) 『マネジメント・開発・NGO』 新評論
- ・保坂恵美子 (2005) 『比較ジェンダー論 ジェンダー学への多角的アプローチ』 ミネルヴァ書房
- ・ world development report 2012, Gender Equality and Development, THE WORLD BANK.
- ・ DHS Training Institute and National Population, Mitra and Associates, Dhaka, Bangladesh, ICF International, Calverton, Maryland, United States MEASURE, Bangladesh Demographic and Health Survey, 2011-Final Report, January 2013, Chapter 04-Marriage and Sexual Activity.
- ・ Bangladesh Demographic and Health Survey, 2011-Final Report, January 2013,

Chapter 07-Fertility Regulation.

- BRAC, BANGLADESH REPORT 2013.

BRAC マイクロファイナンスのローカルへの寄り添い方

小山奈月 文教育学部グローバル文化学環 3 年

1. 調査のテーマ

① マイクロファイナンスとは

2006 年にムハマド・ユヌスがグラミン銀行と共にノーベル平和賞を受賞したことで、一気に盛り上がり、「貧困への切り札」とまでもはやされたのがマイクロファイナンス(以下、MF)だ。MF は、貧困の為に銀行から金融サービスを受けることもままならない、いわば疎外された人々に対して、銀行に代わって金融サービスを提供するものである。こうすることで、貧しい人が資本を手に入れる手段を掴み、自分の力で資本を増やして貧困から脱却する、というのが MF のビジョンだ。これまでの無償提供や寄付などの、先進国側から一方的に与える・援助する、ということが中心であったが実りの少ない国際協力の分野において、当事者である途上国側の国民が主体となって努力し、貧困から脱却する、という在り方も歓迎される理由であったとされる。

MF それ自体はユヌスの受賞以前から存在していたが、彼がその効果を身をもって実証したこと、そして高い返済率を示し、長らく MF の課題であった点を克服したことが大きく評価され、受賞につながった。ここで、先行研究の多いグラミン銀行の MF について概説する。

MF を受けて得られた金銭によって、それを元手に職業教育を受けることや、家畜を飼い生計を立てることや、機織り機を買い、布を織り生計を立てること、子どもに教育を受けさせることが可能になる。そうして豊かになる、というのが広く言われている MF の成功例だ。

② 第二世代マイクロファイナンスの課題（萱野智篤 2004）

ここで萱野（2004）の論文を紹介したい。まず、第二世代 MF という言い方だが、萱野は 1990 年代後半までの MF を「その手段の革新性と急速な拡大が世界的な注目を集めた…第一世代」（p.67）、そして 2000 年以降の MF を「さらにその拡大と深化を目指した第二世代の発展期」（同上）としている。今現在（2014 年）をそろそろ第三世代としても良いのではないかと思うが、ここでは第二世代 MF の問題点を列記する。

- A. 不定期収入の為、週一度の返済が困難、集団化の際の排除の可能性、女性のいない家庭などの末端の最貧困層は MF からさえ疎外されてしまっている
- B. MF によって全ての人が牛や機織り機を買って成功したのだ、という宣伝の仕方。
実際には他の方法によって貧困から脱却したものも多い
- C. 債務の女性化問題（MF は多くは女性のみが受けられるものなので）

2. 調査設問

上記で記したような問題点をさらに調べていくうちに、BRAC の行っているマイクロフ

ファイナンスはその村やその人に合わせたローカルな取り組みを行っていることを知った。そこで、BRAC マイクロファイナンスの実地での取り組みを観察し、これらの A~C の問題点について再考する。

3. 調査結果

2014 年 9 月 1 日、ダッカ県マニクガンジ村の BRAC Regional Office を訪れ、そこで行われている MF プログラム(Dabi)を見学させて頂いた。尚、予定では Specially Targeting the Ultra Poor (STUP)も見学させて頂く予定であったが、代わりに制度の概要について説明を頂いた。

BRAC の行う貧困途絶に向けたプログラムは、その貸付金額などによって 4 つに分かれている。①Specially Targeting the Ultra Poor (STUP) ②MF(Dabi)③Microenterprise (Progoti) ④Migrant である。④は海外に出稼ぎに行くバングラデシュの労働者を対象者にしたもの。①~③は順に融資額が増えていく。①はその名の通りもっとも貧困に苦しむ人々を対象にしたものだ。こうした人々は日々の暮らしさえ安定しない場合が多いので、まずは牛などの家畜を無償で提供し、またグループを作らせることでコミュニティを作らせ、援助の素地を作ると共に、利用者と言葉を交わし貧困脱却へのアドバイスを行っていく。生活が安定し始めたら、やがて②のプログラムへと移行してもらうという。②が今回見学させて頂いた農村で行われていたもので、こちらは 100~1,000 ドルの少額融資と、村の女性をまとめて作った Village Organisations (VOs)全員で緊急時の為のお金を貯めるサービスとが行われている。また、個別の VO 全体で主に経済に関する教育を受けたりなどして、女性のエンパワメントに努めるのだという。③では商売を始めるなどの人々に対して 1,000~10,000 ドルほどの融資が行われる。

今回見学させていただいたのはこの VO の集会で、初めに VO のリーダーの村の女性と共に全員が、BRAC から支給されている黄色い手帳に書かれた 18 の Promises を読み上げる。そしてその後、BRAC 職員の Cashier と個別の女性たちとの間でお金のやり取りが行われる、という具合であった。18 の Promises は石鹸で手を洗うだとか綺麗な水を使う、などの公衆衛生から、一夫多妻制を認めない、などの女性のエンパワメントに関するものまで様々であった。単なる金融支援に留まらずに、他の方向からもエンパワメント・貧困途絶に向けたアプローチを同時に行っていくのは、背景に BRAC の幅広い活動があってこそのことだと感じた。

また、BRAC では女性たちへの貸し付けに際しては、こうした VO の集会などで借りたい女性に貸し付けを行うかどうかの決を採る。そうすることで、返済まで、借りた人は何かが何でも努力せねばならず、その姿を村の住人たちが見守り、高い返済率へと繋がる。さらに、隣人たちがそばにいる環境だからこそ、その人その人に合った支援や、お金の使い方をアドバイスすることが出来るのではないかと思う。また、例えば教育を受ける為にお金を借りた場合、すぐに返済するだけの資本が蓄えられるわけではないから、と一年ほど返

済期間を引き延ばせるのだという。こうした支援が可能なのも、BRAC が地域に根差した活動を大切にするためのコストを、一方で、例えば金融サービス（銀行など）で利益を上げて、帳消しにする、ということが出来るからではないだろうか。

巨大 NGO、と揶揄されることも多い BRAC だが、だからこそできる支援というものがあることを感じた。

4. 考察

先行研究の問題点 A~C について、BRAC の MF を観察した結果と共に考察する。

A. この問題に対する一つの答えが、BRAC の Targeting the Ultra Poor ではないだろうか。ただ、一つ問題があるとすれば、それはこの方法がどの団体にも可能な方法ではないということだ。上でも述べたように BRAC はその巨大な資本と、将来的な MF の顧客になってくれるだろうという潜在的な利益の為に最貧困層に手を伸ばすことが出来る。BRAC で話を聞く中で、農村だけでなく都市部スラムの女性への融資を考えているという話も伺うことが出来た。しかしながら、スラムの女性はその居住地に何の地縁も持っておらず、また、周辺の住人とグループを作ったとしても、VOs のような結束や拘束力にはなり難いという（スラムの住人の多くが川の氾濫により住居を奪われ、都市を目指して来た人々の集団であるから）。スラムに住む人々に対して、BRAC の現在小学校や幼稚園などを運営する教育プログラムを実践している様子も見学させて頂いた。こうした取り組みが根付いていけば、やがて VOs のようなグループを基盤に、新たなスラム型の MF が登場するかもしれない。

B. この問題については聞き取り調査から明確な答えを得ることは出来なかったが、MF の使い道として自分以外の家族が商売を始める、というケースが多かったようには感じる。女性の家族が貧困から脱すれば、女性自身も貧困から脱することには繋がる筈だが、女性自身が女主人になって稼ぐ、という元来の流布しているイメージとは少し違うように感じる。また、職業がやや通り一遍なものも気になったが、彼女たちの生計が商売によってきちんと成り立っているのかどうかまではうかがい知ることができなかった。

C. B の内容は女性自身が商売を始めるわけではなく、お金を借りる為の手段と化しているのではないかと、ということにも繋がる。これには明確に答えが出せそうにないが、しかし、BRAC の MF は女性のエンパワメントに対し、単に金銭的な価値だけではなく VOs を通じて一定の教育的取り組みを行ってきたことは評価されるべきだと感じる。女性に対して一夫多妻制を否定することを意識させたりと、BRAC は女性の立場を強めることを考えている筈だ。今後の取り組みの中で、債務の女性化を女性自ら否定する、女性の為にお金を使うということが可能な社会が作られていくことを信じている。

また、マイクロファイナンス、という BRAC の行っている活動の一端にばかり注目して

しまったが、貧困解決の為には本来、MF 以外にも母子保健や衛生、教育、福祉など様々な分野が密接に絡み合っている筈である。BRAC という巨大 NGO の活動がどのように互いに連携して行われているのか、また、バングラデシュ政府の行う社会福祉政策とどのように絡み合っているのか、そうしたマクロな視点での研究にも興味が湧いた。

5. 調査に参加した感想

先行研究で MF に関する問題点ばかりを考えてから参加したので、見学させて頂いた Dabi プログラムの集会の参加者の女性たちが一様に誇らしげで朗らかだった様子に面食らうと共に、彼女たちにとって MF はどのようなものなのだろう？と感じた。生活における浸透具合はかなり深いものなのではないだろうか。銀行など有りそうにない村において必要不可欠なものなのではないだろうか。など、利用者の視点を得られ、とても良かったと感じている。

自身の英語の拙さもあるが、より長く滞在し、一人ひとりの参加者から多くの聞き取りを行うことが出来れば、と感じたのも事実で、やや消化不良の感もあるが、貴重な体験をさせて頂いたと感じている。

6. 参考文献

萱野智篤（2004）「バングラデシュ第二世代マイクロファイナンスの課題—ガバナンスの視点から—」『北星学園大学経済学部北星論集』Vol. 44, No.1（2004 年 9 月）pp. 67-79, 北星学園大学

菅正弘（2009）『マイクロファイナンス：貧困と闘う「驚異の金融」』中公新書

鈴木弥生（2010）「グラミン銀行による貧困女性の組織化とエンパワメント」『社会福祉学』Vol.51, No.3（2010.11.30）pp.44-63, 社会福祉学会

BRAC BANGLADESH REPORT 2013

NGO「BRAC」によるマイクロファイナンスの取り組み

坂上璃紗 文教育学部人間社会化学科グローバル文化学環 3 年

1. 調査のテーマ

BRAC のマイクロファイナンスの特徴を知り、実際に村に行き、プログラムが行われている様子を見学することで、プログラムの効果・課題を現場からの視点で検討する。

2. 調査設問

マイクロファイナンスは、人々にどのような影響を及ぼしているのか。そして、融資を受けた人々は、自立し、生活を変えることができるのだろうか。NGO「BRAC」が行うマイクロファイナンスが、どのような仕組みで、どのように作用しているのか考察する。

3. 調査結果

BRAC は、組織設立の初期から、財政的な融資プログラムを開始し、2013 年には、約 15 億ドルを、約 420 万人に融資している。現在、バングラデシュでは、さまざまな NGO 等がマイクロファイナンスを実施しているため、そういった組織が入っていない村にマイクロファイナンスの仕組みを取り入れている。プログラムは、経済状況や目的に合わせて段階別に用意されている。

①【TUP (targeting ultra-poor) Program】

人口の 8～10%を構成しているという最貧困層向けのプロジェクト。収入や住居のない人々が、2 年間のプロジェクトによって非常に貧しい状況を脱した後、必要に応じてマイクロファイナンスに参加できる。内容としては、鶏やアヒル・ヤギ等は無償で与えたり、柔軟に対応した返済スケジュールや分割払いを認めるソフトローンがある。

②【Dabi Program】

村の女性 20～30 人からなる Village Organization(VO) に参加する人々が、ローンを受けるほか、家畜の飼育、野菜の栽培、手工芸を行う。月 1 回、BRAC の職員を交えたミーティングがあり、そこでローンの返済や貯金を行う。

*TUP と Dabi の参加者は全員女性である

③【Progoti】

一般の銀行ではローンを受けられない規模のビジネスを起業する人向けのプログラム。男女問わずローンを受けられるが、男性の参加者が多い。ローンの範囲も 10,000 ドルまでと、大きな額を借りることができる。

④Village Organization のミーティングの様子

マニクガンジという地域の村に行き、VO のミーティングを見学した。ミーティングの場所に行くと、すでに約 20 人の女性と BRAC の職員が白い敷物の上に座っていた。彼女たちはそれぞれ、BRAC が用意したノートに自分と夫の写真を留めたものを持っており、そ

こに、借りた額・返済額・貯金額を記載していく仕組みとなっている。ミーティングの初めには、ノートに記載してある 18 条の約束を全員で読み上げる。内容は、家族を小さい規模に保つ・一夫多妻制反対・息子と娘を平等に扱うといった家族に関することや、きれいな水や食べ物を食べる・手を洗うといった衛生観念、貯蓄をする・理解できない書面にはサインしないという生活の知恵に関する事柄であった。VO に参加している女性たちは、教育を受けていない場合が多いため、こういった知識の提供が必要だという。

VO の構造は、メンバーの中から、リーダーが 3 人、President が 1 人、お金の管理をする Cashier が 1 人で、メンバーが自分たちで選ぶという。President のロトナさんはその VO で一番若い女性で、役職は年齢等ではなく、能力で選ばれているようであった。

お金の流れは、

メンバー → リーダー → **Cashier** → **Program organizer** → **Area officer**
(BRAC 職員) (BRAC 職員)

である。ミーティングごとにローンを返済する義務があるため、1 年間に 46 回返済の機会がある。

VO に参加していた女性の話によると、借りたお金を利用して行っている仕事の種類は、雑貨店・肉屋・理髪店や、息子が仕事に使う CNG（天然ガスを使用した 3 輪のタクシーのような乗り物）・乳牛を飼うために使っているという。

4. 考察

BRAC のマイクロファイナンスのプログラム全体をみると、ローンや貯金は BRAC が管理しているが、実際にその資金で行う仕事を決め、実施するのは村の住民であり、BRAC と住民の関与のバランスが取れていると感じた。

これまで、一般的なマイクロファイナンスについては、いくつかの批判があった。その一つに、マイクロファイナンスは、最も貧しい人を排除しているのではないかという批判がある。土地や収入がない人々は、ローンを借りても返済ができず、VO から脱退させられてしまう。マイクロファイナンスが高い返済率を達成できているのはこのためだとも言われている。しかし、BRAC は、まさに土地なし・収入なしの最貧層を対象としたプログラムを実施している。それが、マイクロファイナンスに参加する前段階としての TUP Program である。お金だけでなく、家畜や家畜を飼育するためのトレーニングを、人々に彼らの負担なしで提供している。お金や食料を無償で与えるだけのプログラムであれば、その場では生活は楽になるかもしれないが、短期的であるし、援助に依存してしまう。TUP Program は、彼らに資金や家畜を用意する他に、技術を学ばせ、実施する機会を与えることで、継続的な状況改善につながり、マイクロファイナンスに参加するだけの能力をつけることができる。また、Dabi や Progoti のように、借りての状況や目的にあわせて段階別にプログラムを設けている点も、個々人が自らの目標を達成したり、生活の質を向上させるために大きな影響をもたらしているだろう。

一方で、まだ課題もあると感じた。まず、VOに参加する女性が挙げたローンの使い道・仕事内容についてである。酪農や理髪店などある程度、仕事内容が限定されていると感じた。都会から離れているということ、農村の特色等の地理的な状況も、仕事内容の制約につながっていると考えられるが、農村の女性たちが特に専門知識を持っていないということも何か仕事を始めようとする際に、不利になるのではないだろうか。次に、女性が借りたローンの使い道を誰が決めているのか疑問を持った。ある女性は、息子が仕事で使用するCNGを購入したと言っていた。また、理髪店を開いたという女性が2人いたが、町で何度か見かけた理髪店では、男性が男性に髪を切ってもらっていたため、女性がどのように経営に携わっているのか疑問を持った。

5. 調査に参加した感想

マイクロファイナンスについては、さまざまな団体が行っており、文献等で評価がなされているが、今回見学したBRACの活動は、自分がイメージしていたよりもきめ細かく、地域のニーズに対応していると感じた。このように、貧困層に対してビジネスの機会を提供することを基礎とし、最貧困層の底上げ、起業したい人々への支援を通して、一部の住民だけでなく、全体の生活の質を向上させようとする取り組みは、農村の発展に貢献していると考えた。BRACの活動を知って、特に強く受けた印象は、活動が柔軟で、問題への対処が素早いという印象である。たとえば、最貧困層がマイクロファイナンスに参加できていないという批判は文献でも指摘がいくつかあったが、そのような外部からの批判や独自の調査を基に、自らのプロジェクトの欠点を受け入れ、素早く対応していることは、優れた点だと感じた。今までの活動でもそうであったように、今後もBRACは、新しい課題や農村の人々のニーズを発見し、改善を進めていくのだろう。

今回のスタディツアーでは、BRACという一つの組織を通じて農村での貧困解決・自立支援の問題について検討し、結果としての数値だけでなく、現場の意見を聞くこと・現場の状況を目で見ることの重要性を学んだ。加えて、プロジェクト実施の際には、過程や結果を踏まえ、状況にあわせて検討を重ねることが不可欠だと実感した。5年後や10年後、マイクロファイナンスはどのような成果をあげているのか、そして、農村はどのように変化しているのか、BRACの活動の変化とともに追っていきたいと考えている。

6. 参考文献

イアン・スマイリー著・笠原清志訳（2010）『貧困からの自由:世界最大の NGO-BRAC とアベット総裁の軌跡』 明石書店

BRAC, <http://www.brac.net/>（2014/09/13 閲覧）

藤田幸一著（2005）『バングラデシュ 農村開発のなかの階層変動：貧困削減のための基礎研究』 京都大学学術出版会

バングラデシュの現地 NGO、BRAC の初等教育について

佐藤貴恵 文教育学部言語文化学科グローバル文化学環専攻 4 年

1. 調査のテーマ

バングラデシュにおける初等教育の普及状況を確認した上で、初等教育を担う主体の一つである、BRAC という NGO の小学校運営について深く考察する。そしてバングラデシュにおける BRAC 小学校の今後の展開を考える。

2. 調査設問

- ①バングラデシュにおける初等教育の普及状況
- ②NGO 団体「BRAC」の概要
- ③BRAC における初等教育事業の概要
- ④国全体から見た BRAC 小学校の運営規模の大きさ
- ⑤今回訪れた BRAC 小学校の状況、生徒の様子
- ⑥BRAC 小学校の今後の展開

3. 調査結果

①まず、バングラデシュにおける初等教育の普及状況をまとめる。2015 年までの達成目標の枠組みである、ミレニアム開発目標 (MDGs) のゴール 2 (初等教育の完全普及の達成) の達成状況によると、2011 年バングラデシュの初等教育における純就学率は、98.7%と高い水準になっている。しかし、就学した生徒のうち、最終学年である 5 年生まで到達する生徒の割合は、2011 年の時点で 79.5%という割合に留まっている。つまり 20%の生徒が何らかの理由で学校に来なくなってしまっているという状況である。

②次に、BRAC という NGO 団体について簡単に紹介する。BRAC は 1972 年にファズレ・ハサン・アベットによって設立された。当初の目的はサイクロンとバングラデシュ独立戦争の犠牲者への緊急援助であったが、現在は農村や都市の貧困層を対象に多様な活動を展開している。年間予算は約 365 億円 (2007 年度)、スタッフは 11 万人と、アジア 1 の巨大 NGO である。資金の 71% (2007 年度) を自己財源でまかなっている点もこの NGO の特徴の一つである。

③以上に述べた BRAC の活動の一つである、初等教育事業についての概要を次にまとめる。BRAC によるノンフォーマル小学校は、1985 年、22 か所のワンルーム形式の学校から実験的に始まり、2010 年時点で 2 万 8170 校にまで拡大している。このノンフォーマル小学校は、正規教育の学校を中退した子どもを対象としており、正規教育では通常 5 年間小学校に通うが、BRAC 小学校では 4 年間で卒業させている。

卒業率は 93%と、公立小学校 (2011 年時点で 79.5%) と比較して圧倒的に高い。この理由として、親たちとの深いかかわりが挙げられる。一日の授業時間帯から年間予定、教員

の選択など、BRAC ノンフォーマル小学校ではそのコミュニティの親とともに考え、さらに毎月の集会も行っているのである。これにより、コミュニティに合った柔軟な小学校運営が出来るうえ、教員への信頼も生まれ、ドロップアウトを防げるのである。

卒業した児童は全員、正規の中等学校へと進学している。ノンフォーマル小学校で教える教員は、その小学校のあるコミュニティから9年以上の就学経験のある若い女性を探し、採用している。女性を積極的に採用する理由はジェンダーの社会的アンバランス是正のためであり、教員の98%が女性となっている。また、児童の66%も女子である。

1校当たりの児童数は30人程度で抑えられており、教員は4年間同じ児童を継続して担当する。教員は12日間の教員研修後も、月1回の補習、1年の終りの6日間の研修を継続して受け、現場監督による定期的な学校訪問も行われている。また、教科書などの教材もBRAC 独自のものを開発し、BRAC ノンフォーマル小学校で共通して使用している。

④以上のように BRAC ノンフォーマル小学校は卒業率、進学率ともに高い水準であり、正規教育よりも質の高い教育を提供しているともいえる。BRAC 小学校は2010年の時点で2万8170校、総生徒数85万7042人で、総卒業生数は438万人にのぼる。2008年のデータになるが、バングラデシュにおける小学校の総数が8万2千程で、総生徒数は1600万人程であるため、単純計算で、BRAC ノンフォーマル小学校は国の小学校生徒全体の5%以上の教育を担っていることがわかる。

⑤今回、この研修で訪れた BRAC ノンフォーマル小学校は、バングラデシュ最大のスラムの一つである Korail スラムの中に位置している。このスラムは首都ダッカの中にあり、BRAC の本部の目の前に広がっている。100 エーカーほどの土地に5万8千人以上の人々が住んでいる。このスラム内だけで45のノンフォーマル小学校があり、1,369人の生徒が教育を受けている。

このスラムの中を目的の小学校へ向けて歩き、足元の悪さや衛生環境の悪さ、人口密度の高さを体感した。住居の間をぬける通路は、でこぼこしており、濁った廃水がくぼみにたまっていた。鼻をつく悪臭もスラム全体にたちこめており、整備されていないゴミ置き場も目に付いた。しかし、道を歩く私たちを住民はみな笑顔で気さくに迎えてくれ、バングラデシュ国民の明るさも実感した。

ノンフォーマル小学校は North Four Primary School という名前で、訪れたのは3年生のクラスであった。ワンルームの学校で、土足厳禁となっており、衛生的な環境が保たれていた。中にはじゅうたんも敷かれており、居心地が良い教室であった。できて1年ほどの学校だそうなので、比較的良い環境なのかもしれない。中には30人の子どもたちが円になって座っており、ひとりずつ教科書や鉛筆、ものさし、小さな黒板が用意されていた。これらは、すべて BRAC により支給されたもので、BRAC ノンフォーマル小学校全体で統一されている。1日2クラスの交代制で、午前と午後で異なる生徒がこの学校に通っている。公立の小学校を中退した生徒を対象とした小学校であるため、学年は同じでも年齢の異なる生徒と一緒に勉強をしていた。8歳から12歳までが BRAC ノンフォーマル小学校には入

学できる。4年で卒業できるよう、長期休暇はなく、金曜日が休日の週休1日制である。女の子は皆かわいらしく着飾っており、男の子も清潔な洋服を着ていた。勉強の様子や、踊りの発表を見せていただいたが、子供たちは皆はきはきと明るく、楽しく学校に通っていることがうかがえた。

⑥BRAC ノンフォーマル小学校の今後の展開としては、まだ小学校は足りない状況であるため、今後も増設を続けるという方針である。また、今後の課題として、国の教育制度へのかかわりを深めることを挙げている。つまり、BRAC ノンフォーマル小学校で行っていることの一部を国のシステムに移行していこうということである。実際、BRAC ノンフォーマル小学校の実績は政府運営の小学校の上に行くものであるため、正規のシステムに取り入れていくことは必要で、有効なことだと考えられる。政府との関係を深め、共にバングラデシュの正規教育を構築していけたら、現在の中退率の高さや教育の質の悪さを改善していけるだろうと思う。

4. 考察

現在、多くの中退者や学校へ通えなかった子どもがおり、そういった多くの子どもたちは BRAC ノンフォーマル小学校により、正規教育への復帰の道をもたらされている。こういった取り組みも政府がやるべきことではあるが、バングラデシュでは BRAC のような現地 NGO が大きな役割を担っている。こういった国のかたちもあると知り、とても興味深く感じた。今後、中退者が減っていき、BRAC の中退者向けの小学校が必要となくなっていくかもしれないが、その教育ノウハウや開発教材、教員など人的資源を生かし、将来的には普通小学校としての運営に切り替わっていくのではないだろうかと思った。

5. 調査に参加した感想

実際にバングラデシュを訪れ、現地を歩いてみることで、成長のただなかにある国の活気の良さを肌で感じ、こちらまで元気になるようであった。衛生問題や交通渋滞など、解決すべき問題も目に見えて存在しているが、人々の活気や明るさがもつとも強く印象に残った。この調査に参加して、バングラデシュという国のあたたかさや面白さを知り、途上国全体について興味が増したため、他の地域や国にも訪れてみたいと強く感じた。

6. 参考文献、資料

<参考文献>

大橋正明、村山真弓編著（2003）『バングラデシュを知るための60章』明石書店

イアン・スマイリー著（2010）『貧困からの自由：世界最大の NGO・BRAC とアベットの総裁の軌跡』明石書店

<参考 HP>

UNDP in Bangladesh 「Eight Goals for 2015」

<http://www.bd.undp.org/content/bangladesh/en/home/mdgoverview/> (2014/10/11 にアクセス)

<参考資料>

BRAC (2014) 「KORAIL SLUM DHAKA」

国際協力銀行 (2002) 「バングラデシュ教育セクターの概観」

1-4 訪問記録

BRAC ノンフォーマル教育プログラム

- ・訪問日時：8月31日（日）14時～
- ・訪問先：BRAC North 4 Primary School, Korail District, Dakka
- ・面談者：スシミタ・ホシェンヌ先生

1. 概要

小学校は、3万3千人が暮らすバングラデシュ最大のスラムである Korail 地区の住宅地の中にあった。校舎は玄関などなく教室が1つだけで、狭い教室には児童30人が車座になって座っていた。廊下や黒板、ロッカーなど学習環境は整えられておらず、児童1人ひとりの前には BRAC から支給された教科書や文具が置いてあった。まず小学校について説明をしてくださった。

BRAC のノンフォーマル小学校では何らかの理由で普通の小学校をドロップアウトした子供たちが学んでおり、普通初等教育は5年制なのに対し、ノンフォーマル小学校は4年制である。3年生までは BRAC のシステムで学び、4年生からは政府のシステムで学ぶ。学校では数学、環境学、英語、ベンガル語の授業があり、生徒数が多いため、教師1人で午前と午後に分けて授業を行っていた。また教師もこの小学校の近所のスラムのコミュニティから、若い女性が BRAC の訓練を受けて採用されている。

説明が終わると、児童たちは「年上を尊敬する」「宿題を毎日する」「1週間に1回爪を切る」「学校の規則を守る」という、善い行いの唱和をしてくれた。またこれらの規則をより守るように、かつての日本の五人組制度のように、5人に1人リーダーがいるという。その後、踊りも披露してくれた。女の子たち6人が飾りをつけて音楽に合わせて踊ってみせてくれた。みんな日本からの訪問客が珍しいのだろうか興味津々で、笑顔がとても印象的だった。

2. 質疑応答

Q: どのように子供たちはノンフォーマル小学校に入学するのか？

A: BRAC 職員が学校に行っていない子供たちを地区ごとに調べ、学校に通うように促す。入学試験はなく、8歳以上12歳以下ならば誰でも入学できる。義務教育は5歳からである。BRAC のプレ・プライマリースクール（ノンフォーマルの幼稚園）に通っていた子供は少ない。

Q: 子供たちはノンフォーマル小学校を卒業後、どのような進路があるか？

A: 100%中学に進学しており、学校にきちんと通い勉強しているか BRAC の職員が調べている。

Q: 小学校の卒業試験があるが、不合格の子供はいないのか？

A: 落ちる子供はいない。

3. 考察

世界最大の NGO である BRAC の教育支援は、思いのほか草の根レベルでの活動だった。また地元の若い女性を教師として採用するなど、単に子供たちに教育機会を提供するだけにとどまらずそのような地域に根差した支援活動が行われていたことも驚いた。家庭、宗教、文化、経済など様々な要因が複雑にからみ、子供たちが平等に教育を受けることは途上国では難しい問題である時もあるが、やはり根気のいる地道な支援、協力が重要でありこれからの課題なのだろうと感じた。BRAC の活動がさらに拡大することを望むが、一方でノンフォーマル小学校がなくなり子供たち全員が小学校に通えるようになることが理想なのだと再認識した。

(文責：伊藤詩織)

BRAC プログラム概要

- ・日時：2014 年 8 月 31 日（日）15：40～
- ・訪問先：BRAC 本部（ダッカ市内）
- ・面談者：Mr. Fariduzzaman Rana (Senior Manager, Visitors Unit, Communications)
Mr. Hasib Hassan Khan Chowdhury (Officer Visitors Communications)

1. 概要

BRAC は、1971 年のバングラデシュ独立戦争後の復興支援のため、「バングラデシュ復興支援委員会」(Bangladesh Rehabilitation Assistance Committee)としてファズレ・ハサン・アベッド氏が設立した。その後「バングラデシュ農村向上委員会」(Bangladesh Rural Advancement Committee)に名称を変更し、現在は BRAC を正式名称とし、多様な活動を実行している。バングラデシュの支援から始まった組織だが、2014 年現在、アジア・アフリカをはじめとした世界 11 か国で活動している。

BRAC のホームページを参照すると、以下の 15 分野で事業を実施していることがわかる。

・Agriculture&Food security ・Community Empowerment ・Disaster, Environment and Climate change ・Education ・Gender Justice and Diversity ・Health nutrition and Population ・Human rights and legal aid services ・Micro Finance ・Road safety ・Safe Migration ・Socially responsible investments ・Targeting Extreme Poverty ・Water, Sanitation and Hygiene ・Support Programs

訪問した BRAC 本部は、街中の道路に面した場所にあり、建物はコンクリートで 20 階建てだった。訪問した時間帯がお昼時だったため、エレベーターの前には長蛇の列ができていた。19 階の会議室に通され、BRAC の活動についてのプレゼンテーション・ビデオを見たあと、シニアマネージャーの方からの説明や質疑応答があった。今回は、話題が教育に集中したため、BRAC の行う教育のプログラムについて記述する。

BRAC は、経済的な理由等で一度は政府の初等教育をあきらめざるを得なかった子どもたちを対象に、ノンフォーマル教育を行っている。通常、初等教育の課程は 5 年間だが、BRAC のインフォーマル教育では 4 年間でカリキュラムを終わらせるシステムになっている。この活動は 1985 年に 22 の施設で始まり、現在では 43,000 校にも上っているという。ほか、初等教育の前段階として Preprimary school も開設している。また、BRAC 大学を設立し、貧しいが才能のある人に対して奨学金も用意しているという。

その活動は、学校教育関連にとどまらない。Adolescent club という活動では、10-19 歳の女子を対象に、読み書きやコンピュータ等を指導する。Community library では 1000 もの蔵書があり、トレーニングされた司書がいる。Mobile library といった家からあまり離れ

られない人を対象とした移動式の本の貸し出しサービスもあり、人々の教養を高める活動を実施している。

2. 質疑応答

Q：ノンフォーマル教育で子供たちを教える教師はどのような人なのか

A：地域の 25～45 歳の若い人を BRAC の職員が選ぶ。教師の 98%が女性。研修センターがあり、そこで 3 週間トレーニングを受ける。

Q：体の不自由な子どもへの教育支援はあるのか

A：Children with Special Needs (CSN) という取り組みを 2003 年から実施し、一般の BRAC の学校に統合している。設備や教育内容において、障害のある子どもたちに配慮し、教育の場に参加できる支援を行っている。車いすや杖などの提供などもしている。また、障害のある子供たちが収入を得られるようになるための支援も実施している。

3. 考察

NGO というと、小さい組織のイメージが強かったため、ビルの 2・3 階分を借りて活動しているのだろうと考えていたが、街中でも一際高いビル全体が本部であった。少しの間ではあったが、プレゼンテーションや説明を聞いただけでも、活動の分野は多岐にわたり、一つの分野でかなり綿密な調査・計画が立てられているのではないかと感じる内容だった。

今回は主に教育関連のことをくわしく聞いたが、教育だけでもすべての年齢層やさまざまな状況の人を対象としていることに驚いた。さらに、それぞれのプログラムにおいても、教師や司書等トレーニングが為されている点でも、行き届いており広く深く実施されていると感じた。BRAC のようなノンフォーマル教育がなかった当時は、一度学校をやめてしまえば、再就学はほとんど考えられなかった。その状況を変え、子どもたちの将来の選択を広げたことを考えると、ノンフォーマル教育は画期的な仕組みである。中等教育の就学率や卒業率など、まだ課題はあるが、現在の取組の成果が今後も広がっていくと考えている。

(参照) BRAC, <http://www.brac.net/> (2014/09/13 閲覧)

(文責：坂上璃紗)

BRAC マイクロファイナンス (DABI) プログラム集会见学

- ・ 訪問日時：2014 年 9 月 1 日(月) 9:30~
- ・ 訪問先：マニクガンジ (ダッカ)
- ・ 面談者：Mr. Selim (District Manager STUP)
Mr. Riazul Islam (Branch Manager Dabi)
ロッパナ氏 (Village Organisation President)
シュバラニ氏 (Cashier)
ダレウッディン氏 (Program Organizer)

1. 概要

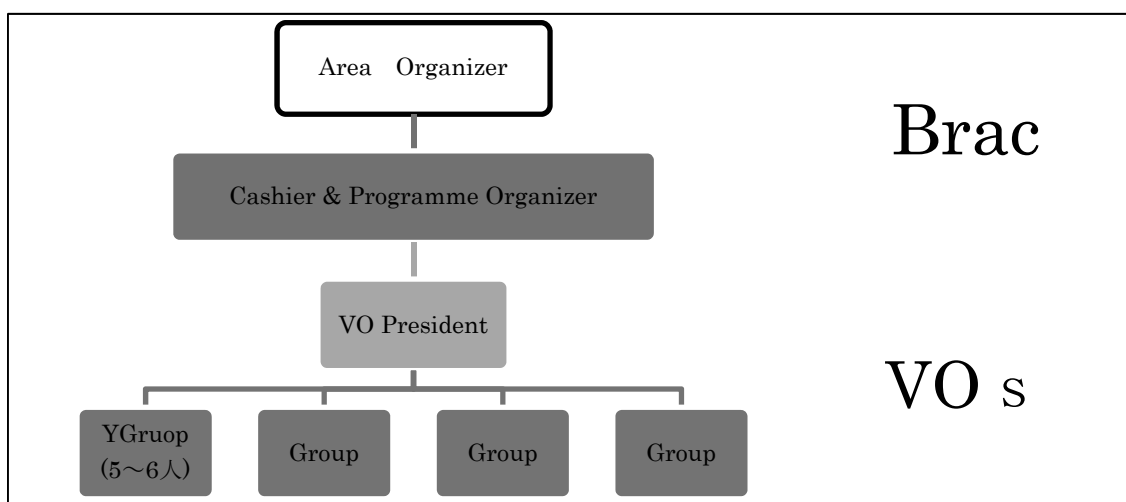
BRAC は銀行の金融サービスから疎外されている人々に対して、大きく分けて 4 つの金融サービスを行っている。①Specially targeting the ultra poor(STUP)。②Micro finance(Dabi)、③Micro enterprise(progoti)、そして④Migrant。①では金銭的な援助を直接するのではなく、物資の供給による援助を行い、利用者の生活が安定し始めると②に移行する。②では 100 ドルから 1000 ドルを一週間から一年の返済期間で融資を行っており、その対象者は village organizations (VOs) に参加する女性である。VOs とはマイクロファイナンス利用者の村の女性たちが集まって構成している集団で、日常の生活の様々な問題や女性のエンパワーメント、法的な問題についてなどを話し合っている。さらに何らかの事業を始めるなどしてより高額な金銭が必要な場合、利用者は③のプログラムを利用する。③では 1000 ドルから 10,000 ドル程度までの貸付を行っている。その後は銀行の金融サービスを受けられる。④はバングラデシュの労働者で海外に出稼ぎに出る者を対象にした融資サービスだ。

今回の訪問では②の Dabi プログラムに参加している VO の集会の様子を見学させていた。私たちが訪れた時には、広場のようなところにシートを敷いて、25 人前後の村の女性たちが集まっていた。子どもを連れて来ている参加者もいた。彼女たちの年齢は幅広く、一番若い女性が VO president であるという。参加者は皆、BRAC から支給された黄色い表紙の A6 サイズの手帳を所持していた。初めに VO president の彼女の暗唱に続けて、手帳の裏表紙に書かれた 18 の Promises を参加者たちが諳んじる。その内容は、家族計画に関するものや、新鮮な飲み水について、手を石鹼で洗うなどの公衆衛生に関するもの、一夫多妻制への反対や教育を受けることへの啓蒙などの、女性のエンパワーメントに関するものであった。暗唱が終わると BRAC の職員である男性の Cashier が VO のメンバーの前に向かい合って座る。参加者たちは貸付の返済金を手帳と共に提出する。VO のメンバーの前で受け取った Cashier はその場で金額を持っていた大きな帳簿で確認して計算し、手帳は Cashier が記入した後返却される。また、貯金サービスの金銭の預け入れもこの場で行われている。Cashier は返済の時と同様にお金を受け取るとそれを帳簿と手帳に記入する。

こうして集められたお金は **Programme Organizer** の元へ集められ、そこで計算されて **BRAC Office** の元で保管されるのだという。

このように **Dabi** では金融サービスとして、少額の融資と貯蓄のサービスをおこなっている。そしてさらに **VOs** を組織させることで、女性のエンパワーメントや教育に貢献している。**VO** の中で毎年何か学ぶことを決めており、主にその内容は金融に関することであるという。

尚、**Dabi** の組織図が少し複雑なので整理しておくと、下図のようになる。



上の図のように、**VOs** はさらに内部で 5～6 人のグループに分かれ、それぞれのグループリーダーが存在する。

また、**Dabi** によって借りたお金の使い道については、質問では 4 つの使い道が存在した。理髪店を営む、**CNG**（緑色の小さなバイクと車の中間のような乗り物で、タクシーのような使われ方をする。ダッカ市内では頻繁に見かける）を購入し、息子にドライバーをさせる、牛を飼い牛乳を販売する、肉屋さんを営む。

2. 質疑応答

Q: (村の女性たちに対し) ダウリーはよくある慣習なのですか？行われていますか？

A: ダウリーは最下層のクラスでは一般的なことです。(この村ではあまり行われていない)

Q: **VO president** の女性はどうのように決められているのですか？

A: **VO** の参加者たちみんなで決めた。

3. 考察

VO の集会の様子を見学させて頂いて、**VO** にごく自然に馴染んでいる女性たちの姿を見ることが出来た。また、私たちが活動の様子を見学に来ることに対し、誇らしげな様子を

見せていたことも印象深い。BRAC は貸付に際し、その女性たちのやる気などを勘案し、貧困からの脱却を真に目指そうとするやる気のある人であるかどうかを審査するという。その貸付対象に認定されたということが、まず彼女たちの意欲に繋がるのではないかと感じた。

借りたお金の使い道に関してやや疑問が残るのが、いずれも家族と既存の何かのお店を営む、などの回答が多かったことである。女性自身の価値を高める、ということを視野に入れるとするなら、得られた少額のお金と教育プログラムなどによって、新たな職業に就けるような道も考えていかねばならないだろう。



(BRAC マイクロファイナンス事業の村で自己紹介をする参加学生)

(文責：小山奈月)

BRAC コミュニティ・エンパワメント・プログラム集会見学

- ・訪問日時：2014 年 9 月 1 日（月）11:45～
- ・訪問先：マニクガンジ
- ・面談者：モバラ・フセインさん（Program organizer）

1. 概要

BRAC が手掛けるコミュニティ・エンパワメント・プログラムの一環として実際にマニクガンジ県の村で行われたミーティングを見学させていただいた。このプログラムは、意識を行動へ移すためにコミュニティを動員することによって、貧しい人々、特に女性の権利を拡大することを目的としている。

このミーティングはポーリショマッチ・ミーティングといわれており、ポーリはベンガル語で「村」、ショマッチは「社会」という意味である。また、ミーティングは月に一回行われ、**general meeting** と **executive meeting** の 2 種類がある。前者は村の女性であれば誰でも参加することが可能であり、女性が直面している問題に対する解決策を得ることができる。後者は 11 人の幹部によるもので、**general meeting** の開催 1 か月前にそこで扱う議題を決定する。

このミーティングでは住民が抱える問題について議論を交わすことで、情報共有や啓発強化を促したり、貧しい人々の声を取り上げたりすることができる。また、扱われるテーマは人権や農業、教育などと分野が多岐にわたっており、各テーマに精通しているゲストを呼ぶことも多い。

今回見学したミーティングは **general meeting** であり、ゲストに **News Today** の記者の方、政府の家族計画担当の方、そして同じく政府の青少年育成担当の方が迎えられていた。以下がその内容である。

①News Today の記者の方

社会的弱者層への政府の食糧支給のアナウンスメントを行っていた。具体的には、乳幼児のいる寡婦は、1 か月あたり 30kg の米を無料で支給されるということである。また、保存料入りの果物ではなく、地域の果物を積極的に食べるよう促す運動があることを知らせていた。

②政府の家族計画担当の方

FWA（Female Welfare Assistant）という職種の政府職員として、妊娠や乳幼児の子育て、その他の悩み事があれば相談に乗るとの旨をメンバーに伝えていた。生後 6 か月間は母乳だけを与えること、産後 6 か月後からは多様な避妊方法を提供するので近くの病院へ行ったり、電話をしたりするよう促していた。

③政府の青少年育成担当の方

政府が開始した様々な活動についての紹介を行っていた。内容としては、家畜の糞尿を燃料にしたバイオガスエネルギーの導入や、きのこ栽培、鶏の飼育や品質向上に関する説明を行っていた。

2. 質疑応答

Q: **general meeting** には何歳から参加することが可能でしょうか。

A: 18 歳からです。

Q: 一家庭から一人の女性が代表して参加するのでしょうか。

A: いいえ。家庭にいるすべての女性が **general meeting** に参加することが可能です。

Q: メンバーの変更などはあるのでしょうか。

A: はい、あります。女性が結婚し村を出ていけば、メンバーではなくなります。逆に、この村に嫁いできた女性はメンバーになることができます。

Q: **meeting** で話し合われた内容や議題は、家庭に持ち込まれるのですか？

A: はい。家庭に帰ってから内容も家族に伝え、家族と議論をします。

3. 考察

コミュニティ・エンパワメント・プログラムは、コミュニティベースの形態をとっているため、住民間のネットワーク構築や相互扶助が期待でき、議題も自分たちで決定することによって、住民の意識向上と積極的参加を図ることができるように思う。各問題に対し、専門家を招き住民間で話し合いの場を持つことで、家庭内で埋没してしまいがちなプライベートな問題を顕在化することができ、真に援助が必要な人が解決策を得られる有用な仕組みであるように感じた。

バングラデシュでは伝統的な家父長制のもと、女性の地位向上が課題として挙げられているが、このプログラムにおいて女性は主体的にミーティングに参加し、議題を家庭へ持ち帰り家族へ伝えるという働きを担っており、家庭とコミュニティの媒介者になっているといえる。この点においてこのプログラムはバングラデシュのコミュニティにおけるジェンダー平等に寄与しているといえるだろう。

今回参加したミーティングでは3つの議題が挙げられ、それぞれに関して様々な情報を与えられたが、実際に参加者たちがどれ程内容を理解し、かつ記憶し、家庭へ持ち帰るのか疑問に思った。このことは彼女たちの識字力に関係してくると思われるが、過去に話し合われた内容に関する振り返りなどができるような資料があれば、より持続的に問題意識を持つことができ、成人教育といった側面も強化できるだろう。

(文責：石川文絵)

アイーシャ・アベッド財団手工芸工場見学

- ・訪問日時：2014 年 9 月 1 日(月) 14:30～15:30
- ・訪問先：アイーシャ・アベッド財団 手工芸製作所
- ・面談者：Mr. MANIK SARKAR (Executive Industrial Engineer)

1. 概要

ここでは様々な手工芸品を製作している。作られた刺繍の織物をはじめとした工芸品は、ダッカのアーロンショップなどに送られるほか、海外へも輸出される。

勤務時間は 8 時～17 時までを週 6 日間であり、残業もある。給料は能力に応じた月給制であり、刺繍の給料が最も高い。試用期間は 6 か月であるが、その後に解雇されることはない。労働組合は存在していないという。

今回見学させてもらった工程は以下の通りである。

①模様の型作り

最初は素人としてやってくるので、きちんとした型を作れるようになるまでトレーニングを行う。これには 3～6 ヶ月かかる。

②スタンプ

糸でしるしをつけ、それに沿ってスタンプを押して模様をつけていく。この作業を行うための部屋はたくさんある。

③スクリーンプリント

5 人がかりでデザインをスキャンし、出来上がったものを使ってステンシルのように布に模様をつける。スクリーンにはデザイン番号が記されている。

④染め

ロープを使った絞り染めや、ローラーを使って丸ごと染めるなどの作業が行われる。この工程が最も技術が少なくて済む工程である。染色に関しては、生地によって色味が変化するために、植物性の染料がどのような色になるかというサンプルが大量に存在する。

⑤刺繍

2 人がかりで一つの布に刺繍を施す。一つのものを仕上げるのに最低 10 日はかかる。スクリーンプリントで下絵を描いてから、それに沿って刺繍を施す。伝統衣装のシャルワールカミーズに使われる。

2. 質疑応答

Q: スクリーンプリントの模様は誰が考えているのですか

A: 専属のデザイナーがダッカにおり、その人が考えている。

Q: 女性のための育児支援などがありますか。

A: 自由に託児所が使える。また、6ヶ月の有給の産前産後・育児休暇がもらえる。

Q: 刺繍の工程などで、新人に教えたりするのは誰の役目ですか。

A: 新人は担当部署のトップが教育する。与えられた仕事に向いていなかったら違う工程に入ってもらおう。

3. 考察

アイーシャ・アベッド財団の見学をして感じたことは、ここは相当に恵まれた職場であるということだ。働いているのは圧倒的に女性が多かったのであるが、ここの職員は自由に託児所を使え、産前産後・育児休暇の保証も納得できるような内容であった。更に、週に2回医者が施設に来てくれ、診療は無料であるそう。素人として働き始めてもきちんと技術教育も受けさせてもらえるため、しっかりと働くことができる。読み書きができなくとも、この職場では十分に満足できるような働きができるのである。

まだまだ教育面で不備があり、読み書きができない人が多いバングラデシュにおいて、ここはかなり恵まれた環境で働ける良い職場だろう。

(文責：大西明里)

日系縫製工場インタビュー

・訪問日時：2014 年 9 月 2 日(月) 9:50～13:45

・訪問先：MK APPARELS LTD.

・面談者：申泳均社長、山見さん、鈴木さん、Ismat Jahan Rupa さん（人事部）、Md Sajal さん（縫製担当）、ナズマさん（縫製担当）、Tarin さん（仕上げ担当）

1. 概要

MK APPARELS LTD.訪問後、我々は社員の方々にインタビューを行うことができたため、ここでは主にそのインタビューの内容について記す。

この会社では、レディース・メンズを問わず主にパンツを製作している。95%は日本からのオーダーであり、ユニクロ、トップバリュー、イトーヨーカドーの商品の一部となる。工員は 1,400 人で、うち 70%は女性である。ただし、女性は縫製や検品作業を行い、危険の伴うアイロン作業などは男性が行っている。勤務時間は 8:00～17:00(昼休み 1 時間)の計 8 時間であり、お祈りの時間も存在する。

2. 質疑応答

Q：2013 年の工場崩落事故の影響はありましたか。

A：工場はしばらく稼働できなくなった。政府の取り締まりも厳しくなり、検査を受けて認定をもらってからでないと再稼働できなかった。バイヤー側も独自に調査会社スタッフを派遣してきた。また、この事故を受けて以前まで行っていなかった防災訓練を始めた。

Q：インフラ面で苦勞することは何ですか。

A：停電しやすい。この工場はジェネレーターがあるので停電時も 1 分以内に回復する。工場までの道路が劣悪な状況は 1 年近く変わっていない。水道が止まったことはない。

Q：バングラデシュの工場ならではの工夫はありますか。

A：湿度が高いので水滴が残りやすく、カビになることを防ぐためにドライルームで包装を行っている。これは中国の工場にはない設備。

Q：女性の労働環境について教えてください。

A：育児休暇は国の法に則り 4 ヶ月。1、2 人目は取れるが 3 人目からは不可。有給。他の工場では保育士を雇っているところもある。結婚、出産で退職する人は少ない。

Q：(工員の方へ)ここで働こうと思ったきっかけはなんですか。

A：・海外の会社で働きたかった。

・地元の人に何か貢献したかった。

- ・日本企業のシステムが良い。
- ・中の雰囲気が良い。

3. 考察

申社長の話では、現在バングラデシュの縫製産業は厳しい状況にあるようだ。2013年のラナプラザ崩落事故以来、欧米各社がバングラデシュの会社に発注することが少なくなったことがその原因の一つでもあるという。EPZ（輸出加工区）、経済特区についてもお話を伺うことができ、たが、これもなかなか難しいだろうとのことであった。現在チッタゴンに韓国の企業が設置・運営する輸出加工区である KEPZ が存在するらしいのだが、EPZ はセキュリティについては好条件であるが、土地を借りることしかできないという条件が付いてくる。我々の訪問と前後してバングラデシュを訪れた安倍首相にも、JEPZ のことなど期待する点は多いとのことであった。

このように、バングラデシュにおいてかなり大きな存在となっている縫製産業ではあるが、まだまだ発展途上であるということを感じた。今後よりこの産業を伸ばしていくためには、国が主体となって様々な行動を起こしていかなければならないだろう。

（文責：大西明里）

日系縫製工場・MK APPARELS LTD.（工場概要説明・工場内見学）

・訪問日時：2014年9月2日10:00～14:00

・訪問先：MK APPARELS LTD.

・面談者：申泳均さん（社長）、山見さん（バングラデシュに出張中）、鈴木さん（駐在員）

1. 概要

まず、工場の会議室で、主に山見さんから会社の説明、工場で生産している物、生産の規模、取引先などについて説明をうけた。2007年にこの工場は設立され、主に女性用・男性用のパンツの生産をしている。9.5割が日本からのオーダーで、ユニクロやイオンなどを取引先としている。仕込みから出荷まで、約6か月かかるため、流行を問わないシンプルなパンツが生産の中心である。13の縫製ラインを擁し、1か月に13万着ほどを生産するキャパシティを備えている。工員は1,400名ほどいるが、その約70パーセントは女性である。日本人の駐在員は現在1名で、中国人技術者が6名、社長の申さんは日本語が堪能な韓国人である。他の工員はバングラデシュ人であるが、コミュニケーションは主に英語で行っている。英語の話せない工員と話す際には日本語・ベンガル語・英語を話すことのできるバングラデシュ人の通訳を介してコミュニケーションをとっている。

説明を受けたあと、申さんの案内で工場の生産ラインを見学させて頂いた。生産の順序に沿って、サンプルルーム、倉庫、裁断、検品、縫製、糸きり、糸きり後検査、アイロン、ドライヤールーム、最終検査、異物検査、以上の現場を見て回った。どこも綺麗に整理整頓され、清掃も行き届いており、日本と変わらない環境であった。最も熟練度の低い糸きりの仕事をしているのは女性のみで、危険なアイロンがけには男性しかいなかったが、大体の現場には女性と男性が一緒に働いていた。

2. 質疑応答

Q: 労働時間は何時間か

A: 8時間労働で、昼休みが1時間である。週6日労働し、金曜のみが休日である。

Q: 2013年の縫製工場崩壊事故を受けて何か工場の運営において変化はあったか

A: 事故後に政府による縫製工場の強度検査があり、政府の要請で事故後一週間は工場の稼働が休止された。日本企業からの人員の派遣もあった。バングラデシュ政府から認定を受けて稼働が再開できた。この工場では事故以前まで防災訓練がなかったが、事故後、実施するようになった。

Q: 女性の管理職はどのくらいいるのか

A: 生産部門のマネージャーは全員男性である。事務系である会計には1人女性マネージャーがいる。

Q: 出産・育児休暇はあるか

A: 4 か月間有給で休暇がとれる。しかし、子供 3 人目からはとれない。これはバングラデシュの法律で定まっている通りである。

Q: 通勤について

A: 通勤バスをだしており、みな工場から 1 時間圏内の地域に住んでいる。

Q: バングラデシュでの成功要因は

A: 1990 年代から中国で工場運営をしており、そのノウハウが生きたことが挙げられる。

Q: ハルタル(ストライキ)の際、工場は運営するのか

A: ハルタルでの工場休業は基本的にない。ハルタルのたびに休業していたら納期に間に合わないためである。来られる工員はできる限り出勤して生産を行っている。

Q: 工場から日本までの出荷にはどのくらいの時間がかかるのか

A: 10 時間かけてチッタゴンの港へ運び、3 週間かけて横浜の港まで船で輸送する。全体を通して 1 か月 1 週間ほどの時間がかかる。

3. 考察

日系企業だからこそ、清潔で快適な労働環境だと感じた。難しい仕事場や管理職の現場にはやはり男性が多く見受けられた。2013 年の縫製工場崩壊事故後に、政府による縫製工場の安全検査がしっかり行われていたことを知り、安心した。産前産後・育児休暇制度や労働基準など、国の法律が存在し、それに沿って工場運営がされているようであった。バングラデシュの労働環境について、文献などを見ていると劣悪であるというイメージを持っていたため、法律がしっかり効力を持って存在していることに驚いてしまった。外国資本でない、バングラデシュ現地の工場は国の法律をどの程度遵守して運営しているのか、また違反を取り締まる制度はあるのかが気になった。

4. 備考／コメント

日本人の求める高い品質基準の製品を、バングラデシュで生産することの大変さを感じた。多くの検査工程が用意されているが、現地の人にとっては理解しがたいものなのではないかと感じた。日本に暮らしている私たちにとっては製品がきれいで完璧な状態であることは当然と考えることだが、バングラデシュ人にとって多少の糸くずやよれなど気にならないのではないかと思った。この考え方のずれをなくし、単一な製品を生産し、工場内の環境も清潔に保っていることへの大きな苦労を感じた。

(文責：佐藤貴恵)

JICA ダッカ市における廃棄物処理の取り組み講義

・訪問日時：2014 年 9 月 3 日 8：00～9：30

・訪問先：JICA バングラデシュ事務所

・面談者：狩野剛さん（JICA バングラデシュ事務所員）、水上貴裕さん（JICA 事務所員）、佐藤友紀さん（青年海外協力隊員（JOCV））、飯島千華さん（JOCV）、高政宏充さん（JOCV）

1. 概要

まず狩野さんから、ダッカとダッカの廃棄物処理についてのお話を頂いた。ダッカは人口 1,200 万人、面積 145 km²である。対して東京都は人口 1,300 万人、面積 622 km²である。この比較からダッカの人口密度の高さがうかがえる。廃棄物収集量は、ダッカ 3,500 トン/日、東京 12,000 トン/日である。ダッカの収集量は 3,500 トンだが、実際の排出量は 6,000 トンほどだそうである。廃棄物の一次収集（家からゴミ収集場）は民間や NGO、二次収集（ゴミ収集場から処分場）はダッカ市が担っている。JICA の事業としては、以下の事柄が挙げられる。まず、2004 年から 2006 年に開発調査が行われ、その後 2007 年から 2014 年には最終処分場の改修が行われた。具体的には、覆土（収集した廃棄物に土を被せ、悪臭防止をする）、パイプの設置（廃水が川に流入しないようにする）が行われた。2009 年からは無償資金協力でコンパクター（ゴミ収集車）が導入された。112 台が供与され、現在も 110 台が走行している。また、ダッカ市廃棄物管理能力強化の政策として、清掃員のやる気を引き出し、廃棄物事業のイメージ改善のためのイベントなども開催している。

狩野さんのお話のあと、JOCV の飯島さんにより、具体的な廃棄物収集法やその様子の説明をして頂いた。民間の行う一次収集は各家庭をリキシャバン（荷台付自転車）で回収している。また、住民はみなゴミをポイ捨てするため、清掃員が毎朝清掃している。排水溝は詰まると洪水になってしまうため、専門の清掃員が掃除をしている。ゴミ収集場からゴミ収集車にごみを積み込む際は、布の上にゴミを積み、それを 2 人がかりで荷台に投げ込む方法が主である。バングラデシュのごみは生ごみが大半であるが、それは、換金できるものはすべてウェストピッカー（ゴミを拾って生活する人）が持っていくからである。

2. 質疑応答

Q: リキシャバンでごみを収集する人はどこから給料をもらうのか

A: 収集する各家庭から月 60 タカほどもらっている。全体の月の収入は 5,000 タカほどである。

Q: ゴミ収集車にごみを入れ込む人はこういった立場の人なのか

A: 市役所職員である。

Q: 現在コンパクター（日本製）とオープントラック（インド製）どちらが多いのか

A: オープントラックのほうはまだ多い状態である。

Q: JOCV の方の主な活動は

A: 清掃員の方の話を聞く、町を巡回、市の廃棄物清掃の管理をしている職員と話し合う、学校へ行き授業する、主婦を対象に講座を開く、環境展に参加する、などの草の根活動を行っている。

3. 考察

町にごみが積み上げられているのを見て、廃棄物処理が行き届いていないのだと思っていたが、実際は、そこは収集場で、一日に一回収集が行われていることがわかった。収集場からゴミ収集車に乗せる方法が不衛生で効率的でないと感じたが、現在は今のシステムを維持していくことが重要だと JICA や JOCV の方々はおっしゃっていた。確かに、収集方法に関して、一度に大幅な変化をもたらしてもそれが実際に機能しなければ何の意味もないのだと思った。実際、街中に使われていない EU の旗印のついたゴミ箱を見かけ、ただ物を供与するだけでなく、その運営を見守り続ける JOCV のような存在が必要なのだと感じた。

4. 備考／コメント

日本の ODA で供与されたコンパクターは、悪臭を防ぎ、またそれを運転する収集員の方に大切にされているそうで、オープントラック型のごみ収集車と比較すると、清掃員のイメージ向上などにとっても寄与していると感じた。しかし、その数はまだまだ少ないそうなので、もっと増やして欲しいと思った。日本政府が今後 4, 5 年の間に 6 千億円規模の ODA を供与すると発表した、それが今後のバングラデシュの廃棄物処理にどういった変化をもたらすのか楽しみだと感じた。

(文責：佐藤貴恵)

JICA ごみ処理関連施設見学

- ・訪問日時： 2014 年 9 月 3 日
- ・訪問先：ボナニ市場、リサイクル業者、ナトゥンバザール収集現場、アミンバザール最終処分場
- ・面談者：佐藤友紀氏（青年海外協力隊員）、飯島千華氏（隊員）、高政宏充氏（隊員）

1. 概要

①ボナニ市場

露店の様子やゴミの管理方法を観察。隊員が配布したプラスチックやアルミのバケツにゴミを溜めていることが多い。材質の関係上しばしばバケツが盗難にあうが、その際は露店の店主が自ら代わりのバケツを用意するようになった。

②リサイクル業者

ダッカ市内のリサイクル業者に佐藤さんが持参したペットボトルを売却。買い値は 1 キロ 25 タカが相場だが、店員の裁量に左右されることが多い。リサイクル業者では、ペットボトル以外にもカン・ビンなど様々な廃品を回収しており、回収した廃品は加工業者に転売され、ペレットなどに生まれ変わる。

③ナトゥンバザール Natun Bazar 収集現場

生活で出たゴミが収集される様子を観察。ゴミを溜めておく場所は条例で定められているわけではなく、コミュニティ内で自然に形成された場所であるため、リヤカーが収集車まで運搬することもある。ゴミは道路の端に溜められ、定時になるとやってくる収集車にショベルカーや手作業で積まれる。手作業の場合、大きな布にシャベルでゴミを載せて荷台まで運ぶことになるほか、袋に入れられていない生ゴミが多いため、衛生的に問題が多い。また、収集に時間がかかると交通渋滞の原因にもなる。

④アミンバザール最終処分場

ダッカ市内で収集されたゴミが処分場に集積する様子を観察。ゴミはすべて埋立処分であり分別はされないが、近隣住民や子どもが売却可能な物品を拾いに来るため、リサイクルは進んでいる。しかし、ゴミを拾いに来た人が処分場のショベルカーに巻き込まれる事故も後を絶えない。

2. 質疑応答

Q: 収集場や処分場にいる子どもは学校に通っているのか。

A: おそらく通っていない。

Q: すべての収集場に収集車が回れているのか。

A: 細い路地やスラムに収集車が入ることは困難である。

3. 考察

このゴミ収集システムは日本が開発したものであるが、袋に入れずに収集する点などはバングラデシュの文化に合うよう工夫されていた。また、市民レベルでのリサイクル活動が進んでいることや、露店がバケツを自ら用意するようになったことから、環境教育が進めばバングラデシュは将来的に環境先進国になれる潜在性を持っているのではないだろうか。

4. 備考／コメント

リサイクルが進んでいる一方で、街中でのポイ捨てが散見されるのもまた事実である。ゴミ箱を設置すると盗難にあってしまうことを考えると、ポイ捨てを防ぐシステムを構築するより、ポイ捨てはいけないという考えを市民に意識づけることが先決だと思われる。

（文責：松田季咲良）



（JICA ごみ処理事業見学）

JICA 事業と日本の ODA 関連講義

- ・訪問日時：2014 年 9 月 4 日
- ・訪問先：JICA 事務所
- ・面談者：富田洋行 次長、駒走拓三 企画調査員

1. 概要

①バングラデシュの概要

バングラデシュは日本の約 4 割の国土に対し、1 億 5,000 万人の人口を抱える人口過密国家である。年 6%ほどの経済成長を安定して続けており、まもなく世界最貧国を脱却と言われている。しかし、国家の収入の多くは国民の海外への出稼ぎに依存しており、出稼ぎで獲得した外貨でモノやサービスを輸入している現状だ。1945 年と 1971 年の 2 度の独立を経て、現在は温厚なイスラム・ベンガル国家となった歴史を持つ。また、近年の少産少死の結果、人口が急激に増加し、2015 年から 40 年間、生産可能年齢（15－64）人口が従属年齢（14 歳以下と 65 歳以上）人口の 2 倍以上になる人口ボーナス期を維持すると言われている。日本との関係は、良好であり、4、5 年で 6,000 億円もの円借款による協力を行うことから、日本は経済的パートナーとしてバングラデシュとの外交関係を築いていくことが予想される。

②JICA の協力

日本の対バングラデシュ協力方針は「持続可能な発展と貧困からの脱却」である。そのため、援助も円借款や技術協力が主となっている。例えば、ダッカの渋滞を緩和するためにモノレールを建設する「ダッカ都市交通整備事業」やチッタゴンに石炭発電所を建設する「マタバリ超々臨界圧石炭火力発電事業」などがある。この他にも、地方自治化を促進するガバナンス向上への協力や、防災・気候変動対策への協力、農業・農村開発への協力なども行っている。このように、JICA の協力は多岐に渡っている。

2. 質疑応答

Q：バングラデシュではストライキが多いと聞いたが、実際にはどうなのか。

A：小さなストライキが度々勃発しているほか、5 年に 1 度の選挙時にはハルタルと呼ばれる大規模なデモが起こる。ハルタルの間は暴動が激化するため、公共交通機関がストップしたり、工場生産が停止するなど様々な二次被害が発生する。

Q：バングラデシュの政治体制はどのようなものか。

A：2012 年まではアワミリーグ（建国の父の娘が代表）と BMP（2 代目大統領の妻が代表）の 2 つの政党が 5 年おきに政権を譲り合っていた。しかし、2013 年、本来は BMP が政権を握るところをアワミリーグが選挙で勝利する事態が発生。これに対し BMP は再選挙

を要求し暴動を起こすも、選挙には参加しなかったため、そのままアワミリーグが政権を握っている。

3. 考察

経済成長が急速に進んでいる一方、ダッカの交通渋滞やスラム街の様子を目の当たりにすると、バングラデシュはまだまだ先進国の支援が必要な国であると感じた。その一方で、バングラデシュ独特の文化が今なお残っているので、先進国の文化や価値観を押し付けて開発するのではなく、ベンガル人の生活様式に合うような開発を継続的に続けていく必要があるだろう。

4. 備考／コメント

JICA への訪問がツアー日程の後半だったこともあり、バングラデシュの概要について改めて説明をしていただいたことで、これまでに得た知識を再整理することができた。JICA の支援がハード面からソフト面まで多岐に及んでいることに驚いた。現在はどちらかというとハード面に援助資金を重点的に注いでいるように感じるが、ソフト面への支援が盛んになるだろう。バングラデシュの今後の発展と日本との関係に期待したい。

(文責：松田季咲良)

視覚障害児童教育支援見学

- ・訪問日時：9月4日（木）11時30分～16時
- ・訪問先：独立行政法人国際協力機構（JICA）バングラデシュ事務所、
BMIS（Baptist Mission Integrated School）
- ・面談者：駒走拓三氏（JICA バングラデシュ事務所ボランティア企画調査員）
小桜瑞希氏（JICA ボランティア派遣員/手工芸指導）
Ms. Momota Bairagee（BMIS 校長）

1. 概要

- ・駒走氏によるバングラデシュにおける JICA ボランティア事業、障害者支援分野協力実績と BMIS（ダッカ、ミルプール地区視覚障害者学校）の説明。
- ・小桜氏による BMIS の案内、説明と女子生徒たちとの折り紙を通じた交流。

2. BMIS の概要

生徒たちの年齢は12～20歳で、障害の度合いは弱視から全盲、片目だけ見えないなど様々。全生徒 78 名のうち 58 名が敷地内の寮に住んでいる。授業料が払えない生徒も存在する。また、雨期になって大雨が降ると、学校が浸水するので校舎の上階に避難するが、普段からの避難訓練は実施しておらず、ジェネレーターも設置していない。（避難時は教員が生徒の手を引いて避難場所まで誘導する。）

3. 考察

バングラデシュは現在、経済成長率が年約 6%と飛躍的に発展しており、日本から経済界の対等なパートナーと見なされてきている、また JICA のボランティア派遣数は世界最大規模を誇っており、教育、保健、インフラ等ではまだまだ支援を必要としていることが窺える。また、障害者支援対策について全ての派遣隊員が研修を受け、障害者を視野に入れた活動を自らの分野でも企画・実行可能にする JICA バングラデシュ事務所の取り組みは、ユニバーサルデザインを市民の間で一般化することに貢献すると考えられる。BMIS では、教室の照明設備が不十分であったり、新校舎も建設途中であったりと、資金難が生徒たちの教育環境に大きな影響を与えていた。2013 年の日本政府からの協力で新設されたコンピュータ教育棟等を利用して職業訓練を充実させ、生徒たちの就職率を上げる等の成果を出して支援団体増加を図る、又はゲストハウス以外にも自己資金を確保できる術を考えていくことが重要である。また、浸水時のための避難訓練は実施すべきではないだろうか。

4. 備考／コメント

JICA のボランティア派遣の主な活動の一つに「派遣先で得た知識と経験を日本で還元する」ことが挙げられていた。個人的な感覚として、派遣自体はメディアを通じて多くの日

本国民が認知しているが、還元とその成果については派遣ほど認知度が低いと感じる。還元をより前面に出せば、日本での派遣への理解も更に広がるのではないだろうか。

BMIS では生徒たちと折り紙をしていると、比較的目的が見える子が全盲の子を助けて、一緒に鶴を折るなど微笑ましい場面に何度も遭遇した。また、活発な質問や、自ら船、「M」の形といった新しい折り紙を創作して周りに報告するなど、健常者と何も変わらない知識欲、行動力を見て、彼女たちへの職業訓練、就職やバングラデシュ社会に対する障害者への理解を進める支援の大切さを改めて感じた。

(文責：高嶋早紀)

1-5 写真



BRAC によるノンフォーマル
教育支援小学校（ダッカ市内
Korail）にて自己紹介をする学
生



アイーシャ・アベット財団の手
工芸ワークショップで働く女
性



BRAC によるマイクロファイ
ナンス支援事業地マニクガン
ジの村落月例会合にて自己紹
介をする学生



ダッカ市内ゴミ集積所にて
JICA ボランテニア（青年海外
協力隊員）の説明を受ける学生



JICA ダッカ事務所にて、次長
の富田氏より日本による ODA
事業に関する講義を受ける学
生



ダッカ市内盲学校（BMIS）に
て生徒と交流を行った

2. ネパールスタディツアー

ネパール連邦民主共和国基礎情報

政体	連邦民主共和制に移行中
面積	14.7 万平方キロメートル（北海道の約 1.8 倍）
人口	2,649 万人（2011 年、人口調査） 人口増加率 1.35%（2011 年、人口調査） （注）UNFPA の世界人口白書 2011 の 3.5 百万人は 2001 年の人口を基にした推定値。他方、上記数値は 2011 年に行われたネパール政府（中央統計局）の人口調査の結果。
首都	カトマンズ
民族	バルバテ・ヒンドゥー、マガル、タルー、タマン、ネワール等
言語	ネパール語
宗教	ヒンドゥー教徒（81.3%）、仏教徒（9.0%）、イスラム教徒（4.4%）他
主要産業	農林業、貿易・卸売り業、交通・通信業
一人当たり GDP	69,919 ルピー（約 703 ドル）（2013/2014 年度、ネパール中央統計局）
GDP 実質成長率	5.5%（2013/2014 年度、ネパール中央統計局）
物価上昇率	9.9%（2013/2014 年度、ネパール中央統計局）
経済概況	GDP 約 221.41 億ドル（2013/2014 年度）、一人当たり GDP 約 703 ドルの後開発途上国（LLDC）。経済構造は GDP の約 34%及び就労人口の約 66%を農業に依存。各国政府・国際機関より多額の開発援助を受けている。

略史

年月	略史
1769 年	ブリトッビ大王による国家統一
1846 年～	ラナ将軍家による専制政治
1951 年	王政復古
1990 年	民主的な新憲法導入
2007 年 1 月	暫定憲法成立
2008 年 5 月	制憲議会発足
2012 年 5 月	制憲議会が期限内の憲法制定に至らず任期満了
2013 年 3 月	制憲議会再選挙実施のための選挙管理内閣発足
2013 年 11 月	第 2 回制憲議会選挙実施
2014 年 1 月	制憲議会開会
2014 年 2 月	新政権発足

※参考 URL: 外務省ホームページ

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nepal/data.html> (2014 年 11 月 10 日にアクセス)

2. ネパールスタディツアー

2-1 現地調査日程

8月30日(土)	羽田空港発 -バンコク着 TG661 バンコク発-カトマンズ着 TG319 Dr. Narayan によるオリエンテーション
8月31日(日)	Muhan Health Cooperative Ltd., Durga Bhawani Polyclinic 訪問 Dr. Narayan 講義「ネパールの医療、女性と子どもの現状」 CMD(C(Children's Medical Diagnosis Center)訪問 Changu Narayan Temple & Bhakutapur 見学 一日の振返り
9月1日(月)	Maiti Nepal 訪問 (Group A) Chalnakhel Primary Health Center Kathmandu 訪問 (Group B) 一日の振返り
9月2日(火)	SERC(Special Education and Rehabilitation Center for Disabled Children)訪問 (Group A & B) 一日の振返り
9月3日(水)	Chalnakhel Primary Health Center Kathmandu 訪問 (Group A) ECDC(Early Childhood Education Center)訪問 (Group B) 一日の振返り
9月4日(木)	WEPCO(Women Environment Preservation Committee) Nepal 訪問 (Group A & B) Kathmandu Durbar Square 見学 グループ別学習成果発表会
9月5日(金)	ホテル発 カトマンズ発-バンコク着 TG320 バンコク発 TG640
9月6日(土)	成田空港着

2-2 参加者名簿

氏名	学年	学科・専攻
大塩 みなみ	2	文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環
山下 悠	2	文教育学部人文科学科グローバル文化学環
吉村 藤子	2	理学部情報化学科
川嶋 円香	2	生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座
渡邊 倫子	2	生活科学部人間環境科学科
神谷 菜穂花	3	文教育学部人文科学科グローバル文化学環
木次 愛美	3	文教育学部言語文化学科グローバル文化学環
榊原 洋一	教授	大学院人間文化創成科学研究科
駒田 千晶	AA	グローバル協力センター

2-3 調査報告書

ネパールの保健衛生事情の現状と今後の課題

大塩みなみ 文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環 2 年

1. 調査のテーマ

「ネパールの保健衛生事情の現状とその課題の対策」：ネパールの保健衛生事情の現状を知るとともに、それらが抱える原因や課題をどのように今後解決していくべきなのか、ということについて言及する。

2. 調査設問

ネパールはアジアの中で GDP がバングラディシュ、ラオス、ブータン以下であり最も貧しい国とされている。ここでは 5 歳未満児死亡率に着目する。2012 年現在世界ランク 59 番目に高く、出生 1000 人に対し 42 人の乳幼児が死亡するとされている。1990 年は 142 人であったため減少傾向があるがそれでも少ないとは言えない。そこでその原因は水質と衛生設備にあるのではないかと仮説を立てた。しかし 2011 年現在改善された飲用水源を利用する人は農村部では 87%、都市部では 90%というデータがありここでは両方に差がないことから衛生設備の方に原因があるのではないと言える。そこで改善された衛生設備を利用する人の割合は農村部では 32%、都市部では 50%というデータより、以下の仮説が有力であるとした。

仮説 1: 乳幼児死亡率が高い原因として現状では水質ではなく衛生設備が不十分であるということが原因なのではないだろうか。

次に地域医療について注目する。病院や医療施設が不足しており、約 9 割の出産が不衛生な環境での自宅分娩のため、それが妊産婦と乳幼児の高い死亡率の要因となっている。さらに交通インフラが整っていないため徒歩で数時間かけないと病院に行けない地域もあり、またお金や病院の数が少ない事が推測出来る。また新生児の主な死亡原因としては、感染症、低出生体重、低体温、窒息などが挙げられる。以上のことから以下の仮説を立てた。

仮説 2: 出産前と出産後のケアが不十分なのではないだろうか。

3. 調査結果

まず仮説 1 について述べる。現地の方から水道水を使える人の数は多く、例え水道水がなくても公共の水汲み場があるため水自体には困っていないと聞いた。そのため改善された飲用水源を利用する人の割合のデータはおそらく正しいと言える。だが、水道水でさえも濁っていたり臭いがしたため衛生的とは決して言うことは出来ない。日本のように水道

水が飲める国は珍しいが、水処理設備を整え水の濁りや臭いは取り除く必要がある。また、今回訪れたクリニックは比較的衛生設備が整っていたと言えよう。乳児に行う予防接種の注射も使い捨てであり、ワクチンも効果を保つため1時間経ったら例え中が残っていたとしても破棄すると言っていた。だが農村部のクリニックには行くことが出来なかったため、農村部はどうであるかは言えない。そのため今回の実習では乳幼児死亡率が高い原因として衛生設備が不十分であるということが原因か否かは明らかにすることは出来なかった。では次に仮説2について言及する。PHCでは出産前検診の際に血液検査を行い、もし母親がHIV/AIDSに感染していた場合、薬を与えるなどの処置を行ったり、ビタミンEが足りなかったらサプリメントを与えるとっており、また産後のケアとして予防接種に来るようにと母親に伝えたり、女性達がボランティアで各家庭を回り予防接種に来ていない人に声をかけたりするとも言っていたためこのクリニックでは出産前後のケアを丁寧に行っているようであった。農村部のことについても聞いたが知っている方がいなかったため、比較することは出来なかった。以上のことにより、都市部のクリニックでは出産前と出産後のケアは行われているということが言える。

4. 考察

まず仮説1の考察として、やはり都市部だけではなく農村部とも比較しないとこの仮説についての真偽が分からない。しかし恐らく農村部ではこのような設備が整っていないのが現状であろう。また家の近くにクリニックがない状態も多いだろうと推測することができるため衛生設備が整っているところにアクセスするのが厳しいという現状もあるのかもしれない。そのため一概に衛生設備が不十分であるため乳幼児死亡率が高いと言うことは出来ないと言える。

次に仮説2であるが、PHCの看護婦がもし母親がHIV/AIDSに感染していた場合でも母乳を与えるか否かの判断は母親に委ねていると言っていた点が疑問に感じた。Dr. Narayanもそれはおかしいのではないかと感じていたが、私もそのように感じた。ネパールでは粉ミルクは高級品であると言っていたため全ての家庭が買うことが出来る訳ではないが、ここでは正しい指導を行わなくてはならないのではないだろうか。金銭面の問題から粉ミルクが買えず仕方なく母乳を与えたことによって子どもがHIV/AIDSに感染してしまう可能性があるため、今後母親がHIV/AIDSに感染しており母乳を与えることが出来ない家庭において安価で買うことが出来るような仕組みも必要であると考えられる。また、私が見た限りこのクリニックには保育器がなかった。もしかするとあったかもしれないが保育器を使うには電気が必要であるため、電気があまり通っていない農村部では使われていない可能性が高い。しかし早産や低体重で産まれてくる場合があり、その時に低体温の危険にさらされてしまい、亡くなるケースもある。現在電気を使わずお湯を補給することで保温が可能な保育器も開発されているため、これを用いることで電力の供給が不足している地域でも用いることが可能となり、さらに乳幼児死亡率を減らすことが出来るかもしれない。

5. 調査に参加した感想

ネパールは私が今まで思っていたイメージとは遥かに異なるものであった。恐らく首都、カトマンズに行ったからだとは思いますが想像以上に発展していたという印象を受けた。ヨーロッパの町並みを彷彿するようなレストランがあったり、iPad を片手にインターネットを楽しんでいる人もいた。語弊があるかもしれないが、私はもう少し悪いイメージを抱いていたのである。その一方で舗装されている道は少なく、泥道が多いため晴れの日には土誇りが舞い、雨の日には道路が湖のようになっていた。このような状況であるため公害が生じるのも理解出来る。半数の人はマスクをしていたが、幼い子どもがせずに母親に抱かれているのには少し不安を感じた。

また、PHC でパソコンがあるにも関わらずそれを使える人がいないと聞いたとき、支援とは何なのだろうか、と疑問に感じた。パソコンは政府からもらったらしいのだが、実質使われていなかったも同然であった。政府はそれが使われるであろうと思い送ったのであろうが、使える人がいない今、それはガラクタ同然である。この光景を見て支援は時に迷惑になるということを再確認した。PHC には一応電気は通っているためまだ使える環境下にはあるが、もし電気が通っていないクリニックに送られたとしたらどうなっていたらうか。何か物を寄贈する場合には、その場所の状況やどのように活用するのか、またその物は現場の人が必要だと思っているか否かについて審議を重ねてから行動に起こすべきである。

さらに、Dr. Narayan の講義の中で、ネパールは確かに多くの問題を抱えてはいるが貧しくはない、という話が心に刺さった。私たちはどうしても「途上国＝貧しい」という固定概念を抱いてしまう。それ自体が問題であると今回の実習で気づき、現地へ行き自分の目で見ることの大切さを改めて感じた。現地の状況を見ずに今後どうしたら良いのか、など考えているだけではただの空想にしか過ぎないのである。

6. 参考文献

Sarah Wilson 「赤ちゃんの命を救うために」 <http://kopernik.info/id/node/7280> (2014.9.12)

BB トラスト, <http://bbtrust.org/nepal/nepal02.html> (2014.9.14)

プランジャパン, <http://www.plan-japan.org/join/special/immediate24.html> (2014.9.14)

ユニセフ「ユニセフ世界子ども白書 2014 統計編」 http://www.unicef.or.jp/library/library_wdb.html (2014.9.16)

ネパールの女性の現状

山下 悠 文教育学部人文科学科グローバル文化学環 2 年

1. 調査のテーマ

ネパールの女性の現状を知り、理解し、将来像を考察する。

2. 調査設問

全体を通して

- ・キッチンやダイニングを見学させていただく（そのような設備があり、可能であれば）。
- ・お手洗いを見学、使用させていただき、ホテルなどの違いを探る。
- ・街中を歩く女性の服装をチェックする。

CMDC

- ・どのように運営しているか。
- ・一日に来院する患者数。

Maiti Nepal

- ・マイティ・ネパールに保護されたばかりの少女たちの様子はどのようなものか。
- ・どのような啓発活動を行っているか。
- ・マイティ・ネパールで保護されている少女たちの人数や年齢層。

SERC

- ・SERCに通う子どもたちの男女比。
- ・食事について。
- ・スタッフの人数とそれぞれの役割。

PHC

- ・一日に来る患者数。
- ・女性はどういう症状で来院する人が多いか。
- ・医師による往診のようなものは行われているか。

3. 調査結果

全体を通して、街中では、サリーを着た女性が多かった。どの年齢の女性も着用が見られたが、年配の方により多く見られた。また、若い女性の中には、クルタを着用している人も見られた。クルタは、ズボンタイプとなっている。サリーやクルタの色に関しては、鮮やかな赤やピンクなどが目立っていた。トイレに関しては、ホテルのものは続けて使用すると流れが悪くなったが、特に使用にあたって不便と感ずることはなかった。しかし、施設ではトイレトペーパーが備え付けられていないものも多く、水洗式ではない場所も見られた。その場合、近くに小型シャワーがあり、それを使って流すというものだった。また、停電中の手洗いの使用は不便を感じた。狭い手洗いの中で懐中電灯を使用しながら、

という方法以外は無いようであった。キッチン、ダイニングに関しては、まずその設備が無い、もしくは見る事ができなかった施設が多かった。SERC ではキッチンに入ることができた。水も浄水器が付いたものを飲んでおり、衛生面に配慮していることが分かった。また、計量スプーンなど、細かなキッチングッズもそろっており、食事を作る場として強く意識していることが分かった。SERC では女性のスタッフが多いと感じたが、キッチンで働いているのもまた女性であった。

続いて、施設ごとの調査結果を述べたいと思う。まず、CMDC を見学した日のナラヤン先生のお話の中で、ネパールには女性に対する差別が残っている部分もあるということであり、64%が DV の被害にあっているという。また、社会的にあまり認められておらず、財産の問題も生じることから、離婚をすることが難しいとのことであった。次に、マイティ・ネパールでは、施設からは人身売買という問題の性質上なのか、閉鎖的な印象を受けた。啓発活動として、リングロードでヒューマンチェーンを作り、カトマンズという都会でも人身売買は起こるということを人々に啓発した。マイティ・ネパールに保護されたばかりの子どもたちの様子は身体的・精神的に弱っており、外部の人間に会うことを恐れるとのことだった。次に、SERC では、組織だって施設が運営されていた。特に、Enrollment Process は障害をもつ子の親と SERC との細かな連携によりなされていた。スタッフは全員パソコンを使用しているとのことだった。また、子ども一人一人に合わせた目標を3ヶ月ごとに作っており、スモールステップを重視していた。最後に、PHC では予期せず自らが患者となってしまった。いただいた薬（ORS の粉末製剤）は WHO から支給されたものとおっしゃっていたが、PHC のような小さな病院にも WHO からの薬などがそろっているということを、身をもって知った。産婦人科の部屋の中には空調もついており、充実しているのではないかという印象を受けた。

4. 考察

今回の調査ではネパールの女性について注目して見学、質問をしたが、調査結果から以下のことが考えられる。ネパールの女性の中には、やはり格差が存在しているということだ。今回お会いした女性の方は、自分で団体を設立し運営をするなど、リーダーとして活躍なさっている方が多かった。彼女たちの考え方や仕事に対するモチベーションの高さには学ぶべき点が多かった。しかし、彼女たちの話を聞きながら、やはり彼女たちは英語を流暢に話し、コンピュータを使いこなしており、ネパールの女性のなかでも一握りの存在なのではないだろうかと感じていた。恵まれた環境で育った全ての人々がこのような仕事に就いているというわけではないため、言い切ることはできないが、将来の職業の選択肢が多いということは貧困家庭に育った女性よりも多いのではないだろうか。このスタディツアーの中でこのことを実際に感じたのは、SERC に通う女兒が男児の半数であったことや、トリブバン大学を訪れた際に、その場で女子学生を見なかったこと、そして PHC のドクターが男性であったことなどが挙げられる。PHC で働いているドクターは、自らは貧し

い村の出身であり、一生懸命勉強をし、医師になったと話していたが、ネパールの女性に彼のような経歴を持つ人ははたして何人いるのだろうか。また、PHC を見学した後に食事をした一般的な家族が営む店では、調理や洗い物をしているのは女性であった。どちらも低い位置にあるため、しゃがむ必要がある。長時間そのような姿勢で作業をすれば足腰に負担がかかることは言うまでもない。事前学習の中で、台所は建物の上階にあると聞いていたため、食べ物が床に置かれていたことには驚いた。地方や民族による違いがあることも考えられる。女性への身体的負担を考慮したキッチンの在り方を探ることが求められるのではないだろうか。

5. 調査に参加した感想

まず、この調査（ネパールスタディツアー）に参加して心から良かったと思っている。それには様々な理由があるが、その最たるものとしては、ネパールという日本からそれほど遠く離れてはいないがあまり多くの情報が入ってくることがない国に行くことができ、今後も継続して研究したいと思うほど魅了されたからである。東南アジアは、大学生のボランティア活動や旅行において最も渡航しやすいとされており、多くの知り合いが渡航経験を持つ。しかし、インドやましてネパールは、学生であれば本当に興味を持った人が行く国々ではないだろうか。私も本調査への参加が決定しなければ、渡航することはなかったのではないかと思う。調査期間中、また日本帰国後に強く感じていたことは、「百聞は一見に如かず」という言葉の重さだ。なぜならば、今回の調査でネパールへ行く以前は、世界経済フォーラムから毎年発表されているジェンダーギャップ指数の2013年の結果で136カ国中121位という結果であり、女性が男性と対等な立場にいないと考えていた。しかし実際に調査で聞き取りや施設の見学を行う中で、トップに立つ方はもちろん、組織や施設を支える女性にも多く出会った。社会的に弱い立場にいる方々のために力になりたい、という気持ちはどの国のどんな人々にも共通であり、そのために自ら行動を起こしている人がまた多くいるということを強く実感した。このような気づきは、実際にその場所へ自分の足を運び、自分の目で見て、自分の耳で聞いて、自分の頭で考えたことにより得ることができたものである。今回の実習に参加して、何かのデータや調査が必ずしも全てではなく、どのような国であってもそこに暮らす一人一人の多様性を知ろうという姿勢で、理解をし、共感する、ということが大切であると改めて感じた。調査に参加し、ネパールという魅力あふれる国に渡航できたことを幸せに思っている。

6. 参考文献

- ・日本ネパール協会（2000）『ネパールを知るための60章』明石書店
- ・バッタライ・ナビン（2008）『もっと知りたい国ネパール』心交社
- ・アムネスティインターナショナル（2008）『子どもの人身売買』リブリオ出版
- ・八木澤高明（2004）『ネパールに生きる一揺れる王国の人々』新泉社

- ・長谷川まり子（2007）『少女売買：インドに売られたネパールの少女たち』光文社
- ・斉藤千宏（1998）『NGO が変える南アジア』コモンズ
- ・放送大学教材（2000）『南アジアの文化を学ぶ』放送大学教育振興会
- ・Maiti Nepal ホームページ, <http://www.maitinepal.org/index.php>



PHC の屋上からカトマンズの中心地を望む。



PHC 付近の一般家庭が営む商店。キッチンの一部。

ネパールにおけるパソコンの普及について

吉村藤子 理学部情報科学科 2 年

1. 調査テーマ

ネパールでのパソコンの普及率はまだ 30%ほどである。パソコンの普及の遅れの原因は何であるのか、実際に現場での使用状況を確認しながら調査考察していく。

2. 調査設問

それぞれの施設で、パソコンは何台あり、どのように誰が何の目的で使用しているのか。

3. 調査結果

・ PHC(Primary Health Center)

寄付で貰ったパソコンが一台と、一ヶ月前に政府機関の一つである DPHO(District Public Health Office)から一台支給された。このパソコンで患者についてのデータ管理などを行ないたいのだが、使い方がわからないことと必要なデータ管理ソフトが入っていないことから、現在はまだ使用していない。

2 台とも Acer のものであり、ディスプレイ、マウス、キーボードも Acer のものであった。

本体のケースには Windows 7 のシールと、intel core i5 のシールが貼ってあったが、起動させていないので、実際にはわからない。

電源コードの先には、急に停電になっても大丈夫なように UPS(無停電電源装置)がついていた。

中国製の YMAX がついている。DELL の小さなプリンターがダンボール箱に入っていたが取り出された様子はなかった。

・ SERC (Special Education and Rehabilitation Center for Disabled Children)

スタッフ全員がパソコンを持っていて、紙媒体に書いた子ども一人ひとりの評価と同じことをパソコンに入力してデータを共有している。また、目が不自由な人のために大きく表示するようなソフトを開発して使っているとのことだ。また、今後の展望として、脳性麻痺で思考力は正常なのに表現できない人向けに、体が不自由でも使いやすいデバイスを買って使いたいし、また、障害を持った子供たちは映画を見に行くことがなかなかできないので SERC の中での上映会用にプロジェクターを買いたい。さらに、そのプロジェクターを使って、見ると落ち着く作用のある動画を教育現場で取り入れたい、とのことであった。

・ ECDC(Early Childhood Development Center)

事務室にはデスクトップパソコンが2台あって、モニターも、プリンターもサムソンだった。無線 Lan ルーターは TP-LINK で、転送速度は 54Mbps だった。パソコンに入っているのは Windows XP で、ウェブブラウザは google chrome を使っていた。

ノートパソコンが一台あった。13inch で、たぶんマックブックプロの少し古いタイプだ。youtube を高画質のフルスクリーンで止まらずに見ることができた。

子供用に2台のパソコンがあり、その使用状況を質問したところ、子供たちは Facebook などの SNS は使用不可で、勉強などの調べ物や、何かの企画を作るときに使用する、とのことだった。

Win XP でいいのかと聞けば、「ネパールでは問題ない」と笑っていた。

・ WEPCO(Women Environment Preservation Committee)

デスクトップパソコンが3台あった。金銭の出入りなどの事務的なことに使用しているだけで、それ以外の事に使用していない。パソコンをそれほど重要視しているわけではないようだ。

4. 考察

コンピュータやインターネットなどの ICT (Information and Communication Technology) の発展・普及により、情報が一瞬で世界中に発信されるようになり、それに伴い経済活動の様相も変わってきた。

ネパールは貧富の差が激しいところで、その差が情報化にも顕著に現われている。調査結果から、普及を阻むものとして以下の3点に気付いた。

SERC のように比較的上流階級の、英語を使いこなしている人々は、コンピュータを早く導入し、使いこなしている。しかし、ECDC のように英語ができない人になると、途端にコンピュータを使用しなくなる。なぜならば、コンピュータのほとんどはネパール語に対応していないからだ。ネパール語入力に対応したキーボードの存在を確認することができなかった。我々日本人が想定していなかった言語の壁が厚く立ちはだかっているようである。普及率の低さの要因の一つがこの言語の問題である。

次に、金銭的問題である。ネパールでは停電が頻繁に起こる。そのため、普通のデスクトップパソコンだけでは駄目で、UPS (無停電電源装置) をつけねばならない。UPS は平均的なものであれば日本ではおよそ2、3万円する。コンピュータがより高価なものとなっていてしまい、庶民の物になりにくいのだ。安定した電力供給がない国では、このようにマイナスからのスタートとなる。

さらに、もう1点。国民のコンピュータに対する意識が低いことがあげられる。WEPCO では、パソコンを金銭の出納の計算にしか使っていないで、それ以外の用途では使っていない。動画を作って教育に活用するとか、ホームページを作って広く活動を知ってもらうとか、そういうことはしないのかと質問したところ、それができれば便利なんだろう

けど、というノラリクラリとした返事が返ってきた。ネパールでは、パソコンという贅品なんかなくても普通に生活できるし何も不自由がないと思っている人が多いようである。

このような情報格差を是正するための活動の一例として OLPC (One Laptop per Child) という NPO 団体を挙げる。アメリカで始まったもので、教育用に XO という低消費電力で頑丈な安価なノートパソコンを開発している。OS にオープンソースである Linux を使用し、ハードディスクの代わりに 1G のフラッシュメモリを使用し、一台 199 ドルで実現した。ネパールにも OLPC の支部があり、ここで支給している XO にはネパール語に対応したキーボードがつき、ネパール語ですべて表示されている。中学校を対象に試験的に 2008 年から配布が始まっており、現在 4500 台が使われている。このような取り組みが行われてはいるものの、まだまだ一般的ではなく、ネパール国民の意識も低いままである。

2000 年 7 月の九州・沖縄サミットにおいて、「グローバルな情報社会に関する沖縄憲章」が採択され、日本も ICT 活用促進協力に取り組んでいるが、ネパールにはまだ未着手である。2015 年に達成期限が迫る、ミレニアム開発目標 (MDGs) のゴール 8「開発のためのグローバル・パートナーシップの促進」ターゲット 8.F.には「民間部門と協力して、特に情報・通信における新技術による利益が得られるようにする」とある。しかし、国連の MDGs の達成状況の報告書によると、南アジアにおいては現状のままでは 2015 年までの目標達成は不可能であるとされている。今後の日本の活躍を期待しつつ、今回の調査を通じて達成への道のりが遠いように思われた。

5. 調査に参加した感想

確かに、8 年程前まで私の家にはパソコンがなくて、なくても平気だとその時は思っていた。しかし、一度パソコンがある環境に慣れて便利さを知ってしまうと、もはやパソコンがない生活など考えられなくなった。半年前までスマホも携帯も持っていなかった。やはり、無くて平気だと思っていた。いや、この時は、ある意味意地を張っていて、痩せ我慢をしていたのも事実だ。我慢は美德とする文化もあるが、それでは技術は進歩しない。必要は発明の母ではないが、常に便利さ、快適さを貪欲に求めていくことが世の中の発展に繋がっているのだと、今回確信した。現状に甘んじるのではなく、何か改良できるところはないのか、不都合なところはないのか、アンテナを張ってそれを材料にすることこそが研究開発の基本姿勢であると気付かされた。

ネパール一国の情報化についての問題だけでなく、このようなことをまざまざと知ることができて、今回のスタディツアーは私に大きく意義のあるものとなった。

最後に、榊原先生、ナライヤン先生はじめ、お世話になった方々に厚く御礼申し上げます。

6. 参考文献

- ・国連開発計画 (UNDP), パンフレット『人間開発ってなに?』,

http://www.undp.or.jp/publications/pdf/whats_hd200702.pdf (2014/10/7 にアクセス)

- ・ JICA Research Institute 「国際協力の変革を求めて」

http://jica-ri.jica.go.jp/IFIC_and_JBICI-Studies/.../2001_06.pdf (2014/10/7 にアクセス)

- ・ 総務省, 「ICT グローバル展開の在り方に関する懇談会」 参考資料

http://www.soumu.go.jp/main_content/000101590.pdf (2014/10/7 にアクセス)

- ・ OLPC Nepal, http://wiki.laptop.org/go/OLPC_Nepal (2014/10/10 にアクセス)

- ・ OLE NEPAL, <http://www.olenepal.org> (2014/10/10 にアクセス)

- ・ 外務省, 「国際協力 政府開発援助 ODA ホームページ」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/doukou/mdgs/about.html#background>

(2014/10/10 にアクセス)

ECDC と SERC での子ども達の様子

川嶋円香 生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座 2 年

1. 調査のテーマ

私は、日本の児童福祉施設に度々ボランティアに行っている。そこで暮らしている子ども達は、虐待や貧困等の重い過去を抱えており、彼らの安全や精神衛生上の問題、管理する大人の都合によって、彼らが窮屈な暮らしを強いられているように私は感じていた。一方、今回訪問する NGO のホームページを見ると、その子ども達が生き生きしている様子が垣間見えた。日本よりも物資や人材が乏しいネパールで、なぜそれが可能なのか、という疑問を抱いた。

2. 調査設問

本調査で訪れる NGO では子ども達はどのような暮らしを送っているのか、何についての教育が行われているのかについて疑問を持った。また、どのようなポリシーで施設を運営しているのかについても、インタビューや実際に行われている取組の中から拾い出すことを心掛けた。

3. 調査結果

・ SERC

SERC は障害児の為のリハビリと教育の施設である。この施設では子ども一人一人に三か月ごとの目標と計画を立てている。子どもを過剰に褒めたり叱ったりして飴とムチで指導する訳ではなく、子どもが何度いたずらしても叱らず黙々とリハビリを続ける教師の姿から、子どもと二人三脚で進んでいく印象を受けた。算数の問題を解くような比較的軽度な障害を持つ子達のクラスでもこれらの特徴は同じで、コミュニケーションや集団行動の訓練を重視する日本とは違い、周りよりも一人一人の作業に集中させようとする意識を強く感じた。遊びの雰囲気大切にす為部屋が絵などで飾り付けられていて、時間割にも遊びも取り入れられてはいたが、勉強や知育に重点を置いていた。

・ ECDC

ネパールでは、女性が刑務所に入る時、その女性の子を引き取る親戚がいなかった場合は、子どもも母親と共に刑務所に入ることになる。刑務所では、十分な食事や教育も受けられない。ECDC はそんな子ども達を家族として受け入れる場所である。

今回は、設立者 Pushpa Basnet さんのお話をお聞きすることができた。彼女は裕福な家庭に生まれたが、大学の授業で訪れた刑務所で不自由な生活を強いられている子ども達を見て、周囲の反対を押し切り ECDC を立ち上げたそう。「自分が子ども時代に持っていたものを全て与えられるように」というのは HP に書いてあった彼女の言葉だが、運営の方針を端的に示していると思う。

また子ども達の「母親代わりに」接しているとお話ししてくれた。実際、彼女は子ども達のいる施設で自らも共に生活している。また、子ども達は大学卒業・離婚後に彼女のもとに帰ってくるができるそうだ。

さらに、子ども達が自分自身を尊重し、いじけないように気を使っているそうだ。子ども達には叩かれたら叩き返せ、泣き寝入りはだめ、と常に話している。実際 Pushpa さんも子どもが小学校教師に親のことで中傷された際は、最終的にその教師を離職へ追い込んだこともある。また、ダサインという、ほとんどの子が親許に帰る休暇時に、親がいない等の理由で家に残された子ども達を旅行に連れていくという濃やかな気遣いもあった。施設内も見学させてもらったが、どこも整理整頓され、子ども達等の作品や写真で可愛らしく飾り付けられていた。知育玩具、おもちゃとセットのような子ども達が好きそうな玩具、沢山の絵本や絵画、動物の名前が書かれたポスターが用意されていて、子ども達が遊びも勉強も頑張れるような工夫があった。子ども達はだいたい学校に行っていて会えなかったが、一人 2 歳児には会えた。その子はお行儀がよく (Pushpa さん曰く、お客さんの前だと分かっているから普段とは違ってお行儀が良いのだそうだ) 彼女の膝に乗って遊ぶ等よく懐いていた。私達に興味津々という様子で視線を送ってきたが、あまり近づいてはこなかった。

4. 考察

まずネパールについて、受刑者の子どもが孤児院ではなく母親とともに不自由な刑務所で暮らすことになる制度や、クマリという少女を生き神として一つの屋敷の中に半ば幽閉する風習などが存在することから考えて、子どもと母親の繋がりについてはある程度重要視するものの、親以外との人間関係・まわりの環境との関わりによって子どもが成長することについてはあまり重要視されていないように感じた。子どもを大切にしたいという気持ちはありつつも、発達心理学の知見があまり一般に広まっていないのではないかと考えた。次に SERC について。SERC の教育方針は障害を持つ子ども達が自尊心を傷つけることなく、能力を伸ばせる方針だと考えられる。南・大野 (2013) によれば、ネパールの月謝の安い公立の保育園の中にはいまだに叩いて脅す教育法をとるところもあるそうなので、経済格差が教育格差に繋がっていることを感じた。また遊びより勉強を重視する文化は、SERC だけでなく、南・大野 (2013) によれば多くの保育施設に共通するものであり、ネパールの厳しい学歴社会を窺わせる。街でも遊びには適さないきっちりした制服を着ている幼稚園児らしき子達を多くみた。

さらに ECDC について、私は、ECDC は日本でいう児童養護施設と思っていたが、調査結果から里親制度に近いと考える。日本の施設で子ども達が暮らす場合を考えると、梶原 (2002) によれば、職員と子ども達との関わりがどうしても多対多対応になりがちである。また、大抵職員は交代制である。そんな中どこにも頼れないあてのなさや孤独を感じ、生きる意欲を失う子、社会に適応できない子が多いことが山田 (2008) や梶原 (2002) を含む多くの児童養護施設の職員から報告されている。ただでさえ幼くして母親の投獄という

環境の大きな揺らぎを経験し、母親以外に頼るあてもなくいる子ども達にとって、教育や躰を受けるだけの場所ではなく、本当の家族のように受け入れられ、いつでも帰れる場所となっている ECDC の意味は大きいだろう。

ただ、職員に資格を必ずしも必要としないことやセラピストを採用しないことが気になった。確かに、資格がその人の働きを完全に保障するものではない。特に、子どものケアに関する仕事においては、オーダーとり等、仕事内容が予め決まっている普通の接客業とは異なり、例えば「他の皆が親元に帰っている時に残っている子どもを旅行に連れていく」というような、隠れているニーズを掘り起こすことから始めないといけない。そのためには、その人の持つ資格よりも人となりが大切になる。実際、ECDC では職員が必ずしも全員が資格を持たない状態でも何も問題は起きていなかったし、視察を経て子ども達のニーズを十分に満たしているように思う。

しかし、資格を持つ、つまりある程度の専門知識を持つ人を職員にすることでさらなる隠れたニーズを掘り起こしていけるのではないかと考える。南、大野（2013）によると、公立の保育園でも資格や研修なしに保育士になれるが、そのような保育園では、保育士が自分の受けた躰を基に保育をしているので、食事前に手を洗う等衛生面の躰が子どもに身につかない問題が起きている。今まさに保育の常識が大きく変化しつつある発展途上国において、現場で働く保育士が自身の受けてきた保育以上のことを学ばないと、せっかく外国から蓄積された保育学の知見が入ってきても、それを活用できない。よって保育士が自身の受けてきた保育以上のことを学ぶのは、次世代の育成に必要なことではないかと考える。

5. 調査に参加した感想

ECDC や SERC の職員の方は、全員が資格を持っている訳ではないが皆さん素晴らしい人たちで、子ども達も生き生きしていた。調査結果の欄でも述べた通り、今まで資格の有無・保育士の割合といった形式的なものだけ見て切り捨ててきたところが私にはあったが、特に福祉の分野では設立者・職員のポリシーや子ども達の様子という面を重要視する必要があると感じた。特に、Pushpa さんの、大人の都合で片づけず、子ども達が自分を尊重できるようにするためにベストを追求し、その為には戦いも辞さないファイティングスピリットには感動した。今後も、自分が子ども達の幸せを本当に追求できているか、常に自問していく姿勢を忘れないようにしたい。

6. 参考文献

佐伯胖（1983）『「わかる」ということの意味』岩波書店 pp.108~109.111~113.115

南多恵子、大野典子著（2013）「ネパールにおける保育、幼児教育の現状と課題」『京都光華女子大学研究紀要』Vol.51（2013年12月），pp.71-88

山田勝美（2008）「児童養護施設における子どもの育ちと貧困」『こどもの貧困：こども

時代のしあわせ平等のために』第 1 章，明石書店

梶原隆之（2002）「事例でみる児童福祉援助技術」『児童福祉技術実践』第 5 章，久美株式会社

許斐有（1994）「家庭へのあこがれ」『養護施設と子どもたち』児童養護研究会編，朱鷺出版

ネパールの水環境

渡邊倫子 生活科学部人間環境科学科 2 年

1. 調査のテーマ

現地での水の使用、環境の現状を知ること、またネパールがどのような状況で、どのような段階にいるのか、人々はどう思っているのかを知ること。

2. 調査設問

ネパールは皆さんがご存知の通りヒマラヤ山脈やエベレストがあるように山が多く、海はないが少し日本の地形に似ていることが分かる。山が多く、標高が高いことに雪がつもり、雪解けの水が豊富にあるだろうから、水には困っていないのでは、という考えを持っていた。しかし現状はそうではないようでネパールについて下調べをしていると、水環境は悪く、水は不足している。そしてネパールは中国、インドの二つの大国に挟まれているため、水利権がないということが分かった。水利権がないために雪解け水や降った雨を貯水するためのダムを勝手に作ってはいけないのだという。そういった国があることを知らずにいたため知った時のショックは大きく、現地での水の使用、環境の現状を知ること、またネパールがどのような状況で、どのような段階にいるのか、人々はどう思っているのかを知ることがインタビューによって明らかにする。

3. 調査結果

下調べの段階で得た情報では、下水道は設置されておらず、汚水はそのまま川等に流されている。上水道も清潔ではないため、使用する際飲み水はミネラルウォーターを使った方がよい。そしてトイレがあまりなく、運良くあったとしても、汲取式のトイレ（所謂ぼっとん便所）や隣に洗面所流しと水を流すための桶があって自分で水を汲んで流すタイプであった。ペーパーなんてないから観光者や慣れていないひとはトイレットペーパーを1ロールごと持って行った方がよい。ということで水環境はよろしくはない、ということだった。また、水が不足しているため、地下と屋上に設置してあるタンクに水を貯めているという。行った場所、伺ったお話し毎にまとめとする。

・ホテル

HOTEL ENCOUNTER

水は普通に使うことができる。トイレは水洗式。水洗式でも詰まりやすいと聞いたので注意したが、普通に詰まることなく流れた。シャワーも簡易式だが、水が出なくなることは無く、水不足だということを感じるところは無かった。また水質を知るために水を溜めてみたが、濁っているなど、目で見える汚れは無かった。フィルターに通しているのかもしれない。



流し



トイレ



コップに溜めた水

・DBPC (Durga Bhawani Polyclinic)

生協のような協同組合が運営する病院で、内科、眼科、歯医者、レントゲン室、検査室等がもうけられていた。建物一つ全てが病院だった。病院のため、水に関しては細心の注意をしないと行けないのかと思い尋ねたところ、患者に対して使う際にはフィルターを通して清潔になった水を利用するようにしているという。トイレも水洗で、清潔で病院ならではの気配りを感じた。屋上にあるタンクを使い、タンクにためてある水を使っている。



流し



歯科



水洗トイレ

・CMDC

Narayan 先生の診療所で、こちらは色々とお店等が入ったビルの一角にあり、診察室や検査室、レントゲン室がある。しかしその三つの部屋の中には水回りはなかった。その階共通のトイレ、洗面台が設置されており、共同で使う。トイレは自分で水を汲んで流すタイプのものであった。流しはあったが清潔そうにはみえないものだった。



流すタイプのトイレ



流し

・ Changu Narayan Temple

山の上の中心地とは離れたところにあり、昔ながらの生活が見ることのできる場所があった。以前使っていたという共用の水汲み場があり、以前はそこに地下水、湧き水が自然と出ていて溜まっていたという。しかし今は水不足でその湧き水でさえも出ない状態だった。事態は深刻なのが見てとれた。山にも地下水や井戸水ではなく、水道が通っており、水道の水を使用している。観光地にもなっているためにあり、古式で汲取式のトイレだった。



共同水汲み場



汲取式トイレ

・ Bhakutapur

世界遺産に登録されている街。手動式の井戸があり、水は出たが地元の方が使っている

様子は見受けられなかった。こちら共用水汲み場があったがこちらが使われていないようだった。地下に水がある場合はこの水汲み場に水が流れ出る仕組みだが水はほとんどなく、水不足が感じられた。



井戸



共用水汲み場

また貯水池があったためそこで水を溜め、その水を使用しているのではないかと思われた。

・ Maiti Nepal

人身売買によりインドに連れて行かれていた子ども達を実家に戻すことを目的としている団体。写真撮影が不可だったため写真を用意することは出来なかった。トイレは桶で水を汲み、流すタイプ。しかしとても清潔感があった。こちらは立派なソーラーパネルもついでおり、水準としてはとても高い施設だと窺えた。屋上にタンクはみられなかった。

・ SERC

障害を持った子ども達の教育の場を作りたい、という思いで医師の方が設立した NGO。医師の方が考えているので清潔でトイレは水洗トイレ、トイレの外の手洗い場には石鹸も用意されていた。障害を持った子どもたちは移動するのに付き添いが必要な場合が多く、近くにトイレが必要な場合もあるため、それに見合った場所、数のトイレがあった。各教室一つ一つにアルコール除菌が置かれていて、衛生面にはとても気を配っているのが感じられた。こちら屋上や野外に水を入れたタンクが置かれていた。



手洗い場



タンク



水洗トイレ

・PHC

診療所のような村の病院で全体的な診察を行っている。一年半前に建設された建物なため、新しく綺麗で清潔感もある。こちらの病院も患者に対して使う水はフィルターにかけた清潔なものを使っている。綺麗なミネラルウォーターが患者も飲めるように用意されていた。トイレも水洗式で清潔だった。こちらにもタンクがあり、そこから水を使っているという。



ミネラルウォーター



洗面台



タンク

・現地の方に伺ったこと

ネパール全体で、水道が通っている家庭が 47.78%。家にトイレが無い家庭が 38.17%。ネパールは雨季と乾季があり、雨季は水が豊富にある。一方乾季になると水不足は深刻となる。

都市部では、水道はあるが一週間に 1 時間しか水がでないため、その時間で水を溜めることになる。どの家庭も地下と屋上にタンクがあり、そこに溜めて使っている。タンクは上の写真のものがどの家庭にもあった。水道から出る水の量も家庭の経済力により異なる。

水はわずかししか出ないが水道代として家庭により異なるそうだが 1 ヶ月 300 ルピー (≒300 円) 払うという。(ネパールの平均月収は 15,000 ルピー。) もちろん水はそれだけでは足りなくなるので、一般的に足りなくなったら水を買うことになる。水が豊富にある山間部から運ばれて売られるがこれは 1,000ℓで 1,500 ルピー。主にホテル、レストラン、裕福な家庭が買うという。水の不足もその家庭の経済力によって異なっているのが現状。

都市部では、新しく建てられた家や建物では水洗式のトイレが多くなっているように感じ、実際レストラン等のトイレもとても綺麗なところが多かった。

以前は、汚物などは全て川に流していたためとても汚かったそう。しかし今は 2 つの処理の仕方があるという。一つ目は細かな地区に分け、この地区別で一つの所に下水を流す。二つ目は肥料として畑に利用する。そして国が週に一回川の掃除に入っており、まだ綺麗とは言えないが少しずつ改善してきているという。

また私たちが伺った PHC は山間部にあり、そちらでは山の湧き水が常にでており、豊富にあった。人々もその水を汲んだり洗い物に使ったりしていた。こちらから上手く都市に水が行き渡ってないことが問題であるようだった。そこから汲まれた水は都市に売られていた。



湧き水を汲みにきた人



湧き水で洗い物をしている様子



都市部へ水を運ぶタンク車

4. 考察

ネパール政府は 2017 年までに上下水道と衛生サービスをネパール全土に行き渡らせる、という目標を掲げている。国連でも、全ての人には安全で清浄な飲料水と衛生に対する権利があるとしている。移動中の道路でも水道管の工事が行われており、進められている様子が見うけられた。しかし家庭に水道が通っているのは 50% も満たない。そして水道が通っていても各家庭が十分に使用できる水そのものが不足しているため、目標達成には時間が必要だと思われる。政府はカトマンズ地方の水不足に対する問題の解決には対策を講じている。その中でも Melamchi Water Supply Project では分水のトンネルを設置、水処理施設の建設、配水施設の設置、そしてそれらの運用を目標としている。プロジェクトは本格的には 2004 年から行われているがまだ完了していない (2010 年)。それは現地の水道事業の組織体制や技術が不十分であり、上手く運用していくことが出来ていないことが原因であり、課題でもある。またこのプロジェクトは、アジア開発銀行や JICA から支援を受けており、JICA からは 20% にあたる US\$47.5million が当てられている。JICA では技術を教育することを行っているというが、現地で運用されていくには時間がかかりそうである。

上でも述べたが、都市部では、新しく建てられた家や建物は水洗式のトイレになっており、レストラン等のトイレもとても綺麗になっており、衛生的に改善されている印象を受けた。しかし、家庭の経済力の差で水を含め生活に差が生まれてしまっている。水が限られているなかでの解決策としては浄水場が上手く活用される必要があると考えられる。浄水場があることで、水の再利用が出来るとだいぶ現状が良くなってくる。しかし浄水する際に必要な電気が足りていないことや、技術者が少ないために運営していくのが難しい。今の段階で上水道は通っている。電気も通じている。しかし下水道はまだ通っていない。この状況は日本の 60 年前の状況と似ていた。今は発展段階にあって、これが普及していくと変わっていくだろう。

また、ネパールは水力発電で電気を作っているため、水が不足しているこの国は電力も不足している。毎日計画停電があり、地域に分けて朝、夕と曜日ごとに時間は異なるが一日合計 8 時間停電があった。水の問題は電力という私たちの日常には欠かすことの出来ないところにまで影響がでていた。

5. 調査に参加した感想

不自由は多々あるが、多くの人々がより良くしたい、との思いで活動し日々を送っていることが感じられた。生活しやすくより良い国になっていくのだろう。今回は都市部を見回ることができ、下調べをして分かった情報とは全く異なった、都市部の発展した面を見ることが出来た。しかし地方や奥まった所、山等に行くとまた状況は異なっているだろう。自分の考えていたものよりはだいぶ良い状態で本当に百聞は一見に如かずと改めて強く感じた。今後もそういった気持ちを大切にしていってより多くの物・ことを自分の目で見て、経験していきたいと思った。そして自分の内に留めておくのではなく、発信してより多く

の人に伝えられるようにしたいと思った。

6. 参考文献

- 日本下水道協会, <http://www.jswa.jp>
- the United Nations (26 July 2010), “The human right to water and sanitation”
http://www.un.org/ga/search/view_doc.asp?symbol=A/64/L.63/Rev.1&Lang=E
- JICA 「地方都市における水道事業強化プロジェクト」 <http://www.jica.go.jp/project/nepal/003/index.html>
- Government of Nepal: Melamchi Water Supply Department Board, Melamchi Water Supply Project, <http://www.melamchiwater.org/home/index.php>
- Department Of Water Supply And Sewerage, <http://www.dwss.gov.np>

ネパールにおけるトラフィッキングについて

神谷菜穂花 文教育学部人文科学科グローバル文化学環 3 年

1. 調査のテーマ

ネパールにおけるトラフィッキングについて。

2. 調査設問

ネパールにおけるトラフィッキングとはいかなるものか、またトラフィッキングと闘う NGO の働きはいかなるものか。

3. 調査結果

A) ネパールにおける人身取引について

今回のスタディツアーで訪れた NGO によると、ネパールにおけるトラフィッキングのタイプとしては、3 種類に分けられる。1 つ目は、国内での取引で、マッサージ屋・ダンスバー・キャビンレストランなどでの低賃金労働従事である。2 つ目はオープンボーダーであるインドへの国境を越えた取引である。3 つ目は湾岸諸国への海を越えた取引である。また、人身取引の主要な目的も変化しており、1835 年から 1990 年には奴隷、性的搾取、また子どものサーカスへの売買だったものが、1990 年から 2006 年には国内での取引、マッサージ店、「キャビンレストラン」、ダンスバーなどでの低賃金労働者確保になった。さらに、2006 年以降には国境、海を越えた臓器輸出、出稼ぎ、労働搾取などが行われている。

ネパール・インド間のオープンボーダーを越えて、年間 5,000～7,000 人の貧しいネパール人少女が、インドへと連れていかれるという。NPO 法人ラリグラス・ジャパンはネパールでの性的搾取を目的としたトラフィッキングの流れについて、以下のように説明している。

トラフィッキングは、ネパール人の売春宿のオーナー、インド人ブローカー、ネパール人の娼婦の周旋人の三者によって、組織的に行われている。周旋人は、農村部の貧困家庭を狙う。農作業に向かうため、一人歩きしている少女に、親切を装い、「カトマンズのカーペット工場の就職口を紹介してあげる」、「インドでのメイドの口を斡旋してあげる」などと声をかける。少女たちは、貧しい親を助きたい、過酷な農作業から逃れたいといった理由から、安易に信用してついていってしまう。周旋人は国境まで少女を運び、日本円にして 3,000～5,000 円でブローカーに引き渡す。ブローカーは数万円～十数万円で、売春宿に売り飛ばす。売春宿に売られた少女たちは、劣悪な環境下、無給で春をひさがされる。支給されるのは、粗末な食事と数枚の衣類、客引きのために施す粗悪なメイク用品のみ。客が少女たちを買う値段は 100 円～数 100 円程度。1 日 10～20 人の客を取らされる。

トラフィッキングが横行してしまう原因として、貧困、女性の地位の低さ、トラフィッキングに対する認知の低さがあげられるのではないかと。ネパールの女性は平均 17.2 歳で結婚するという。早期結婚はすなわち、教育の終了を意味する。今回わたしたちがお話をうかがったマイティ・ネパール法律部門マネージャーのアチュート・ネパールさんは大学で教員として働いていたが、「ネパールの女性と子どものために働きたい」として大学を辞め、マイティ・ネパールに就職することを決めた。ネパールにおける女性や子どもの立場の弱さがうかがえる。

地域社会の認知度が低いことも、原因の 1 つとなっている。輸送手段の 1 つとして利用されるバスの運転手がトラフィッキングについて無知であり、バスに乗せ移動させるということで結果として、知らぬ間に手を貸してしまうこともあるという。マイティ・ネパールでは、この問題に対する認知度を上げトラフィッキングを防止するために、カトマンズ市内の主要道路であるリングロードで、アンチ・トラフィッキングの訴えに賛同する人たちが手をつないでヒューマンチェーンを作るキャンペーンを行うなどの活動をしている。このキャンペーンが示すことは、情報の入りやすい首都カトマンズにおいてもトラフィッキングの存在を知る人が少ないということだ。ましてやテレビやラジオの情報が届かない農村なら尚更である。

貧困から抜け出すためには稼ぐ必要がある。しかし、女性たちは満足な教育を受けておらず、稼ぐ手段がない。結果として、「いい仕事をあげる」という甘言に魅力を感じついでいってしまう。

B) マイティ・ネパールの活動について

2004 年にアメリカ政府によって発行された「人身売買報告書」には、トラフィッキングに対する手段として訴追 (prosecution)・保護 (protection)・防止 (prevention) の 3P をあげている。マイティ・ネパールの活動は、この 3P にのっとったものである。

加害者の訴追 (prosecution) としては、マイティ・ネパールの法律部門による援助があげられる。法律部門には優秀な専門家がおり、無料で援助を受けることができる。防止活動 (prevention) としては、啓発活動と被害者になりそうな子どもの保護があげられる。啓発活動とは、警察やバスの運転手への告知、スタッフによるテレビやラジオの通らない田舎へ出張講義、カトマンズの主要道路であるリングロードでヒューマンチェーンを作り、アンチ・トラフィッキングを訴えるキャンペーンなどを行うなど、トラフィッキングそのものに対する認知度をあげる活動である。一方、育児放棄、家庭不和などが原因で、トラフィッキングの被害者となりそうな子どもを保護するプリベンション・キャンプという保護施設も設けている。被害者の保護 (protection) としては、リハビリテーションセンターでの女性の保護や職業訓練、敷地内のテレサ・アカデミーと呼ばれる学校での教育、トランジットホーム、HIV に感染した女性たちのためのホスピス運営などがあげられる。

4. 考察

トラフィッキングは目的を変え、手段を変え横行している問題である。マイティ・ネパールに保護される女性は増加傾向にあるが、これはつまり、これ以上の女性子どもがトラフィッキングの被害者となり、ブローカーが暗躍しているということである。

マイティ・ネパールは加害者の訴追、被害者の保護、トラフィッキングの予防という 3 方面から包括的にトラフィッキング撲滅のために闘っていた。また、施設にはソーラーパネルや監視カメラなど先進技術が取り入れられており、経済力も持つ巨大な NGO ならではの感じさせられた。

マイティ・ネパールについては、非常に閉鎖的な団体だという印象をぬぐいきれなかった。トラフィッキングという、非常にデリケートな問題に関わっている団体なので、部外者に内情をつかまれたくないというのは道理にかなっているが、閉鎖的すぎても支援や協力を得られにくいというジレンマを抱えているのではないか。マイティ・ネパールは非常に大きな団体であり、政府への提言もおこなっているという。NGO の顔をしたトラフィッキング防止局といってもよいのではないかと思ったほどだった。事前学習では、マイティ・ネパールの厳しさに耐えられなくなって逃げ出した被害者女性もいると耳にした。団体が大きくなればなるほど、統制するための規則や規範が作られ、厳しくなっていく。それは果たしてマイティ・ネパールに助けを求めてきた女性や子どものためになるのか、規則に縛られた社会は彼女らが精神的な安らぎを得る場となりうるのか、という疑問も感じた。

5. 調査に参加した感想

今回の調査では、トラフィッキング問題にかかわる NGO を実際に自分の目で見る事ができた。外との接触という観点において、上記の問題を垣間見る事になったが、今後のマイティ・ネパールの活動にも注目していきたいと思う。また、トラフィッキング撲滅について、今後は NGO の活動だけではなく政府や国際機関の活動についても焦点をあてていきたいと思った。

6. 参考文献

- ・ ABC ネパール編、矢野好子訳（1996）『ネパールの少女買春—女性 NGO からのレポート』明石書店
- ・ NPO 法人ラリグラス・ジャパンホームページ,
<http://www.laligurans.org/10shoujyobaibai.html>, (2014 年 9 月最終閲覧)
- ・ アメリカ合衆国大使館ホームページ,
<http://japan2.usembassy.gov/j/p/tpj-j20041019-50.html>, (2014 年 9 月最終閲覧)

日本の特別支援学校と比較した SERC

木次愛美 文教育学部言語文化学科グローバル文化学環 3 年

1. 調査のテーマ

日本の特別支援学校と比較した SERC。

2. 調査設問

日本の特別支援学校と比較して SERC にはどのような特徴があるのか。

3. 調査結果

①はじめに

今回の実習で Special Education and Rehabilitation Center for Disabled Children (以下 SERC とする)を訪問するにあたり、ホームページをみたところ、以下のような施設であることが分かった。

“SERC is the special school for special Pupils in Nepal. Since 2009, SERC has a goal of providing most effective education to its students who are either differently able or have individual special education needs. (SERC はネパールにある特別な支援が必要な子どものための学校です。2009 年以来 SERC は障がいがあるまたは個別教育を必要とする生徒のために最も有効な教育を行うという目標を掲げています。)”

また、SERC は私立学校とのことで、SERC の運営方法、児童生徒との関わり方などにおいて、日本の私立の特別支援学校と異なる点があるのだろうか、あるとしたらそれはどのようなものであるのかということを明らかにしたいと思い、調査を行った。調査方法は実習での聞き取りと文献調査である。

②SERC での聞き取り

SERC は私立の、日本でいう特別支援学校に当たる施設である。現在約 90 人の児童生徒が在籍しておりそのうち男子が 7 割ほどを占めている。学年は 6 つに分かれており、12 歳以上のクラスは男女別になっている。授業料はひと月に 8,000～9,000 ルピーと少々高く、家計が苦しい家庭には奨学金のあっせんも行っている。時間割はしっかり決まっており、教科の学習に力を入れているようである。ホワイトボードに時間割が書かれているが、字が読めない生徒のために写真を掲示して今が何をする時間なのかをわかりやすくしている。SERC の教育方法で特徴的であるのは、各生徒のカリキュラムを 3 か月ごとに作成している点であるだろう。いくつもの department に分かれている SERC であるが、各 department がそれぞれその生徒のカリキュラムを作って到達目標を設定し、3 か月のプランが終了した

ところで保護者との面談を行い、成果を報告しているのだという。また、一週間に一度、一人の生徒についてのプレゼンテーションを職員の間で行い、職員間での生徒に対する情報共有がなされているという。複数の職員が関わるということ、一人一人の生徒への細やかなサポートがされているということが SERC の大きな特徴であるだろう。

③日本の特別支援学校

今回は日本の中でも東京都にある私立の特別支援学校に注目した。そのうち、愛育養護学校、明晴学園、日本聾話学校について調べた。それぞれ特色が異なっているので、ホームページの情報から簡単に述べておきたいと思う。

愛育養護学校は、平成 26 年度 4 月 1 日現在で幼稚部 1 名、小学部 25 名の総数 26 名の特別支援学校である。ホームページでは、「私たちの学校は、子どもたちの主体的な活動を通して、存在感・主体性・信頼関係・自我を育むことを大切にしています。幼少期に、人間形成に必要な基本的体験を丁寧に、時間をかけて積み重ねていきたいと考えています」と述べられている。カリキュラムでは、子どもたちがやりたいことを大切に、主体的に、能動的に動き出す経験を積ませるため教科や時間では区切らず、子どもたちの活動そのものをカリキュラムとして捉えている。また、学年によるクラス分けは行っているが空間や時間は子どもたちが自由に使えるようになっているのだという。

明晴学園は乳児部から中学部までを備えた、耳の聞こえない子どもたちのための学校である。在籍者数は平成 25 年度 4 月 12 日現在で幼稚部 17 人、小学部 38 人、中学部 9 人の総数 64 人である。「自ら学び、自ら考える人を育てる」、「豊かな人間性・社会性をもち、多文化共生社会・国際社会に生きる人を育てる」、「手話と日本語、ろう文化と聴文化を学び、自分に自信を持って社会で生き抜く力を育てる」を教育目標としている。様々なカリキュラムを組み合わせ、生徒の世界を広げること、自立を促すことが特色であるだろう。日本聾話学校はキリスト教精神に基づいた、日本で唯一の私立ろう学校であるという。現在 0 歳児から中学三年生までの約 90 名が在籍している。教育方針は、一貫した聴覚主導の教育を行うことであり、補聴器や人工内耳を用いて残された聴力を最大限活用していこうという姿勢であるため、手話の教育などは行っていないようである。特徴としては、毎日生徒一人と教師一人がマンツーマンで話す時間をつくるなど、生徒それぞれと向き合って教育を行っている点であろう。

④SERC と日本の特別支援学校の相違点

以上の特徴から考えると相違点が一つ考えられると思う。一概に日本とネパールを比べることはできないので、あくまで SERC と先ほどあげた 3 つの日本の学校についての比較にはなるが、SERC は比較的時間がしっかりと決まっており、教科の学習に力を入れているのに対して先ほどあげた三校は子どもたちの豊かな心を育てていこうという姿勢、内面を重視しているという点で異なっていると考えられる。SERC では学習とリハビリテーショ

ンによって自立を促し、卒業後の進路へつなげていっているという形なのに対して、先ほどの三校は、様々な生活体験を積ませえることで日常生活での自立を助けつつ、社会で生きていく方法を教えていくという形なのではないだろうか。

4. 考察

今回は SERC での聞き取り調査以外はホームページを中心とした文献調査であったので、直接日本の特別支援学校の方にお話を聞くことができないままのまとめとなってしまった。

5. 調査に参加した感想

医療やその他の施設のような場所に行くこと自体初めての経験だったため、非常に興味深く学べたのと同時に日本に関するそれらの事情についても知りたいと思った。特に特別な事情を持った子供たちへの教育の現状について関心が強まった。今後は、それらについてより広い視野を持って、広い意味での多文化共生・多文化間教育について学んでいきたいと思う。また、今回の実習では、様々な職業の方にお話を聞いたが、それぞれが各自の仕事に対して並々ならぬ熱い思いで取り組んでいらっしやることを感じ、非常に刺激になった。今後の自分の進路選択においても、今回出会った人々のように信念を持って取り組める道を選びたいと思った。

6. 参考

- ・ Special Education and Rehabilitation Center for Disabled Children,
<http://serc.edu.np/>, (最終アクセス 2014/9/26)
- ・ 東京都私学財団一私立特別支援学校一覧,
<http://www.shigaku-tokyo.or.jp/school/roumain.html>, (最終アクセス 2014/09/26)
- ・ 愛育養護学校,
<http://www.aiiku-gakuen.ac.jp/#>, (最終アクセス 2014/09/26)
- ・ 明晴学園,
<http://www.meiseigakuen.ed.jp/index.html>, (最終アクセス 2014/09/26)
- ・ 日本聾話学校,
<http://nrg.ac.jp/>, (最終アクセス 2014/09/26)

2-4 訪問記録

ネパールスタディツアーオリエンテーション

・訪問日時：2014年8月30日（土） 14：00～16：00

・面談者：Dr. Sangeeta B. Basnet, Dr. Narayan B. Basnet, Mr. Abhishek S. Basnet,
Ms. Abhilasha Basnet

1. 概要

Hotel Encounter Nepal の会議室で、小児科医の Narayan 先生、奥様で皮膚科医の Sangeeta 先生、大学生の息子さんと 10 代の娘さんとネパールスタディツアーのオリエンテーションを行った。Narayan 先生は引率教員である榊原先生が東京大学附属病院医局長でいらした時にアジアの若手医師として日本で研究を長年され、Sangeeta 先生も日本で子育てをしながら順天堂大学で学び、現在は母国ネパールの医療発展のためご尽力されている。参加学生による英語による自己紹介の後、今後のスケジュールの確認、各施設の概要説明があった後、ネパールについての概要と生活面での注意事項があった。

2. 質疑応答

Q：飲み水について

A：ミネラルウォーターは買うべき。

Q：水の購入について

A：ミネラルウォーターはどこで購入してもよい。

Q：空気について

A：ネパールでは、道路事情が悪くまた工事も多いため、車の排気ガスや砂ぼこりがひどく、空気が汚いので外をでる際にはマスクが必需品だ。

Q：買い物について

A：買い物をするときには値段交渉をするとよい。

Q：ネパールの女性について

A：女性の高学歴化がすすみ、家庭に入るだけでなく社会進出を目指す女性も増えてきている。

Q：電力事情について

A：ネパールでは電力不足のため計画停電を行っている。計画停電は地区ごと曜日ごとに

時間が決められて1日数時間の停電がある。計画停電表が Nepal Electricity Authority から発表される。この表は、Android Phone でダウンロードすることができ利用している。水力発電のため、雨期の時期は乾季の時期に比べ停電時間が短い。

Q：スタディツアーに当たっての心得

A：“Always be alert.” これには、色々な意味がある。常に周りに注意し、事故・事件に巻き込まれないよう自分の身を守ること。常に神経を研ぎ澄ませて観察を行い、様々な事象に気が付いてほしいということ。

(表1)
計画停電表

Power Cut Schedule							
Effective from: 6 September 2014 onwards							
Group	Days	Sunday	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
Group - 1		05:00-09:00	10:30-16:00	09:30-14:00	09:00-13:00	08:00-12:00	06:30-10:30
		12:00-17:00	20:00-23:30	18:30-22:30	18:00-21:30	17:00-20:30	16:00-19:00
Group - 2		05:30-09:30	05:00-09:00	10:30-16:00	09:30-14:00	09:00-13:00	08:00-12:00
		13:00-18:00	12:00-17:00	20:00-23:30	18:30-22:30	18:00-21:30	17:00-20:30
Group - 3		06:30-10:30	05:30-09:30	05:00-09:00	10:30-16:00	09:30-14:00	09:00-13:00
		16:00-20:00	13:00-18:00	12:00-17:00	20:00-23:30	18:30-22:30	17:00-20:30
Group - 4		08:00-12:00	06:30-10:30	05:30-09:30	05:00-09:00	10:30-16:00	09:30-14:00
		17:00-20:30	16:00-20:00	13:00-18:00	12:00-17:00	20:00-23:30	18:30-22:30
Group - 5		09:00-13:00	08:00-12:00	06:30-10:30	05:30-09:30	05:00-09:00	10:30-16:00
		18:00-21:30	17:00-20:30	16:00-20:00	13:00-18:00	12:00-17:00	20:00-23:30
Group - 6		09:30-14:00	09:00-13:00	08:00-12:00	06:30-10:30	05:30-09:30	05:00-09:00
		18:30-22:30	18:00-21:30	17:00-20:30	16:00-20:00	13:00-18:00	12:00-17:00
Group - 7		10:30-16:00	09:30-14:00	09:00-13:00	08:00-12:00	06:30-10:30	05:30-09:30
		20:00-23:30	18:30-22:30	18:00-21:30	17:00-20:30	16:00-20:00	13:00-18:00

Group	Group 1	Group 2	Group 3	Group 4	Group 5	Group 6	Group 7
Sub-station							
Patan/Patan 66 K.V.	Mangalbagar	Phariping	Patan	Ring Road	Sainbu	Radio Nepal, Pulchowk	Jewakhat, Chapagon
Bhaktapur	-	Bhyat	-	-	Kanaja, Nainchok	Nagarhat, Brak	-
Toku	Tripanewar, Talsahal	Kalinati	Thakot	Pulchowk	-	Shimshanatha	Kotipur
Banewar	Banewar, Kotanewar, Bagmati	Madok, Gorkhat	Gadewar 1, Conference Hall	New Airport, Dhobikhola	Old Airport	Lahha	Sachharal
Old Chabahal	Jorpati	-	Nawal, Airport	Dhobikhola, Dhawal	Ghatapatti, Ghatol	-	Pandepati
New Chabahal	Ghatol	-	Ch. Hospital	-	-	Sandhapati	Kagan
Lathokhar	Kathar Mahal	-	Gardubas	Lathokhar	Kings Way	Thamel	Sankharan
Balaju	-	Naya Bazar	-	Nagarjun, Maheshwari	-	Dharmathali	-
Syochhat	Talsahal	Thakot	Kalinati	-	Kalinati	Rope Way	Sidhartha, Bhagwantha
Banaga	-	Dhobikhola	Sanga	-	-	Nala, Khawra	Hospital, Chopta, Panchal
Thapathali	Thapathali	-	-	Saropa, Toka, Patan	-	-	-
K-2	Kamalika	Agar	Maheshwari	-	-	Dohar Marg	Bag Bazar
Maheshwari	Dhobikhola	Sachhar	Banewar, Anarjan	-	Ghatol, Chopta	-	Gorkhat
Thimi	-	-	Erubam	-	-	-	-
Sandhar	Katha Pokhari	Tripanewar	-	New Road	-	Thimihahal	-
K-3	Bhakti Mandap	-	Kalikhat	-	Anantnagar	-	Patali Sadak
Maheshwari	-	-	Maheshwari	-	-	-	-
Panchhal	-	-	Pipri, Pulchowk	-	Maheshwari	Panchhal	-
Pokhara	Pawa	City Airport	Bazar	Baidam	Arwa	Sankhat	Tatopani
Bhawanagar	Chitkot, Narayanganj	Nichan (Jirgatan)	Pawa 33 K.V.	Chitkot 33 K.V.	Bhawanagar	-	Gadkot

In case of feeders with excess leakage there will be additional hours of loadshedding as below
a) 38-55% of leakage additional 1 hour
b) 56-69% of leakage additional 2 hours
c) 70-83% of leakage additional 3 hours
d) 84-97% of leakage additional 4 hours
e) Above 98% leakage additional 6 hours
There might be sudden hour decrease/increase in loadshedding in case of foreseeable/unforeseeable situation

出典：在ネパール大使館、新着情報、計画停電表（9月9日）
<http://www.np.emb-japan.go.jp/jp/> 2014/10/7 にアクセス

3. コメント

Narayan 先生も Sangeeta 先生も、笑顔が素敵でとてもあたたかく素敵な方だった。わたしたちの拙い英語での自己紹介や質問に丁寧にこたえてくださった。空港からホテルまでカトマンズのリングロードを走ったことで大量の車を目にし、「想像していたよりは発展しているのではないか」と思っていたが、改めて日本とは全く違う環境下で 1 週間過ごすのだという実感が湧いた。お水はどこで買っても大丈夫だということで、お水は個人商店からは購入しないようにと日本で聞いていた話と違ったので、社会状況が良くなってきているのかなと感じた。その点にも注意し、明らかにしてゆきたいと思った。

(文責：神谷菜穂花、渡邊倫子)

Muhan Health Cooperative Ltd., Durga Bhawani Polyclinic

・訪問日時：2014年8月31日（日）09：30～11：00

・面談者：Dr. Narayan Bahadur Basnet, Pediatrician、Mr. Sharma, Manager of the Polyclinic、Mr. Ghimire, Chairperson、Mr. Tripathi, Board Member

1. 概要

Cooperative クリニックと Cooperative オフィスの見学を行った。Cooperative クリニックは、Cooperative オフィスが経営する病院である。Cooperative Office は日本で言う、生協や農協に近いもので、構成員から少額ずつ集めた資金で、小さいコミュニティを活性化する団体である。その持続可能な発展をめざし、学校や病院、マイクロファイナンスの運営をしている。

クリニックで特徴的だったことは、患者に対する教育の場でもあったことである。例えば、病気になった時の 5 条（休む・薬は正しく服用する等）やリラックス効果のあるヨガを取り入れているようだった。病院内には、小児科、小さい手術室、X 線検査の部屋、歯科、眼科、産婦人科、超音波検査機の部屋、救急対応の部屋、臨床検査を行うラボ、薬局（貸している）などがあった。置いてある機械や薬局の薬などは日本にあるものと同じものも多かった。特に小児科で、靴を脱ぐ仕組み・ベッドがあったのは印象的だった。

2. 質疑応答

Q：カルテの保存に PC は使われているか？

A：PC ではなく、冊子にして日本でいうお薬手帳のように患者が各自で保存している。

Q：診察料はどれくらい？

A：1 人 450 ネパールルピーで一週間診察を受けることが出来る。その内 306 ネパールルピーが医師の収入になる。世界銀行の統計によると、2009 年から 2013 年では、ネパールでは一人当たりの医療支出が年間 36 米ドル＝3,513 ネパールルピーであり（※1）、ナラヤン先生がスペシャリストなので若干高いが、それでもだいぶ安くしているし、患者は都市の人なので払える。

Q：診察代が前払いだがなぜか？

A：未払いを防ぐため。日本と違って、保険がないことが関係している。

（※1） 出典：The World Bank, Data, Health expenditure per capita (current US\$) 2009-2013, <http://data.worldbank.org/indicator/SH.XPD.PCAP> (2014/10/7 にアクセス)

（文責：川嶋円香）

Lecture of Dr. Narayan B. Basnet

・訪問日時：2014年8月31日（土）11：00～12：30

・面談者：Dr. Narayan Bahadur Basnet

1. 概要

ネパールについて（特に健康、女性と子どもの現状について）と、そんなネパールにおいて Cooperative Office が目指していることについて、ナラヤン先生からレクチャーして頂いた。ネパールは、様々な言語・民族・宗教・カーストが共存している多様性のある国である。産業としては、農業と観光業が強い。特にヒマラヤ山脈は多くの観光客を集めている。国民性は働きもので、優しい。まだまだ上下水道などのインフラ整備は遅れているが、教育や女性のエンパワメントに力を入れていて、小学校教育の無償化や、女性の土地所有を後押ししている。実際、就学率（表 1-1）・識字率（表 1-2）はだんだん上昇してきており、乳児死亡率も減少（表 2）した。しかし、子どもの教育・健康の面では地域格差や経済格差があり、児童労働は禁止されているが、女子の労働は行われている。女性は有利な条件での離婚が難しく、また低カーストの女性を身内や村に病気など厄を引き起こした魔女と名指しして、誹謗中傷したり暴力をふるったりする魔女狩りのようなものさえある（※1）また、ネパールの有能な人材の多くは、海外に行ってしまい、スキルのある・マネージメントできる人が国内に足りない現状がある。

Cooperative Office は日本で言う、生協や農協に近いもので、構成員から集めた少額で、小さいコミュニティを活性化する団体である。前述のような現状を踏まえて、その持続可能な発展をめざし、民主的な構造をもって、コミュニティの構成員の教育とお金を貯める習慣を促進しようとしている。具体的には、学校や病院、マイクロファイナンスの運営をしている。

（表 1-1）初等教育における就学率の推移

1999		2011	
Male	Female	Male	Female
78	60	90	90

Net Enrolment Ratio (NER) In Primary Education (5-9) (%)

（表 1-2）15 歳から 24 歳の識字率

1985-1994		2005-2011		Projected 2015	
Male	Female	Male	Female	Male	Female
68	33	89	77	91	83

Youth Literacy Rate (15-24) (%)

出典：EFA Global Monitoring Report » Statistics » 2013/4-Teaching and Learning,

Statistical Tables-long version, エクセルデータより作成

URL:<http://www.unesco.org/new/en/education/themes/leading-the-international-agenda/efareport/statistics/statisttabl ical-es/> (2014/10/7 にアクセス)

(表 2) ネパールにおける乳幼児死亡率/死亡数の推移

Infant mortality rate(deaths per 1,000 live births)		Number of infant deaths (thousands)		Under-five mortality rate(deaths per 1,000 live births)		Number of under-five deaths (thousands)	
1990	2011	1990	1990	1990	2011	1990	2011
94	39	66	27	135	48	94	34

出典 : UNICEF/WHO/The World Bank/UN, Levels& Trends in Child Mortality Report 2012, URL:

http://www.childmortality.org/files_v17/download/Levels%20and%20Trends%20in%20Child%20Mortality%20Report%202012.pdf#search=%27UNICEF+Report+trands+in+infant+mortality+rate%27

2. 質疑応答

Q ネパールの家族計画について。日本的な家族計画(子どもの数を増やそう)と、中国的な家族計画(子どもの数を減らそう)のどちらよりなのか。

A 日本と中国の間。無計画な出産は家庭の経済状態を悪化させる。出生率が 2.1 以上なので人口は増加しているが、出生率自体は年々減っている(表 3)。

Q 女性の名で土地を相続すると、相続税が減額されるのは本当か。

A 本当。女性が不動産の所有権を持ったまま家を逃げ出してしまうというケースが生じており、(たぶん男性たちにとっては) 問題になっている。

(表 3) ネパールにおける出生率の推移

Total fertility rate, 2012	2.4
Total fertility rate, 1970	6
Total fertility rate, 1990	5.2
Total fertility rate, 2012	2.4
Average annual rate of reduction (%) Total fertility rate, 1970-1996	0.7
Average annual rate of reduction (%) Total fertility rate, 1990-2012	3.5

出典 : http://www.unicef.org/infobycountry/nepal_nepal_statistics.html#0

3. 参考

(※1) INSEC, “A Study on Violence due to Witchcraft Allegation Sexual Violence” ,
URL:<http://www.whrin.org/wp-content/uploads/2013/Witchcraft-report-INSEC.pdf>
(2014/10/15 にアクセス)

(文責：川嶋円香)

Children's Medical Diagnosis Center

・訪問日時：2014年8月31日（日）13：00～14：00

・面談者：Dr. Narayan Bahadur Basnet

1. 概要

Children's Medical Diagnosis Center（以下 CMDC）はネパールの政府に医療機関として認定されたカトマンズにある個人クリニックである。CMDC は Chabahil にあるクリニックから活動を始め、2005年9月5日にカトマンズに設立された。Dr. Narayan は小児科、また小児科心臓病の専門医であり、このセンターの代表である。

2. 質疑応答

Q：予防接種を受けている人の割合はどのくらいなのか。

A：無償のものはほぼ100%であるが、有料なものであるとどうしてもお金がかかるため、お金に余裕のある人か教育を受けた知識ある人のみである。

Q：無償のものには具体的にどのような種類があるのか。

A：結核、百日咳、はしかなどが挙げられる。

3. 考察

薬やメジャーなど実物を見せて指導を行うことで、たとえ文字が読めない人であろうとも飲み間違いや医師と患者間での意味の取り違えがなくなる。日本では実物を見せるがそこまで重要視していないのはおそらく識字率が高く、薬と一緒に出す説明書に多くの情報があり、それを自ら読み理解することが出来るからなのではないだろうか。このことから、日本で当たり前のことが途上国では当たり前ではないということが推測出来た。

4. 参考

CMDC Children's Medical Diagnosis Center ホームページ, URL: <http://www.cmdc.np>

（文責：大塩みなみ）

Changu Narayan Temple & Bhakutapur

・訪問日時 2014 年 8 月 31 日（日） 15：00～17：00

1. 概要

チャング・ナラヤン寺はネパールに現存する最古のヒンズー教の寺院であり、世界遺産に登録されている。山の頂上にあり、近辺にはこの寺院より高い建物はない。リッチャビ王朝時代の 323 年に創建され、火災などにより現在の建物は 1702 年に再建されたものである。

ヒンズー教には大きくわけて 3 種類の神様がいます。創造の神様、守る神様、壊す神様の 3 つである。この本尊は創造の神様であるヴィシュヌ神の化身であるナラヤン神である。駐車場から昔ながらの、レンガ建築の家屋が両脇に建つ参道を進むと、堀で囲まれた広場があり、その中央に 2 層のチャング・ナラヤン寺が建っている。

赤いレンガの壁と窓や扉の木材が調和した正方形の建造物である。4 方の扉の前にはライオンに翼が生えた怪獣などが 2 体で一対となって座している。軒を支える木製の支柱には細かい装飾が施されていて、千手観音の原型となった手を複数持つ神様などが彫られている。

バクタプルはカトマンズ盆地の東端にある古代ネワール人の古都である。王宮や寺院などが保存されており、ダルバール広場は 1979 年に世界遺産に登録された。1427 年に建てられ、1769 年までマッラ王室が居住していた 55 の窓を持つ王宮がダルバール広場にある。

パゴダ形式と呼ばれる寺院建築で建てられた五重塔ニャタボラ寺院がトウマディー広場にある。

2. 考察

地震が少なからずあるネパールではあるが、レンガ造りの建築が何百年も前から壊れずに建っているのは、それだけ耐震性に優れた建築技法であると言える。だが、現在その伝統的な建築技術が失われつつある。修復が必要であっても経済的にできていないところもあるので、貴重な文化財の保存に力をそそぎ、日本での失敗例を活かして景観も残してほしい。

（文責：吉村藤子）

Maiti Nepal

・訪問日時：2014年9月1日（月）11：30～13：20

・面談者：Mr. Achyut Nepal、Maiti Nepal 法律部門マネージャー

1. 概要

1993年に性被害者の少女、女性の保護団体として Ms. Anuradha Koirala によって設立されたネパールのローカル NPO である Maiti Nepal についての説明を受けたあと、施設見学を行った。最後に Maiti Nepal に入居中の女性たちの就労支援施設である training hall を訪れた。Maiti とは、「女の子たちの家」という意味である。Maiti Nepal では、トラフィッキングの被害者となった女性や子どもの保護、救出、社会復帰のためのリハビリテーションや、トラフィッキングの予防をおこなっている。トラフィッキング防止活動としては、スタッフによるテレビやラジオの情報が入らない地域への出張講義、バスの運転手や警察への働きかけ、カトマンズ市内の主要道路をアンチ・トラフィッキングの訴えに賛同する人たちで手をつないで human chain を作るキャンペーンなどのトラフィッキングへの認知度をあげる活動と、孤児、家庭崩壊、育児放棄などのためにトラフィッキングの被害者になる恐れのある子供たちの保護活動があげられる。

Maiti Nepal は、オフィスの敷地内に約 300 人の子どもが暮らす寮をもつ。救出したトラフィッキング被害者の社会復帰支援活動としては、敷地内のテレサ・アカデミーでの子供の教育、training hall での女性の職業訓練などがあげられる。Maiti Nepal では、半年から1年の間に女性が家族のもとへ戻り、社会復帰することを目指している。

Maiti Nepal には 6 部署で 200 人のスタッフが働いており、時期によってはボランティアスタッフが加わることもある。Maiti Nepal は支持者からの寄付と女性たちがつくった工芸品の収益で運営されているそうだが、ほとんどは寄付によって賄われているという。

2. 質疑応答

Q：家族のもとへ戻った女性のアフターケアはあるか。

A：ボランティアスタッフにまかせている。

Q：保護された女性や子どもはどんな状態で Maiti にくるのか

A：精神的にも身体的にも問題を抱えた状態。精神的、身体的に問題がないと Maiti にはいることはできない。

Q：アチュートさんはなぜ Maiti で働こうと思ったのか。

A：短大で教師をしていたが、ネパールの女性や子供のために何かしたい、という思いを持っていた。友人から Maiti Nepal の話を聞き、アポイントをとった。

3. 考察

敷地は鉄門と塀で囲まれており、監視カメラが設置されていた。訪問者は写真を撮ってはいけない、などのルールから、「被害者のプライバシーを保護する」ことに重点をおいた施設なのだという印象を受けた。しかし、それを重視するがゆえに、隔離された別世界になってしまったと感じた。施設はとても綺麗だったが、半年から 1 年、この境界線の内側で暮らした女性が家族のもとへ戻ってなじめるかといわれると疑問が残る。また、ネパール国内に 3 つのオフィスを持つ巨大な NGO であるだけに、NGO 単体での活動だけではなく地元警察との連携協力もしているということで、トラフィッキングを撲滅しようとする意志が感じられた。

(文責：神谷菜穂花)

Chalnakhel Primary Health Center Kathmandu

・訪問日時：9月1日（月） 10:00～14:00

・面談者：Mr. Nelra Neupane Public Health Inspector, health assistant

1. 概要

PHC の位置づけ

PHC は政府が設立した施設で、日本でいう保健所に近いものである。カトマンズバレーにはカトマンズ、パタン、バクタプル の 3 つの district があり、そのうちの 1 つであるカトマンズには 8 つの PHC がある。ちなみに、PHC の分院の役割を果たすのが health post と言われるもので、さらに小さいものとして sub health post があり、地域をカバーしている。今回訪れた PHC は約 2 万 5 千人をカバーしている。13 年前からこの地域に PHC はあったが、当時は借家で運営していた。1 年半前に現在の新しい建物に移動してきた。PHC は保健所的な役割を果たすものなので、初期の治療やもしくは簡単な処置を行っており、重症の患者などには紹介状を書いて government hospital などの総合病院に送っている。

診療体制

診察は 10 : 30～13 : 30 と 13 : 30～17 : 00 に分かれており、前半は無料で、後半は 50 ルピーで切符を買って診察を受ける。実際は後半でも無料で診察をする場合もあるという。処方箋は基本的に無料である。一日平均 40～50 人、多いと 100 人近くの人を訪れる。国からの給料で働いている職員が 12 人おり、health assistant, medical officer, staff nurse, lab assistant が一人ずつ、auxiliary nurse midwife, auxiliary health worker が三人ずつ、office helper が 2 人である。現在勤めている medical officer の男性は 6 か月間この PHC で働くことになっており、ローテーションで様々な医療施設をまわっている。主に外来患者の診察やその他 doctor としての仕事を行っている。Health assistant の男性は会計の責任者であり medical officer が不在の時に患者を診察したりしている。lab assistant は検査室で様々な検査を行う仕事があり、男性であった。staff nurse は看護師であり、私たちが見学をしたときは受付をしていた。auxiliary nurse は nurse の補助、分娩の補助、また予防接種の補助を行っている。auxiliary health worker は予防接種の訓練を受けており、doctor に代わって注射を行う。office helper は院内の清掃などの仕事を行う。その他に国から給料は出ないが地域からの寄付などによって雇われている従業員が 3 人おり、女性の auxiliary nurse midwife, 男性の auxiliary health worker, office helper が 1 人ずつである。彼らの勤務時間であるが、先の 12 人は 10 : 00～15 : 00、その後 15 : 00～翌日の 10 : 00 までを後の 3 人が受け持ち、緊急事態に備えた 24 時間体制となっている。3 人のうち auxiliary nurse midwife, と auxiliary health worker には院内に部屋が用意されており、夜などにはそこで休みつつ緊急時にはすぐに動けるようになっている。来院する患者の主な病気はか

ぜ、ぜんそく、肺炎、下痢などである。

2. 質疑応答

コンピュータの使用状況についての質問がでた。解答は次の通り。1 か月ほど前に国からコンピュータをもらったが、使える人がいないのと環境整備の不十分さから、まだ使用はされていないとのこと。将来の用途としては、インターネットを通じた情報収集と患者情報の管理、国との情報共有を考えているという。

3. コメント

予想していたよりもはるかに大きい施設で広範囲をカバーしていたことに驚いた。また、そのおかげで大勢の患者が訪れるため、3 人の職員を寄付で雇うなど、体制も確立されているように思えた。救急の部屋の掲示物で知ったことだが、家での仕事が忙しくなかなか病院へ行くことができなかつたり、あまり気にせず放っておいたりしてしまう女性に対して病院へ行くように促すため、ボランティアがいるのだという。全員女性であるが、彼女たちのおかげでこの PHC がより地域に密着した存在になっているのだと感じ、重要な役割だと思った。疑問、また不安に思った点としては、広範囲をカバーしているが交通手段が限られるこの地域でどのくらいの人が遠方から来院し、もしくは来院できていないのかということ、電力供給が不安定な中で今後コンピュータの効果的な活用ができるのだろうかということが挙げられる。いずれにしても、PHC 単独の問題ではなく、ネパール全体のインフラ整備の問題でもあるので、少しずつでも改善していったらと思う。

(文責：木次愛美)

SERC (Special Education and Rehabilitation Center for Disabled Children)

・訪問日時：2014年9月2日（火）8：45～15：40

・面談者：Dr. Kalpana Basnet, Founder, Managing Director of SERC

1. 概要

SERC は 2009 年に設立した NGO 法人であり、障害を持った子どもの養護学校である。現在 2 歳 6 ヶ月から 16 歳のハンディキャップを持つ子供の入学を受け付けている。14～16 歳の間にスキルを身につけさせ、16～18 歳で就労教育をしているそうだ。学生は、5 歳までが 11 人、5～8 歳が 21 人、8～12 歳が 25 人、12～16 歳が 18 人、16 歳以上が 5 人で、男子が 54 人、女子が 26 人いる。他に、リハビリのみ受けに来ている子がいて、合計すると 90 人が在籍している。

学費は月に 8,000～9,000 ルピーであるが、今までに受け入れた子供の中には、孤児が 30 人含まれており、彼らは民間の奨学金によって SERC に入学している。子どもたちの中には公的な奨学金つまり政府から社会保障給付金を受給している生徒もいるが、入学前に給付を受けていない場合が多く、SERC は保護者に社会保障給付のための申請を推奨している。この給付金は直接子どもに支払われるもので、SERC には補助はない。私的な奨学金は主に Liliane Founds から Direct Child Assistance Programme を通して受給しており、その額は奨学金受給者の総額のほぼ 50%にのぼっている。

職員は、創設者で代表のカルパナ医師の下に、事務や備品を作ったりする人が 11 人、リハビリ担当が 6 人、教育担当が 14 人いて、合計 32 人いる。SERC に入るためには、コミュニケーション能力、自己管理能力、身体能力など 6 つのことを評価して、その結果を保護者に報告する。その評価をもとに、スタッフと親と可能ならば本人が、入学するか否かを話し合う。入学が決まったら、その子にあった最終目標を決め、プランを立てる。実際には 3 ヶ月毎に小さな目標を決め、それに合わせてスケジュールを組む。

SERC は、閉鎖的な空間にならないように、15 の外部組織と一緒にパラリンピックのゲームと一緒にやったり、手洗い促進のワークショップをやったり、動物園に見学に行ったりしている。

SERC の建物は借家で家賃は、月々 75,000 ルピーである。送り迎えをしているスクールバスも朝夕借り上げているだけで、SERC のものではないそうだ。

施設の中には、理学療法を行なっているところと、授業を行なっている教室がある。知的障害の程度に応じて 8 つクラスが分かれている。障害が軽度のクラスではほぼすべてのポスターや教材が英語であり、子供たちは英語をよく理解し使いこなしていた。

障害が重くなるに従って、英語の使用率は低くなる。時間割も文字表記ではなく写真で表現するようになる。とあるクラスでの時間割は、次のようになっていた。

9：00 に登校し、10：00 からネパールの地理について勉強し、10：30 に昼食を食べる。10：50 から再び勉強をし、12：30 から 30 分間果物を食べる時間があり、その後体を動か

す運動をした後、13：40 に再び軽食を食べる時間があり、14：00 から歌の時間があった、14：30 からダンスの時間があり、14：50 に下校する。

重度の心身障害者のクラスには、トイレにいくのにもスタッフが 2 人がかりで行かせなければならぬ生徒もいた。おとなしく椅子に座っていたが、とくに何かをするでもなく、スタッフに勧められてようやく何か手先を動かす、といった具合であった。その教室には立ち方を示した絵が貼ってあったり、誰がいつ立つ練習をするのか、ということが書かれた紙が貼られていたりした。

教室がある建物とは別に小さな工作小屋がある。ここでは、子供一人ひとりの体に合わせた椅子や机を作っている。製作専門の人が一人いて、すべて彼のハンドメイドだ。日本であれば 30 万ほどもするようなものを、彼が作れば材料費だけで 2 千円程度でできる。

2. 質疑応答

Q：SERC のポリシーは何か。

A：安全第一。事故が起きないように子供を一人にさせない、教員や親が子供を虐待しないようにする、ということに気を付けている。

Q：パソコンをどう使っているのか。

A：スタッフ全員がパソコンを持っていて、紙媒体に書いた子ども一人ひとりの評価と同じことをパソコンに入力してデータを共有している。また、目が不自由な人のために大きく表示するようなソフトを開発して使っているとのことだ。

Q：ここで働くために必要な条件は何か。

A：10 年生以上教育を受けていれば誰でも職員になれるし、また、理学療法士についても、専門の学校を卒業したら即専門家として働ける。

3. 考察

SERC では、幅広い年齢層で、様々な障害を持った子どもたち一人ひとりにあったケアをしていて、とても血の通ったケアをしていた。施設のスタッフの一人が、子どもたちの体に合わせて机や椅子を手作りしているのがその好例だ。また、英語を多く使っていて、私よりもずっと英語の上手な障害児が多かった。日本の英語教育って、一体何なのだろう、と思わざるをえなかった。

施設のスタッフは、とても楽しそうに子どもたちの相手をしていて、ただ金を稼ぐためだけではなく、仕事を楽しんでいるのが感じられた。そのように感じられる職業についたら幸せだろう。

また、私は今まで、子供や障害者について深く考えたことがなかった。だが、榊原先生に、寝返りを打つにはどうすればよいか、と問われて、実際にやってみて、始めて体の動

きを意識した。どのように体を使っているのかを知ることによって初めてリハビリができる、ということに初めて気がついた。

4. 備考

SERC ホームページ, URL: <http://serc.edu.np/node/1>

Liliane Founds ホームページ, URL: <http://www.lilianefonds.org/index.php>

(文責：吉村藤子)

SERC (Special Education and Rehabilitation Center for Disabled Children)

・訪問日時：2014 年 9 月 2 日（火）8：45～15：40

・面談者：Dr. Kalpana Basnet, Founder, Managing Director of SERC

1. 概要

・SERC は障害を持った子どものための教育とリハビリテーションの施設として、2009 年に設立された。2 歳半～16 歳までの、身体的または精神的に障害をもつ子どものための特別な学校である。

・SERC のねらいは障害を持った子どもたちが全ての側面で自立できるようにすること、16 歳以上の子どもたちが収入を得ることができるように、職業訓練をすること、ネパールの中で最も大きく効果的な特別学校となること、などである。

・生徒は全員で 90 名（男子：54 名、女子：26 名）

・スタッフは全員で 32 名

・通常の教室で行う教育の他に、親のカウンセリングや、他施設と共同でアクティビティなども行っている。

2. 質疑応答

Q：スタッフの給料体系はどのようなか？

A：ネパールの他の施設と変わらない。

Q：コンピュータはどのように活用されているか？

A：スタッフは全員持っている。アシスティング・デバイスとして効果的だと思っている。子どもに映画などを見せられたら良いと考えている。

Q：16 歳で基本的に卒業とのことだが、その後はどうなるのか？

A：文字を読む教育を行うこともある。卒業後すぐに障害を持っていない子どもたちと同じ学校へ通うことは難しい。

3. 考察

SERC は施設の運営が非常に組織だって行われており、子どもたちも快適に過ごせているのではないかと感じた。一点気になったことは、一か月の学費が日本円にして 8,000～9,000 円ということだ。大学教授の月給が 50,000 円ほどと聞いたので、親がどのような職業であれ、家庭の支出の大部分を占めることになる。そのような状況で子どもを SERC に通わせるためには、親が「子どもに教育は大切である」との理解が重要なのではないかと感じた。

（文責：山下悠）

Chalnakhel Primary Health Center Kathmandu

訪問日時：2014 年 9 月 3 日（水）10:00~14:30

面談者：Netra Neupare さん、PHC の管理者

1. 概要

PHC は国が運営する保健所のような所で、村にある。伺った PHC は 13 年前からあり、一年前に新しい土地で新しく建てられた。訪問した PHC は 24 時間営業しており、10:00~13:30 は無料で、13:30 以降は一回につき 50 ルピーで診察している。しかしお金の無い患者には無料で診る。国で医者を含めた医療関係者や院内の掃除などを行う職員を含めスタッフは計 12 人で国から給与がでている。また他に 13:30~翌日 10:00 間のスタッフは住み込みで 3 人おり、寄付などから給与が出ている。全般的な症状について診察を行い、こちらで治療できないものは大きな病院を紹介する。一部薬も国から交付され、患者は無料でもらうことが出来る。国から支給されない薬も病院内にある委託の薬局で購入することができ、街の薬局より 10%安い価格で手に入れることが出来る。一日の来院数は 30~40 人で、多くは風邪だそうで、施設には受付、診察室、治療室、救急室、産婦人科系の部屋が 5 部屋、検査室などがあった。検査も 30 種類受けることができる。

2. 質疑応答

Q：住み込みのスタッフ 3 人の給与の資金源は何か。

A：寄付からで、その寄付には午後診療料の 50 ルピーや薬局の賃貸料も含まれている。

Q：薬局が 10%安い価格にしているのはなぜか。

A：サービスで、村の人の負担を軽減するため。

Q：妊婦さんに与える薬で有料だが PHC が買って患者には無料で渡しているのがあるが、その負担はどこから出るのか。

A：午後診療の代金、薬局の賃貸料、寄付。

Q：上記の PHC が負担する、ということは自分たちで決めたことか。

A：そう。

3. 考察

私たちの訪問中に看護師さんの団体が視察に来ていたようで、ここは参考モデルになる良い PHC なのだろうと感じた。産婦人科系は部屋が 5 つに別れていたため、力をいれている、問題が多い分野なのかなと感じた。

4. 備考／コメント

国の機関だが村の人々がより良い生活を営むことが出来るように、スタッフ自らが考え、身を削り患者には無料で薬を支給していたりしており、本気で住民と向き合っていることが感じられました。

(文責：渡邊倫子)

ECDC (Early Childhood Development Center)

・訪問日時：2014年9月3日（水）09：00～15：00

・面談者：Ms. Pushpa Basnet Founder & President of ECDC

1. 概要

ネパールでは、女性が刑務所に行くとき、彼女の子どもに引き取り手がいなかった場合、母親とともに刑務所に入れられる。刑務所では、十分な栄養も、温かい着物も、医療ケアや教育も与えられず、自由のないまま生活することになる。設立者 Ms. Pushpa はそんな子ども達と偶然大学の授業の一環で会い、彼らを保護するため、周囲の反対を押し切り ECDC を設立した。はじめは日中だけ子ども達を預かる幼稚園だけだったが、子ども達がその後送られる孤児院の惨状に、子ども達がずっと生活できる家も建てた。私達は、その家を訪問させて頂き Ms. Pushpa にお話を伺った。

子ども達は Ms. Pushpa をお母さんと呼び、本当の家族のように生活し、登校し、遊んでいる。今後 CNN HERO of the Year 2012 に選ばれた時の賞金を使って今よりも大きい 70 人入れる家を建てる予定がある。Ms. Pushpa は CNN hero of the Year に選ばれたことについては、大変うれしいが、もてはやされてだめになってしまわないよう、子ども達の幸せだけを考えるようにしているとお話されていた。また、子ども達には、出生のことでいじけないで、お互いを、そして自らを尊重できる人になってほしい。そのため泣き寝入りはせず叩かれたら叩き返せと教育しているということだった。家には、幼児用の部屋・台所・絵を描く部屋・図書室・寝室 2 つ・勉強部屋と 7 つの部屋がある。全体的に整理整頓され、絵や写真などで飾りつけられていた。本やおもちゃ、知育教材、動物の写真と名前がのっているポスターなども多くそろえられていた。

2. 質疑応答

Q：スタッフと子ども達の割合は？

A：スタッフが 9 人で、子ども達は 40 人。

Q：職員の資格は？

A：決まってない。子どもにとって好ましい人物か否かは会えばわかる。

Q：セラピーはあるか？

A：その技術を持っていないからできない。また、ここは施設ではなく、家庭のようなものなので、セラピーはない。

Q：虐待など悪いバックグラウンドを持つ子ども達同士は、混乱を起こしたりすることはないか？

A：女性スタッフ 3 人もこの家で寝起きしているので、ない。

Q：政府からの補助は？

A：ない。自分の基金からの収入と、子ども達や母親達が作った工芸品を売るお金でやりくりしている。

Q：しつけは？

A：きっちりする。部屋ごとに指名された年長者がリーダーとして、部屋の使い方などを子ども達に指導する（寮のような感じらしい）。

Q：母親と子どもが会う頻度は？

A：3 か月に一度。ダサイン(祭りの期間)が 1 か月。その期間に母親に引き取りを拒否された子ども達は、**Ms. Pushpa** が旅行に連れて行ってあげる。

Q：どの子を優先的に預かるか？

A：カトマンズから遠い刑務所の子、親の服役期間が長い子、女の子（男の子は跡継ぎにするため祖父母が引き取る場合が多い）を優先する。

Q：インターネットは利用しているか？

A：子ども達は宿題をする時だけ使える。世界の重要なイベント等がある時は、ネットを使って皆に示す。

3. 考察

子どもを親に引き渡す際、親が子どもを育てられるか審査する。子どもが親に引き取られた後も、ちゃんと学校に通っているか等、追跡調査を行う。また、刑務所を出所した母親へ就労支援として手工芸品のトレーニングをすることもある。

4. 参考

ECDC ホームページ, URL: <http://ecdcnepal.org/newportal/about-us/>

(文責：川嶋円香)

WEPCO (Women Environment Preservation Committee) Nepal

・訪問日時：2014年9月4日（日）9：00～12：00

・面談者：Mr. Bom Malla, Program Manager

Mrs. Bishnu Thankeli, President

1. 概要

1992年に主婦によって設立された。テクノロジーの促進と女性達の生活と環境を変えるため彼女達のエンパワメントを行っている。ビジョンとして清潔な場で生活をし、子供達が健康に成長出来るよう公害問題を解決し都市環境を整えることとしている。プロジェクトの一つの中に Nari eco-gift center というものがある。これは主にトレーニングを受けた家庭内にいる既婚女性がゴミからペン立てやバッグなどの商品を作りそれを売るというものである。また現在1日一回1855世帯から10-12tのゴミを回収しそれを分別し、リサイクル出来るものは極力するようにしている。特に紙は100%リサイクルされており、それを用いてノートなどを作って販売している。

2. 質疑応答

Q：パソコンをどのように使っているのか。

A：女性達にトレーニングをする時には使っておらず、事務的なものに使っている。

Q：女性達に具体的にどのように指導を行っているのか。

A：ゴミを使い、例えばどのように紐を編んで作るのか、またそれを用いてどのようにバッグをつくるのか、ということについて教えている。

Q：なぜここでしか商品を買わないのか、街中で売った方が売れるのではないのか。

A：ここに来てこのプログラムを理解してから買って欲しいためここでしか今のところ売っていない。

3. 考察

仕方がない気がするが、問題の根本的原因を解決するのではなく、その問題によって引き起こされたものに対して処置するという活動である。今後どのようにその根本的問題を解決していくのかがポイントである。その時に全ての人を対象にするのではなく例えば所属メンバーのみに対して最初に行い、成功したらどんどん広めていく方法が良いであろう。また市からのサポートを受けていないという点に関して、この問題は行政が関わって対処すべき問題であるため今後市とどのように関わっていくのか、という点に対しても今後注目すべき点である。

4. 参考

WEPCO Nepal ホームページ, URL: <http://www.wepco.org.np/about/>

(文責：大塩みなみ)

Kathmandu Durbar Square

・訪問日時：2014年9月4日（木）14：30～17：30

1. 概要

カトマンズにある Durbar Square（ダルバール広場）を訪問見学し、ネパールの文化、社会、慣習を理解する。

2. 考察

まず、チケットを購入した。バクタプルの Durbar Square よりも入場料が安かった。あまり広い敷地ではなかったが、趣のある建物が密集しており、数分前にいた街中の様子とは全く違う雰囲気であった。寺の建物だけでなく、巨大な壁に像が彫られているものや大小さまざまな動物のような生物の像があちこちに点在していた。次にわたしが向かったのが博物館である。ネパールの近代史における様々な資料が展示されていた。写真や手紙、模型、かつての部屋を再現したスペースなどもあり非常に楽しむことができた。また、博物館の建物自体も立派な作りで、迷路のようであるが順路に従って進んでいくことにすこしわくわくした感じを受けていた。あいにくこの日も先日のバクタプル見学の日と同じように雨が降ったり止んだりしていた。博物館を出る直前も一時的な大雨となり、屋根の下で15分ほど雨宿りをした。ほとんど止んだところで次のクマリの館に向かった。ここでクマリが生活しているとは聞いていたが、めったに顔を見せてくれることはないとも聞いていたので、建物を見学して雰囲気を味わうだけのつもりでいた。しかし、ちょうどわたしが館の中庭に入ったころ、クマリが顔を出してくれることになった。私たちのほかにも観光客が10～20人ほど中庭に集まり、2階の窓から顔を出すクマリを眺めた。すぐに中に入ってしまったので、私たちもそこで退出することにした。そのころには雨は止んでおり、傘を手を持ったまま帰りの車を待つために出口へ向かった。クマリの館や博物館内部での写真撮影は禁止されていたので残念ではあったが、ヒンドゥー文化に触れることが出来た。また、この実習最後の視察ということで、皆思い思いに楽しむことができたのではないかなと思う。

（文責：木次愛美）

2-5 写真



Dr. Narayan, Dr. Sangeeta によるオリエンテーション



Muhan Health Cooperative Ltd.,
Durga Bhawani Polyclinic にて、
Dr. Narayan よりクリニックに
ついての説明を受ける。



Dr. Narayan よりネパールの医療、
女性と子どもに関する講義を受
ける。



Muhan Health Cooperative Ltd.,
Durga Bhawani Polyclinic のみ
なさんと。



SERC (Special Education and Rehabilitation Center for Disabled Children) にて創設者で代表の Dr. Kalpana より説明を受ける。



SERC (Special Education and Rehabilitation Center for Disabled Children) にて子どもたちとの交流。



Chalnakhel Primary Health Center Kathmandu のみなさんと。



WEPCO (Women Environment Preservation Committee) Nepal にて。

Ⅲ.事後学習成果（徽音祭パネル）

1 バングラデシュスタディツアー

1-1 マイクロファイナンスグループ

BRACとマイクロファイナンス ～貧困の削減に向けて～

3年小山奈月 3年坂上璃紗 4年佐藤貴恵

バングラデシュの概要



- 人口: 1億4,200万人 (日本: 1億2,600万人)
- 人口増加率: 1.2% (日本: 0.2%)
- 面積: 14万7,500km² (日本: 37万7,900km²)
- 1人当たりのGDP: 1,210ドル (日本: 4万9,400ドル)

(2020年推定値)



Village Organizations (VO) とは？



VOは村の発展を促進し、BRACはそれを支援する。

- ✓ 農村の発展を促進
- ✓ 農村の発展を促進
- ✓ 農村の発展を促進
- ✓ 農村の発展を促進

BRACとは

4,200の農村コミュニティ・開発プロジェクトにより、農村の発展を促進し、貧困削減に貢献している。



マイクロファイナンスの流れ - 例 -



マイクロファイナンス・Microfinance とは？



- ✓ 担保なしの少額融資
- ✓ 2006年にグラミン銀行・ユナス氏がノーベル平和賞受賞

銀行による金融サービスから、銀行に代わって、金融サービスを受ける機会を提供する。

BRACの4つのプログラム



国際協力分野におけるMFの特徴



これまで(～1990年) 近年(2000年代以降)

- ✓ 経済開発中心
- ✓ 経済開発中心
- ✓ 経済開発中心
- ✓ 経済開発中心

返済金の流れ



マイクロファイナンス成功例



成功例: 農村の発展を促進し、貧困削減に貢献している。

マイクロクレジットの使い道



1-2 ジェンダーグループ

教育・労働・コミュニティからみる Bangladesh におけるジェンダー



目次

- ・ 1 はじめに
- ・ 2 教育×ジェンダー
- ・ 3 労働×ジェンダー
- ・ 4 コミュニティ×ジェンダー



はじめに

- ・ 教育、労働、コミュニティから、Bangladesh におけるジェンダーを考察する。
- ・ ミルプールにある視覚障害者学校、アシュリアにあるアパレル工場、ダッカのコミュニティを訪問し、担当の方にお話を伺ったのち、インタビュー調査を行った。

教育×ジェンダー

- ・ BMIS (Bogura Mission Integrated School) 概要
 - ・ 1977年 設立 (視覚障害のある女子への教育・就労支援提供)
 - ・ 2000年 男女共学化
 - ・ 2007年 普通課程併設
- ・ 現在の生徒数・視覚障害者110名、健康者70名
- ・ 日本との連携
 - ・ 1) 視覚障害者への職業訓練指導のため、JICAボランティアとして小坂さんが手工芸を担当
 - ・ 「夢の橋・人間の安全保障推進基金協力」により、新校舎・コンピュータ教育棟が提供



生徒たちとの交流より

- ・ 女子生徒たちと折り紙を通じた交流。
 - ・ 習得の子が金貨の子を手助けをする場面も。段を渡られ、彼女達と自分はお互いにとても近い存在ではないと改めて実感。
- ・ 経済成長や女性の社会進出が進んでいるが、女子障害者に対する支援はまだ不十分。



BMIS・・・障害者への教育・就労支援の場
問題：資金難
(不十分な照明設備、建設途中の校舎)
⇒教育環境へ影響
課題：支援団体の増加、自己資金限の確保、社会における障害者支援対策の認識強化



ジェンダー×労働

《縫製工場の場合》

- ・ 男女比・・・70%が女性
- ・ 縫い作業中心
- ・ 育児休暇・・・4ヶ月の有給休暇(人目からは不可)
- ・ マネージャーによるサポート



《手工芸製作所の場合》

- ・ 女性工員が大半
- ・ 研修を受け様々な工程を担当
- ・ 育児休暇・・・6ヶ月の有給休暇
- ・ 週2で訪れる医師の診察を無料で受けられる
- ・ 工員が使用できる託児所



⇒両者ともに女性には働きやすい環境だが...

コミュニティ×ジェンダー

・ ポーリシヨマツチ・ミーティング

- ・ Executive meeting
 - ・ 11人の村の幹部により構成
 - ・ general meetingで話し合う議題を決定
- ・ General meeting
 - ・ 村の女性であれば誰でも参加可能
 - ・ 情報共有や意見強化の場



General meetingでの議題



コミュニティにおける女性の役割



2 ネパールスタディツアー

2-1 Group A

国際共生社会論実習

ネパールの女性と人身取引

神谷菜穂花 山下 悠 渡邊 倫子
(グローバル文化学環3年)(グローバル文化学環2年)(人間環境科学科2年)



ネパール基礎情報

★首都
カトマンズ
(標高約1300m)

★民族
パルパテ、ヒンドゥー、マガル、
タルー、タマン、ネワール等
(民族数約125)

★言語
ネパール語(母語話者約44%)
その他100を超える言語が存在する

★宗教
ヒンドゥー教徒(81.3%)、仏教徒
(9.0%)、イスラム教徒(4.4%)他



女性・人身取引の現状

★女性の現状

- ・多くの女子が学校へ行けていない
小学校女子就学率78%
中学校女子就学率41%(2010年)
- ・15～19歳のうちに結婚する人は
約30%(現在減少傾向)
- ・DVを経験したことのある人は
約64%
- ・魔女狩りの風習が残る地域も存在

★人身取引

- ・多くの子どもや女性がインドや
アラブ諸国へ売られている
- ・年間5000～7000人がインドへ
売られている
- ・インドで売春婦として働く
ネパール人は
約4～10万人と推定



Maiti Nepal

対人身取引活動団体

★少女たちの保護・治療・教育

- ・心身共に傷ついた少女たちは、施設
で1～2年治療を受ける
- ・施設内には学校も併設されており、そ
こで一般教育を受けることもできる
- ・社会復帰できるように職業訓練も
行われている

★人身取引の防止



- ・TV等の情報源がない地域にはスタッフ
が足を運び、現状を伝え注意喚起する
- ・インドへ行くバスの中をチェックする
- ・バスやトラックの運転手に情報を提供
- ・首都カトマンズでも啓発活動

まとめ

ネパールでは、女性が弱い立場に置かれており、人身取引やDVの被害者となっています。
女性を保護する活動はMaiti NepalのようなNGOだけでなく、HIV検査を保健所に置いて無料で行うなど、政府も取り組みを始めていました。
今回のスタディツアーで出会った女性リーダー、そして未来のネパール人女性の活躍にも期待をしたいと思います。

2-2 Group B

ネパールの保健衛生事情の現状と現地の状況

＜現状＞
・ 東南アジアに次ぐ、2012年現在世界人口第28位に属する。人口3000万人に達し、42.5%の人口が15歳以下とされている。
・ 2013年現在世界人口の成長率をみると人口増加率は0.7%、出生率は20.9%。

＜保健＞
1. 乳幼児死亡率が高い現状として現状では栄養ではなく衛生設備が不足していることが原因なのではないかと。
2. また、その要因として衛生設備と衛生設備の普及が十分ではないという点。

＜保健・医療＞
・ 衛生設備は現地の人も多く使っていない。衛生設備は乳幼児死亡率を低下させるための重要な要素である。
・ 衛生設備は乳幼児死亡率を低下させるための重要な要素である。
・ 衛生設備は乳幼児死亡率を低下させるための重要な要素である。

＜保健・医療＞
・ あるクリニックでは、事前に妊婦さんに検診して妊婦の健康状態を確認し、もしも感染していた場合は適切な処置を行う。妊婦さんが妊婦でない人と同じように妊婦の検診を行っている。妊婦さんが妊婦でない人と同じように妊婦の検診を行っている。

＜保健・医療＞
・ あるクリニックでは、事前に妊婦さんに検診して妊婦の健康状態を確認し、もしも感染していた場合は適切な処置を行う。妊婦さんが妊婦でない人と同じように妊婦の検診を行っている。妊婦さんが妊婦でない人と同じように妊婦の検診を行っている。

＜保健・医療＞
・ あるクリニックでは、事前に妊婦さんに検診して妊婦の健康状態を確認し、もしも感染していた場合は適切な処置を行う。妊婦さんが妊婦でない人と同じように妊婦の検診を行っている。妊婦さんが妊婦でない人と同じように妊婦の検診を行っている。

受刑者の子ども達が暮らせる家 ECDC Nepalについて

東洋大学心理学部 川崎 尚子

＜ECDCとは＞
・ ネパールでは、女性が行方不明になる時、その女性の子ども達も一緒に暮らすことになる。子ども達も一緒に暮らすことになる。子ども達も一緒に暮らすことになる。

＜ECDCの中の図＞
・ ECDCの中の図は、子ども達も一緒に暮らすことになる。子ども達も一緒に暮らすことになる。子ども達も一緒に暮らすことになる。

＜おまかせセンター＞
・ おまかせセンターは、子ども達も一緒に暮らすことになる。子ども達も一緒に暮らすことになる。子ども達も一緒に暮らすことになる。

＜おまかせセンター＞
・ おまかせセンターは、子ども達も一緒に暮らすことになる。子ども達も一緒に暮らすことになる。子ども達も一緒に暮らすことになる。

＜おまかせセンター＞
・ おまかせセンターは、子ども達も一緒に暮らすことになる。子ども達も一緒に暮らすことになる。子ども達も一緒に暮らすことになる。

ネパールにおける予防接種

—PHCでの取り組みより—

グローバル文化学履修3年 本次愛美

1. はじめに
・ 多文化共生社会構築で様々な課題を見出すことができた。私はその中でも地域医療、そして地域に対する予防接種の現状に関心を抱いた。PHC (primary health center) を訪ねた。ちょうど予防接種が行われていたところを見学させてもらった。ここでは、その場に行われていた予防接種の様子について報告するとともに、PHCの行う予防接種の課題について考察したいと思う。

2. PHC
・ 私たちが訪れたprimary health centerは、カトマンズ地区にある8つのPHCのひとつである。基本的には無料で診療を受けることができ、基本的には無料。一日平均100人以上の患者が訪れる。開業から約10年経っている。PHCの役割は、
・ 保健所に近い。
・ 地域の住民がアクセスしやすい。
・ 医療の提供、簡単な検査、

・ 主な来院理由
・ 1. 妊婦さん、子ども、高齢者など

3. 予防接種
・ 毎週月曜日と木曜日に予防接種
・ 医師ではなく、nurseという、訓練を受けた看護婦が行う
・ はしか、日本麻疹、日本では三種混合のものに麻疹と日本麻疹を加えた三種混合などを受けていた。
・ 妊婦が子供を産んでくる場合が多い。時々、麻疹の予防接種を受ける。日本では三種混合のものに麻疹と日本麻疹を加えた三種混合などを受けていた。
・ 妊婦が子供を産んでくる場合が多い。時々、麻疹の予防接種を受ける。日本では三種混合のものに麻疹と日本麻疹を加えた三種混合などを受けていた。

4. まとめ
・ 以上から、PHCまたはPHCでの予防接種について、①地域に密着しており、無料でのサービスが多いことから住民に受け入れられる存在である。②組織的に運営されており、患者のデータなどもChild Health Cardなどを用いて管理されている。③その地域の住民のうち、予防接種をまだ受けていない住民を特定できる仕組みが必要。などのことが考えられるのではないだろうか。

ネパールの情報化

工学部情報科学科2年 吉村 尚子

＜ネパールでのインターネット普及率は約30%程度！＞
・ ネパールはアジアの中でもインターネット普及率が低い。インターネット普及率は約30%程度。インターネット普及率は約30%程度。

＜情報化を促す要因＞
・ 情報化を促す要因は、インターネット普及率の向上、インターネット普及率の向上、インターネット普及率の向上。

＜電力不足＞
・ ネパールは山岳国であり、電力不足が深刻である。電力不足が深刻である。電力不足が深刻である。

＜国民の意識＞
・ 国民の意識は、インターネット普及率の向上、インターネット普及率の向上、インターネット普及率の向上。

＜情報化に向けて＞
・ 情報化に向けては、インターネット普及率の向上、インターネット普及率の向上、インターネット普及率の向上。

IV.資料

① 科目概要

(お茶の水女子大学シラバスより抜粋)

科目名	国際共生社会論実習 国際共生社会論フィールド実習 グローバル文化学実習
科目区分・科目種	全学共通科目
クラス	全学科
担当教員・所属	北林 春美 榊原 洋一
単位数	2単位
主担当学科	グローバル協力センター
履修年次	1～4年 博士前期課程
受講条件	海外調査を実施するため、受講者の数を制限します。 履修希望者向けの説明会（5月）の後、書類選考で受講者を決定します。 受講者は事前学習、事後学習、報告会への参加が必須。海外調査のみの参加、聴講は認められません。
授業の形態	講義、討論、実習、発表
教科書・参考文献	参考文献、資料は事前学習の際に指示します。
評価方法・評価割合	小論文（レポート）＝調査報告 70%、出席＝事前事後学習での発表、討論への参加 20%、発表＝帰国報告会・パネル展示 10%
主題と目標	この実習科目は、専攻・学年を問わず開発途上国の社会・経済・政治にかかわる問題や国際協力に関心を有する学生（学部・大学院博士前期課程）が、途上国における研究・実践の実績を有する教員の指導の下で事前学習と現地調査（約1週間）を実施し、都市と農村の貧困、ジェンダー、教育、健康等に関する主題について講義・文献だけでは得ることのできない知識や経験を得ることを目的として実施する。 具体的には、本実習への参加を通じて、 1) 訪問国の一般的な政治・社会・経済の現状を理解する。 2) 各人が選択した特定の課題（教育、保健、ジェンダー、生計向上など）について、観察と文献調査によって得られた情報を批判的に分析し、報告書としてまとめる。 3) 現地調査の結果・考察をグループで簡潔にまとめて発表する。

	現地調査は、現地の大学、国連機関、政府援助機関や NGO の他、保健施設、学校、住民組織等への訪問、見学、講義と聞き取り調査や住民や若者との意見交換等からなる。また調査計画・報告のとりまとめにおいては、参加学生が協力して調査計画や結果プレゼンテーションを取りまとめ、学部・学年横断的に共同作業を行う。 現地調査での体験や学びは、各自の関心に応じたさらなる学習や国際協力の実践活動（インターンシップ、ボランティア）、さらには国際協力に関わるキャリア形成のきっかけとなることが期待される。
授業計画	科目説明会 5月上旬 受講申請書の受付・選考 (5月中旬～下旬) 事前学習 (6月～7月) 安全講習 (8月) フィールド調査 (8月末から9月中旬までの7日間程度) レポート提出 (9月下旬、帰国後2週間以内) 報告会(10月)および微音祭でのパネル展示

② 全体スケジュール

出発前	
履修説明会	5月8日(木) 12:20～13:10 学生センター棟 4F 第五会議室 5月12日(月) 12:20～13:10 学生センター棟 4F 第五会議室
履修者募集	5月8日(火)～ 5月23日(木) 17:00
選考結果の通知	5月30日(金)
履修者説明会(合同)	6月4日(水) 12:20～13:10 学生センター棟 4F 第五会議室 ※諸手続きに関する説明
履修者説明会(合同)	6月5日(木) 12:20～13:10 学生センター棟 4F 第五会議室 ※教員による説明
事前学習	6月5日の説明会実施後、合同での公開講演会の受講、訪問国別に5回の事前勉強会を通じ訪問国の社会経済や関心分野について学習した。 ・学内公開講座 7月5日 2014年7月5日(土)「南アジアの社会・開発と女性」 ➤「バングラデシュの工業化とジェンダー」 講師：長田華子(茨城大学准教授・本学大学院卒業生) ➤「ネパールの社会・文化・女性と開発」 講師：田中雅子(上智大学准教授)

	・バングラデシュスタディツアー 6月11日 調査国・調査内容入門 6月20日 各自研究テーマ発表 7月2日 バングラデシュ映画上映会『Garment Girls~バングラデシュの衣料工場で働く若い女性たち~』 7月9日 各自研究テーマ発表 8月27日 安全講習会 ・ネパールスタディツアー 6月16日 調査国・調査内容入門、各自研究テーマ発表 6月27日 ネパール人留学生（博士後期課程在籍）による講義 7月9日 榊原先生講義 7月14日 各自研究テーマ発表 8月28日 安全講習会
現地調査	
バングラデシュスタディツアー	8月30日（土）～9月6日（土）
ネパールスタディツアー	8月30日（土）～9月6日（土）
帰国後	
調査報告書提出	9月26日（金）〆切
調査報告会 （合同）	10月15日（水）16：40～18：10 大学本館 209 室
ゼミ発表・ポスター 展示	11月9日～10日 微音祭（本学学園祭） ゼミ発表：14：10～15：10、共通講義棟 2-102 ポスター展示：大学生協マルシェ

③ 公開講座概要

本学博士後期課程の卒業生でもある茨城大学人文学部准教授の長田華子先生には、「バングラデシュの工業化とジェンダー」と題して、統計から見たバングラデシュ工業化の概況と、国内における縫製産業の歴史・現状と課題、そして日系縫製工場の事例についてお話しいただいた。ネパールで長年活動された上智大学総合グローバル学部准教授田中雅子先生には、「ネパールの社会・文化・女性と開発」と題して、ネパールにおける女性に関する社会的排除と政治的「包摂」の実態と課題、またご自身が関わっておられた人身売買当事者団体 Shakti Samuha の活動についてお話しいただいた。

学部生、大学院生、附属高校生など 19 名が参加し、参加学生からは、バングラデシュについては、「縫製工場で働く女性たちを一方的にかわいそうだと思わないように、という先生のお言葉が一番の収穫だった」、バングラデシュで縫製された衣服を買い、着る「自分に出来ることはなんだろうととても考えさせられました」などの感想が寄せられた。ネパールについては、「人種が多様であること、カーストが強く残っていることに驚き、それを克服するための「包摂」について考察を深められた」という意見や、人身取引について「少ない選択肢の中での選択は自己決定と言えるのか、との問いに向き合うことができた」など、特に調査実習に参加する学生には非常に良い事前準備となった。

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」
スタディツアー（バングラデシュ、ネパール）
実施報告書

2014 年 12 月
お茶の水女子大学グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
Tel/Fax: 03-5978-5546
Email: info-cwed@cc.ocha.ac.jp

